

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XVII

1997年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 **III**

2001. 3

本書では古墳～飛鳥時代の集落跡や長原207号墳などの調査成果を報告する。

古墳時代の集落跡では、溝や柵によつて堅穴住居と掘立柱建物が区切られた状態で検出された。堅穴住居がある西側には井戸があり、溝からは製塙土器が多く出土していることから、厨房のような空間であったと思われる。機能的な空間分割の一例であろう。

長原207号墳は一辺8mに復元できる小方墳である。主体部は残っていなかつたが、墳丘の構築過程がよくわかった。

飛鳥時代の集落跡は「馬池谷」の東西両岸で調査され、西側では飛鳥時代前半の掘立柱建物5棟、堅穴住居1棟が、東側ではこれと同時期かやや先行する遺構が検出された。前者の建物群に後出する建物群はさらに500m南西の瓜破遺跡東南部で見つかっており、拠点を徐々に西に移していく状況が読みとれる。

また、遺物では奈良時代の流路から鉄鎌が柄に装着された完全な姿で出土したり、「馬池谷」の東斜面では和同開珎に加え、奈良時代の鞍馬が出土したことも特筆されよう。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XVII

1997年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会



97-60次調査で出土した奈良時代の鉄鋤

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XVII

1997年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果を収録した『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズの17冊目に当る。

1981年以来継続して行われてきた区画整理事業が終盤を迎え、調査箇所は長原遺跡西部に集中した。今回報告する1997年度は、古墳時代から飛鳥時代にかけての集落跡や長原207号墳を調査した。特に、「馬池谷」西側では飛鳥時代の建物群が確認され、この時代に付近一帯の土地開発を主導した人々の実態に一歩近づけたのではないかと思われる。このように調査面積は過去に比して減少してはいるものの、得られた成果は決して遜色のないものである。

こうした成果をより一層深く探究し、連続した歴史として再構成することは我々の重要な課題である。過去の調査例をふまえつつ、より充実した長原地域の歴史を提示できる日も遠いことではあるまい。

長原・瓜破地域の歴史解明にこの区画整理事業に伴う発掘調査が果たした役割ははかりしれない。末筆ではあるが、発掘調査および報告書作成にあたって、多大なるご協力とご理解を賜った関係諸機関ならびに各位に心よりお礼申し上げる。

2001年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇田 修

例　　言

- 一、本書は大阪市建設局長吉瓜破区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1997年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査部長永島暉臣様の指揮のもとで、調査課大庭重信・辻美紀・寺井誠・村元健一が行った。各調査の地番・面積・期間・担当者は表1に記した。
- 一、木製品および金属製品の保存処理は調査課伊藤幸司・鳥居信子が行った。
- 一、本書は、上記調査員との検討や調査記録をもとに主として調査課寺井・小田木富恵美・村元が、第3章第1節については寺井が執筆した。英文要旨の作成はワシントン州立大学のMatthew W. Van Pelt氏が行った。本書の編集は各執筆者の協力を得て、寺井・小田木・村元が行った。
- 一、遺構写真は主として担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は億永潤治氏に委託した。
- 一、動物遺体については奈良国立文化財研究所の松井章氏にご教示頂いた。記して感謝する。
- 一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

凡　例

- 一、本書において用いる地層名は原則的に各調査ごとに個別に記載する。長原遺跡の標準層序との対比は[趙哲済2001]に基づいて行い、標準層序の表記は、文中では長原○層とし、図表等ではNGO層とした。現段階の標準層序は別表1(126・127頁)に示した。また、断面図における粒径表記も同文献に従った。
- 一、各調査の記載の冒頭に載せた層序表での、各々の地層における遺構欄で用いた記号は、▲=上面検出遺構、←=地層内検出遺構、▼=下面検出遺構、↓=基底面検出遺構をそれぞれ示している。
- 一、遺構検出面の層序関係に基づく呼称および形成過程に基づく呼称は、[趙1995]に従って行った。
- 一、遺構名の表記には、塀・橋(SA)、掘立柱建物・堅穴住居(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、ピット(SP)、畦畔(SR)、その他の遺構(SX)の略号を用いた。略号の後ろには各調査次数ごとの通し番号を付し、遺構の大まかな検出層準が区別できるように、長原4層層準の溝にはSD4〇〇、長原7層層準の土壙にはSK7〇〇のように表記した。
- 一、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇〇mと表記する。また、挿図中の方位は座標化を示し、座標値は国土平面直角座標(第VI系)の値である。
- 一、遺物実測図において、黒色土器A類では内面、同B類では内外面にスクリントーンを付した。
- 一、本書で頻繁に用いた土器暦年は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。石器：[菅葉太郎1995]、弥生土器：[佐原眞1968]、円筒埴輪：[川西安幸1978]、古墳・飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1966]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会編1992]、平安時代の土器：[佐藤篤1992]、瓦器：[森島康雄1995]

本文目次

附文

例言

第Ⅰ章 調査の経過と概要	1
第1節 1997年度の発掘調査と報告書の作成	1
1)発掘調査	1
2)報告書の作成	2
第2節 発掘調査の経過と概要	3
1)長原遺跡西地区	3
i)97-8次調査	ii)97-55次調査
2)長原遺跡西南地区	4
i)97-18次調査	ii)97-49次調査
iii)97-29次調査	iv)97-60次調査
3)長原遺跡南地区	7
第Ⅱ章 長原遺跡西地区的調査結果	9
第1節 97-8次調査	9
1)層序とその遺物	9
i)層序	ii)各層出土の遺物
2)遺構とその遺物	13
i)江戸時代	ii)平安～室町時代
iii)奈良時代	iv)古墳時代
3)小結	37
第2節 97-55次調査	40
1)層序とその遺物	40
i)層序	ii)各層出土の遺物
2)遺構とその遺物	45
i)奈良時代	ii)古墳時代
3)小結	49
第Ⅲ章 長原遺跡西南地区的調査結果	51
第1節 97-18・49次調査	51

1) 層序とその遺物	51	
i) 層序	ii) 各層出土の遺物	
2) 造構とその遺物	58	
i) 江戸時代	ii) 鎌倉～室町時代	
iii) 平安時代	iv) 飛鳥時代	
3) 小結	74	
i) 平安時代	ii) 飛鳥時代	
第2節 97-29次調査	81	
1) 層序とその遺物	81	
i) 層序	ii) 各層出土の遺物	
2) 造構とその遺物	84	
i) 平安～江戸時代	ii) 古墳時代	
3) 小結	89	
第3節 97-60次調査	90	
1) 層序とその遺物	90	
i) 層序	ii) 各層出土の遺物	
2) 造構とその遺物	96	
i) 江戸時代	ii) 平安～鎌倉時代	iii) 奈良時代
iv) 古墳～飛鳥時代	v) 弥生時代	vi) 旧石器～縄文時代
3) 小結	115	
第IV章 長原遺跡南地区の調査結果	117	
第1節 97-36次調査	117	
1) 層序とその遺物	117	
i) 層序	ii) 各層出土の遺物	
2) 造構とその遺物	120	
i) 奈良時代	ii) 古墳時代	
3) 小結	123	
別表	126	
引用・参考文献	128	
あとがき・索引		
英文要旨		
報告書抄録		

原色図版目次

長原遺跡出土の古墳時代遺物

上：97-8次調査で出土した須恵器・土師器

下：97-60次調査で出土した韓式系土器

図版目次

- 1 長原遺跡西地区97-8次調査 地層断面・中～近世の遺構
上：南壁断面(北西から)
下左：SX201・202完掘状況(西から)
下右：SD403完掘状況(南から)
- 2 長原遺跡西地区97-8次調査 古墳～平安時代の遺構
上：第5a層下面遺構検出状況(西から)
中：SD601鉄製品出土状況(北から)
下：古墳～奈良時代遺構検出状況(西から)
- 3 長原遺跡西地区97-8次調査 古墳時代の遺構
上：古墳時代遺構完掘状況、SD705以東(西から)
下：古墳時代遺構完掘状況(西から)
- 4 長原遺跡西地区97-8次調査 古墳時代の遺構
上：SB707(南から)
中：SD705断面(南から)
下：SE701(南東から)
- 5 長原遺跡西地区97-55次調査 地層断面・奈良時代の遺構
上：西壁断面(北から)
下：第6ai層上面遺構検出状況(南から)
- 6 長原遺跡西地区97-55次調査 古墳～奈良時代の遺構
上：SD601完掘状況(東から)
下：第7層基底面遺構完掘状況(北から)
- 7 長原遺跡西南地区97-18・49次調査 中～近世の遺構
上：近世の土砂採掘痕(南から)
下：中世の耕作遺構(北から)
- 8 長原遺跡西南地区97-18・49次調査 平安時代・大型哺乳類の足跡
上左：平安時代の遺構検出状況(東から)
上右：平安時代の遺構完掘状況(東から)
下左：長原15・16層断面(西から)
下右：大型哺乳類足跡化石(北から)
- 9 長原遺跡西南地区97-18・49次調査 飛鳥時代の遺構
上：飛鳥時代の遺構(南から)
中：SB706(南から)
下：SB702柱穴断面(北から)
- 10 長原遺跡西南地区97-18・49次調査 飛鳥時代の遺構
上：SB701(手前)とSB702(北から)
下：SB703(手前)とSB704(北から)
- 11 長原遺跡西南地区97-29次調査 地層断面・古墳時代の遺構
上：西壁地層断面(北から)
下：第7層下面遺構完掘状況(北から)
- 12 長原遺跡西南地区97-29次調査 古墳～江戸時代の遺構
上左：SD201完掘状況(北から)
上右：SB401完掘状況(南から)
下：SD703検出状況(西から)
- 13 長原遺跡西南地区97-60次調査 地層断面・近世の遺構
上：Ⅲ区西壁地層断面(東から)
下：第2層下面遺構完掘状況(南から)
- 14 長原遺跡西南地区97-60次調査 平安～鎌倉時代

- の遺構
- 上：第6層上面遺構検出状況(南から)
- 下：SX401検出状況(東から)
- 15 長原遺跡西南地区97-60次調査 奈良時代の遺構
- 上：SD601(北から)
- 中：SD601鉄鏃出土状況(東から)
- 下：SR601(東から)
- 16 長原遺跡西南地区97-60次調査 古墳-飛鳥時代の遺構
- 上：第9層基底面検出遺構(南から)
- 中：SX701遺物出土状況(南から)
- 下：SX704遺物出土状況(北から)
- 17 長原遺跡南地区97-36次調査 地層断面・長原207号墳
- 上：南壁地層断面(北から)
- 下：長原207号墳(東から)
- 18 長原遺跡南地区97-36次調査 長原207号墳
- 上：長原207号墳(西から)
- 下：長原207号墳墳丘断面(東から)
- 19 長原遺跡西地区97-8次調査 出土遺物
- 20 長原遺跡西地区97-8次調査 出土遺物
- 21 長原遺跡西地区97-8次調査 出土遺物
- 22 長原遺跡西地区97-8次調査 出土遺物
- 23 長原遺跡西地区97-8次調査 出土遺物
- 24 長原遺跡西地区97-55次調査 出土遺物
- 25 長原遺跡西地区97-55次調査 出土遺物
- 26 長原遺跡西南地区97-18-49次調査 出土遺物
- 27 長原遺跡西南地区97-18-49次調査 出土遺物
- 28 長原遺跡西南地区97-29次調査 出土遺物
- 29 長原遺跡西南地区97-60次調査 出土遺物
- 30 長原遺跡西南地区97-60次調査 出土遺物
- 31 長原遺跡西南地区97-60次調査 出土遺物
- 32 長原遺跡西南地区97-60次調査 出土遺物
- 33 長原遺跡西南地区97-60次調査 出土遺物
- 34 長原遺跡西南地区97-60次調査 出土遺物
- 35 長原遺跡西南地区97-60次調査 出土遺物
- 36 長原遺跡南地区97-36次調査 出土遺物

挿 図 目 次

図1 土地区画整理事業実施範囲と調査地	2	図35 各層出土の石器および石製品	44
図2 長原遺跡西地区および西南地区の調査位置	3	図36 奈良時代の遺構平面図	45
図3 97-18・49次調査区配置図	4	図37 古墳～奈良時代の遺構平面図	46
図4 97-29次調査区配置図	5	図38 第6c層出土遺物	47
図5 97-60次調査区配置図	6	図39 和同開珎拓影	47
図6 長原遺跡南地区的調査位置	7	図40 SD601出土木製品	48
図7 97-8次調査区南壁・西壁断面図	10	図41 SB701出土須恵器	49
図8 各層出土遺物	11	図42 97-18次調査区東壁断面図	52
図9 各層出土石器	12	図43 深掘りトレンチの位置と東壁断面図	54
図10 SD403実測図	13	図44 各層出土遺物	55
図11 痞町～江戸時代の遺構平面図	14	図45 各層出土の石製品および石器	56
図12 平安・鎌倉時代の遺構平面図	15	図46 江戸時代の遺構平面図	57
図13 古墳～奈良時代の遺構平面図	16	図47 鎌倉～室町時代の遺構平面図(1)	58
図14 SD601出土の鉄製品	17	図48 鎌倉～室町時代の遺構平面図(2)	59
図15 SD601～604断面図および出土遺物	17	図49 平安時代の遺構平面図および	
図16 SB701・702実測図	18	SB401・402実測図	60
図17 SB703・704、SA701実測図および		図50 SK401断面図	61
SB704出土遺物	19	図51 SK401、SD401・404出土遺物	62
図18 SB705・706実測図	20	図52 SD401・403断面図	63
図19 SB707実測図	22	図53 SD401出土の砥石	63
図20 SB707出土遺物	23	図54 飛鳥時代の遺構平面図	65
図21 SD703・704実測図および出土遺物	25	図55 SB701実測図	66
図22 SD705・SA702実測図	26	図56 SB702実測図	67
図23 SD705出土遺物(1)	28	図57 SB703・704実測図	68
図24 SD705出土遺物(2)	29	図58 SB705実測図	69
図25 SD705出土遺物(3)	30	図59 SB706実測図	70
図26 SD705出土製塙土器	31	図60 飛鳥時代の溝断面図	71
図27 SK701・702実測図およびSK702出土遺物		図61 飛鳥時代の各遺構出土遺物	72
.....	32	図62 調査地周辺の飛鳥時代の遺構	76
図28 SE701、SK706・707実測図	33	図63 97-29次調査区西壁断面図	82
図29 SE701、SK704～706出土遺物	35	図64 各層出土遺物	83
図30 SK707出土遺物	36	図65 SB401実測図	85
図31 周辺の古墳時代遺構分布図	37	図66 平安～江戸時代の遺構平面図	85
図32 97-8次調査区の遺構変遷図	38	図67 古墳時代の遺構平面図	86
図33 97-55次調査区西壁・南西壁断面図	41	図68 SB701実測図	86
図34 各層出土遺物	43	図69 SD701～703断面図	87

図70 古墳時代の遺構出土土器	88	図83 SX701出土遺物(3)	106
図71 97-60次調査区西壁断面図(I~V区)	92	図84 SX702・703出土遺物	108
図72 各層出土遺物	94	図85 SX703実測図	109
図73 各層出土石器遺物	95	図86 SX704韓式系土器出土状況	110
図74 江戸時代の遺構平面図および VI区東壁断面図	97	図87 SX704出土韓式系土器	110
図75 平安~鎌倉時代の遺構実測図	99	図88 SK703実測図	111
図76 奈良時代の遺構平面図	100	図89 SK703出土土器	112
図77 SD601出土の鉄鋸	100	図90 石器遺物出土位置	113
図78 弥生~飛鳥時代の遺構平面図	101	図91 第15層出土石器遺物	114
図79 SB701実測図	102	図92 97-36次調査区南壁断面図	118
図80 SX701・702実測図	103	図93 各層出土遺物	119
図81 SX701出土遺物(1)	104	図94 奈良時代の遺構平面図	120
図82 SX701出土遺物(2)	105	図95 長原207号墳実測図	121

表 目 次

表1 1997年度土地区画整理事業に伴う 発掘調査一覧	1	表5 長原遺跡西部地区の飛鳥時代建物	75
表2 97-8次調査の層序	9	表6 周辺遺構の時期と建物群の変遷	79
表3 97-55次調査の層序	40	表7 97-29次調査の層序	81
表4 97-18・49次調査の層序	53	表8 97-60次調査の層序	91
		表9 97-36次調査の層序	117

別 表 目 次

別表1 長原遺跡の標準層序2001	126
-------------------	-----

写 真 目 次

写真1 97-18次調査区調査風景	5	写真7 SB402柱穴断面	61
写真2 97-29次調査区調査風景	7	写真8 SK401地層断面	61
写真3 97-36次調査区調査風景	7	写真9 SK701土器出土状況	89
写真4 SD705土器出土状況	27	写真10 水流により抉られたSR403	98
写真5 和同開塚出土状況	47	写真11 長原207号墳須恵器出土状況	122
写真6 97-18次調査区地層断面	51		

第Ⅰ章 調査の経過と概要

第1節 1997年度の発掘調査と報告書の作成

1) 発掘調査

1997年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査は7件で、発掘総面積は2,532m²であった(図1、表1)。そのうち長原遺跡西地区が2件398m²、西南地区が4件2,062m²、南地区が1件72m²である。瓜破遺跡内での調査は実施しなかった。

現場での作業は4月8日に開始し、1998年3月31日に終了した。各調査とも基本的には現代盛土および作土を重機により、それ以下を人力で掘削し、遺構の精査に努めた。また、調査深度が大きい場合は必要に応じ、H鋼と横矢板を用いて土留め工事を実施した。検出した遺構・遺物は担当調査員のもと写真・実測による記録を行い、必要な遺物については保存処理を行った。各調査の担当者・調査面積・調査期間は表1のとおりである。

なお、発掘調査次数は、長原遺跡の遺跡略号である「NG」のあとに年度、続いてその年度における開始順による通し番号を付し、整理の便宜をはかっているが、本報告で報告する調査はすべて「NG」を冠していることから、これを省略している。ただし、今回の土地区画整理事業以外の調査成果について言及する際は遺跡略号を用いることにする。

表1 1997年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
長原遺跡西地区				
NG97-8次	252m ²	平野区長吉長原西3丁目	寺井誠	1997年4月8日～1997年9月19日
NG97-55次	146m ²	同 長吉長原2丁目	寺井誠	1997年11月19日～1998年2月7日
長原遺跡西南地区				
NG97-18次	1,322m ²	同 長吉長原西3丁目	大庭重信・辻美紀・寺井誠・ 村元健一	1997年5月12日～1997年12月16日 1998年3月9日～1998年3月31日
NG97-49次	165m ²	同 長吉長原西3丁目	辻美紀・寺井誠	1997年10月8日～1997年11月28日
NG97-29次	150m ²	同 長吉長原西3丁目	村元健一	1997年6月17日～1997年10月15日
NG97-60次	425m ²	同 長吉長原西3丁目	村元健一	1997年12月3日～1998年3月31日
長原遺跡南地区				
NG97-36次	72m ²	同 長吉川辺1丁目	寺井誠	1997年8月1日～1997年10月3日

2) 報告書の作成

遺物の洗浄・マーキング・接合などの作業、図面・写真資料の基本的な整理作業は、発掘調査終了後ただちに調査担当者のもとで行った。その後、調査担当者が作成した資料を基礎として、1999年度に報告書の作成に伴う図面・写真・遺物などの整理作業を実施した。なお、本報告書は寺井・小田木・村元の3人が討議の上で編集した。

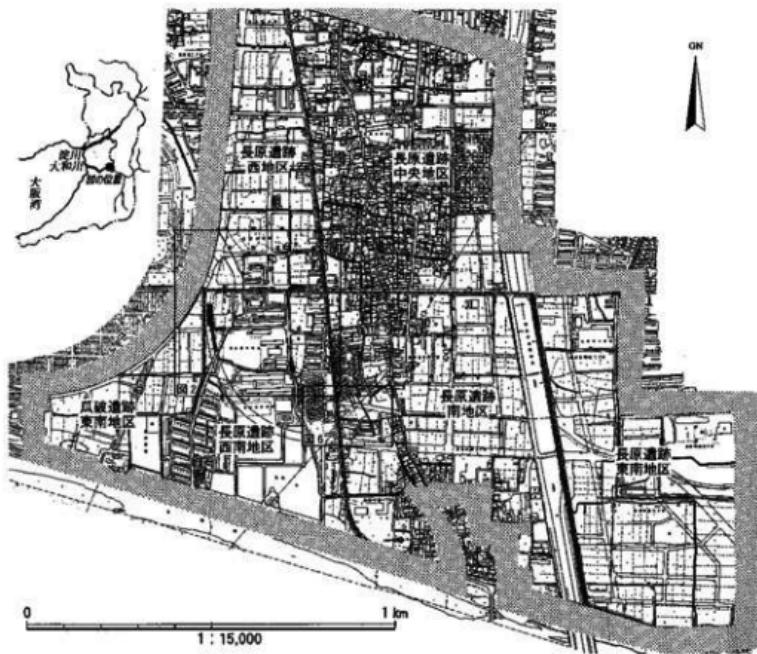


図1 土地区画整理事業施行範囲と調査地

第2節 発掘調査の経過と概要

1)長原遺跡西地区(図2)

この地区では「馬池谷」と呼称する開析谷の存在が明らかになっている。本年度では谷の東斜面に相当する97-8・55次の2件の調査を行った。

i)97-8次調査

幅20mの計画道路内に東西44m、南北6mの調査区を設定した。西隣のNG96-32・71次調査では、調査区全体が「馬池谷」の中に当ったため、本調査区でも東から西にかけて下降する地形が予測された。そのため4月8日よりH鋼を打設して、重機掘削時における地盤崩壊の危険性を回避した上で、5月1日に重機で現代盛土および現代作土を除去する作

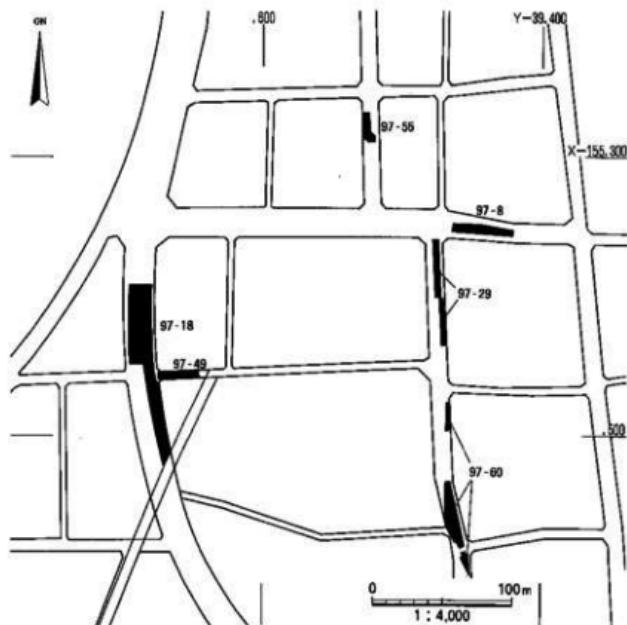


図2 長原遺跡西地区および西南地区の調査位置

業を開始した。重機掘削後はすべて人力で掘削し、遺構の精査に努めた。その結果、中近世の耕作遺構および古墳時代の集落跡を検出するに至った。8月1日に記録作業を終了した後、埋戻しおよびH鋼の引き抜きを行い、9月19日にはすべての復旧作業を完了した。

ii) 97-55次調査

幅約8mの計画道路に、南北21m、東西6mの調査区を設定した。北ではNG86-41次、

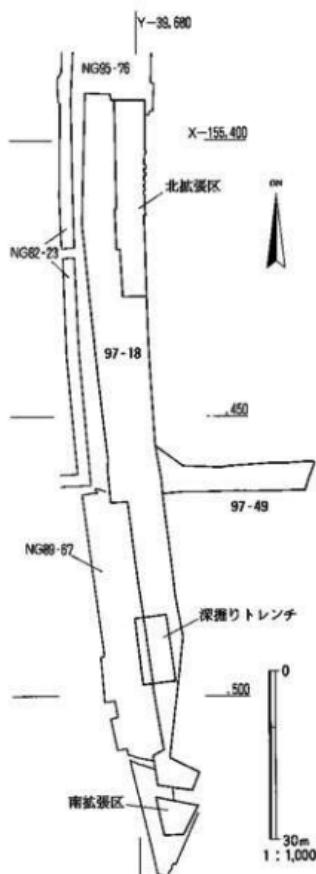


図3 97-18・49次調査区配置図

南ではNG95-49次調査を実施しており、その調査結果から「馬池谷」の東斜面に当ることが想定された。よって、調査面がかなり深くなることが考えられ、調査に先立ちH鋼を打設した上で、12月3日から3日間かけて重機で現代盛土および近世の作土を除去した。これ以降は人力で掘削し、各面での精査を行った。その結果、奈良時代および古墳時代の遺構を検出した。翌1998年1月30日には記録作業を終え、2月7日までに埋戻しを含むすべての作業を完了した。

2) 長原遺跡西南地区(図2)

当地区では南北に「馬池谷」が延び、その西側の瓜破台地では飛鳥時代の建物群が検出されている。本年度の調査は97-18・49次がこの地域に相当する。また、「馬池谷」の東側では97-29・60次の調査を行った。

i) 97-18次調査(図3、写真1)

本調査区は幅20mの南北方向の計画道路の東半分に相当する。過去に西隣でNG89-67次、北隣ではNG95-76次調査を実施しており、飛鳥時代の掘立柱建物群を確認している。今回の調査は5月12日より重機によって現代作土までを除去し、それ以降は人力で掘削した。12月16日までに埋戻しを含む作業を一旦終了した。調査の結果、中世の耕作遺

構、飛鳥時代の掘立柱建物・溝を検出した。一部の建物が当初設定された調査区の外に延びることから、その範囲確認と、建物群の南側への拡張を確認するために、南北の2箇所を拡張し、調査を行うことになった。拡張調査は3月9日から3月31日まで行われ、調査区北半で飛鳥時代の建物の全体を検出することができた。

ii) 97-49次調査(図3)

本調査区は幅8mの東西方向の計画道路に位置する。調査区は西側が97-18次調査と重なる形で設定し、南北6m、東西26mを測る。10月8日より、重機で現代作土を除去、中世～近世の作土基底面で造構の検出を行い、11月28日までにすべての作業を終了した。その結果、西側に拡がる飛鳥時代の建物群に係る造構ではなく、平安時代の掘立柱建物・溝・土壤を検出した。

iii) 97-29次調査(図4、写真2)

調査区は幅12mの南北方向の計画道路の東半分に設定したが、5月20日に南北2箇所で行った試掘の結果、調査区の南西から北東にかけて暗渠が設置されていることが判明し、これを避ける形で南北2箇所で調査を行うことになった。北側のI区は南北39m、幅3mの範囲しか確保できなかった。調査区が狭いこともあり、安全を期するためにH鋼、横矢板による土留め工事を行うことになった。6月17日よりH鋼の打設を行い、重機により現代作土まで掘削したあと、人力で長原4B層相当より上



写真1 97-18次調査区調査風景

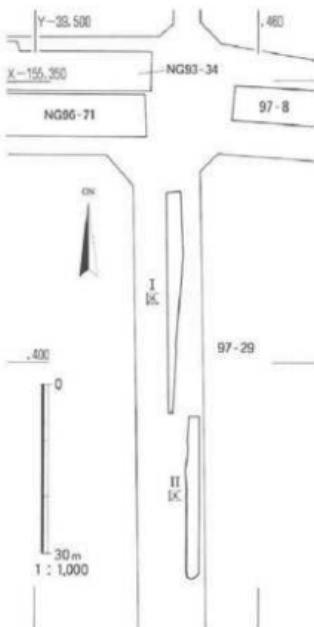


図4 97-29次調査区配置図

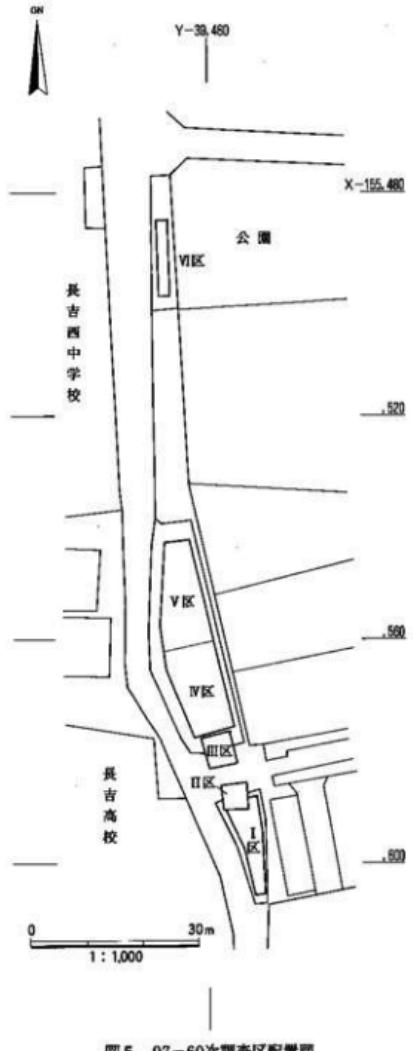


図5 97-60次調査区配置図

の地層を除去し、そこから平面的な調査を開始した。北半では長原5層で埋没する深い落込みにかかり、限界掘削深度を越えたため、調査はおもに南半分で行うことになった。I区では、近世から古代にかけての耕作遺構と古墳時代の建物、溝を検出した。I区は8月8日より埋戻しを開始し、引き続いてII区の土留め工事を行った。調査は8月25日より開始し、9月30日に終了、10月15日までに埋戻しを含むすべての作業を終了した。II区では大半が近世以降の用水路と土砂の採掘により大規模な削平を受け、東北部にわずかに長原2層以下の堆積を認めることができた。調査の結果、近世の用水路、古墳時代の溝、掘立柱建物を確認することができた。

iv) 97-60次調査(図5)

調査区は幅12mの南北方向の計画道路に設定した。近隣の住宅、耕作地への通路確保のため調査区をいくつかに分けて調査を進めた。12月3日より南端のI区の土留め工事を開始した。工事終了後、重機により現代作土を除去し、以下を人力で掘削した。本調査区では、中世までの耕作遺構と古代の流路を確認し、1998年2月5日までに埋戻しを含むすべての作業を終了した。IV・V区は12月24日から重機掘削により現代作土を除去し、以下を人力で掘削した。調査の結果、弥生

から飛鳥時代の遺構を確し、1998年3月4日までにすべての作業を終えた。さらに2月23日よりI区、IV区の間に新たに調査区を設け調査することになったが、中央に埋設管が入っていること、先行して実施したI区の北端が非常に深くなることから、II・III区ではシートパイルによる土留め工事を行った。また、平行してV区の約40m北の地点に調査区を設定してVI区とし、H鋼による土留め工事を行った。II・III区では長原4B層相当層より平面的な調査を開始し、古代までの耕作遺構を確認した。本調査区では古代の着柄された鉄鎌が出土している。なお、VI区では近世の土砂探掘壕により、近世以前の遺構を確認することはできなかった。本次調査は3月31日をもってすべての作業を終了した。

3) 長原遺跡南地区(図6、写真3)

当地区は長原古墳群の分布域に重なる。本年度は一ヶ塚古墳から約50m北に位置する97-36次調査が実施された。

調査区は幅8mの東西方向の計画道路に、東西35m、南北2mの調査区を設定した。先述したように調査区周辺では古墳が多く調査されており、本調査においても古墳



図6 長原道路南地区的調査位置



写真2 97-29次調査区調査風景



写真3 97-36次調査区調査風景

の検出が予想された。

調査区が狭いうえに、長原5層の砂層が流出する危険を回避するために、安全を期して8月1日よりH鋼による土留め工事を行った。調査は同月18日より重機掘削を開始し、現代客土を除去したが、この時点では古墳の墳丘を確認したため、これを避けながら長原5層までを重機で掘削し、以下を人力で掘削した。調査の結果、古墳は1辺8mに復元できる方墳であり、主体部こそ確認できなかったものの、墳丘の築造工程などが明らかになった。この古墳は長原遺跡で発見された207番目の古墳となる。調査は10月3日までにすべての作業を終了した。

第Ⅱ章 長原遺跡西地区の調査結果

第1節 97-8次調査

1)層序とその遺物

調査区の層序は現代客土層の下に現代から平安時代までの作土層が続き、段丘構成層となる。旧地形は北東から南西にかけて緩やかに下降するため、地層は南西にいくにつれ厚くなる。以下に各層の状況を述べる。

i)層序(図7、表2、図版1)

表2 97-8次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	特徴	同級遺物
NG0	0	現代客土	≈140		陶器片・瓶底器・土器等		
NG2	1	灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質粗粒砂	≈10			作土	
	2a	浅黄色(5Y7/4)粗粒砂～細粒	≈30	▼SK201-202	瓦器・瓶底器・土器等・埴輪	水成	
NG3	2b	オリーブ灰色(5GYS1/1)粗粒砂質シルト	≈15			作土	1・2
	3a	灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質粗粒砂	≈10	▼小井	瓦質土器・瓶底器・土器等・埴輪	作土	
NG3b	3b	灰オリーブ色(5YS1/3)粗粒砂質シルト	≈15	▼小井	瓦質土器・瓶底器・土器等・埴輪	作土	3~5
	4a	黄褐色(2.5YS5/0)粗粒砂質シルト	≈20	▼小井	瓦器・瓶底器・土器等	作土	6~8
NG4BII	4b	黄褐色(2.5YS5/0)粗粒砂質シルト	≈15	▼小井, SD401~403	瓦器・瓶底器・土器等・埴輪・株式土器	作土	9~11
	4c	灰オリーブ色(7.5Y3/2)シルト	≈10	▼小井	瓦器・瓶底器・土器等	作土	
NG4CII	5a	黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂	≈20	▼貼込み痕跡	黑色土器・瓶底器・土器等	作土	12・13・18
	5b	暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルト	≈20		黑色土器・瓶底器・土器等・193件	作土	14~17・19・20
NG6AI	6	灰オリーブ色(5Y3/2)シルト	≈10	▲踏込みSD601	瓶底器・土器等		
NG7	7	灰オリーブ色(5Y3/2)粗粒砂質シルト	≈20	▲SD602~604 ▼SB701~707, SE701, SD701~705, SK701~707	瓶底器・土器等		
NG9層以下	8	黄褐色(2.5YS5/0)砂質シルト～粘土	30±				

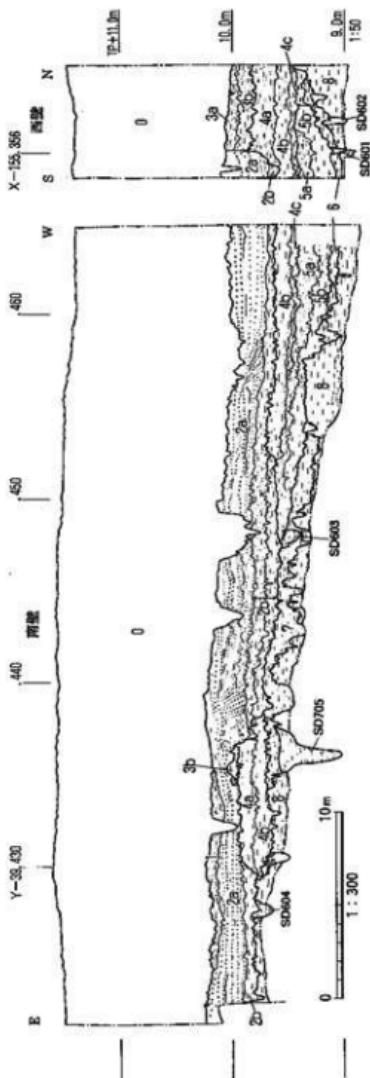


図 7 97-8次調査区南壁・西壁断面図

長原2層に相当するのが第1～2b層である。第1層は作土層で、調査区東半に分布し、下位の第2a層に由来する砂を多く含む。第2a層はSX201・202の産みを埋める水成層である。第2b層は作土層で、SX201・202の底にのみ分布する。

第3a・3b層は長原3層に相当する。いずれも作土層であり、調査区全体に分布するが、南壁ではSX201・202に削られていたため、確認できなかった。各層の下面で耕作溝群を検出した。

第4a層は作土層で、下位の第4b層と比べて砂を多く含む。長原4Bi層に比定される。下面で耕作溝群を検出した。

第4b・4c層は作土層で、長原4Bii層に相当すると思われる。第4b層は調査区全体に分布するが、第4c層は西半のみで確認された。各層の下面で耕作溝群を検出した。

第5a・5b層は長原4Cii層に相当する作土層である。第5a層下面で畦畔の痕跡を確認した。なお第5b層下面付近に粗粒砂が多く見られたが、これは長原5層に由来するものと思われる。

第6層は南東隅にのみ分布する。上面で極粗粒砂で埋る踏込みを確認し、この砂が長原5層ならば、当層は長原6Ai層に比定されよう。当層上面では溝SD601が検出された。

第7層は長原7A層および7Bi層に対応

する地層と思われるが、区分することができなかった。当層上面で奈良時代の溝を、下面で古墳時代の遺構を検出した。

第8層は長原15層以下に相当すると思われる。

ii) 各層出土の遺物(図8・9、図版19)

1・2は第2b層から出土した。1は縦孔のある凝灰岩製の砥石で、研ぎ面が4方向にある。2は瓦質土器甕で、口径が26.0cmある。口縁端部は折り曲げて仕上げており、外面は粗いタタキ、内面はハケが施されている。

3~5は第3b層から出土した。3は口径が26.4cmある瓦質土器甕で、口縁端部は折り曲げて仕上げられている。15世紀頃のものと思われる。外面には粗いタタキが施されている。4・5は瓦器碗である。口縁部はヨコナデ、底部外面はユビオサエで調整する。14世紀に属するものであろう。

6~8は第4a層から出土した。6・7は瓦器碗で、8は土師器皿である。6は底部の高台はない

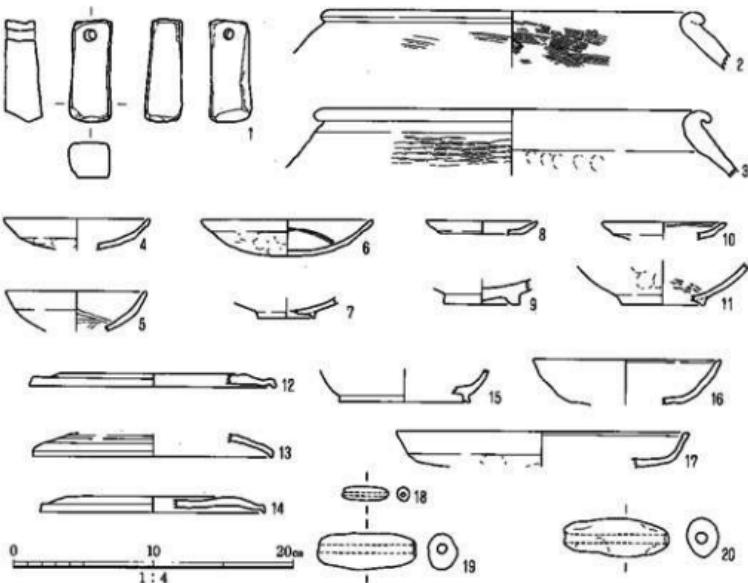


図8 各層出土遺物

第2b層(1・2)、第3b層(3~5)、第4a層(6~8)、第4b層(9~11)、第5a層(12・13・18)、第5b層(14~17・19・20)

く、調整は粗雑である。これらは13世紀後半から14世紀にかけてのものと思われる。

9~11は第4b層から出土した。9は白磁の底部で、直径は5.2cmある。高台は削出しである。10は瓦器Ⅲである。11は瓦器碗で、高台は断面三角形を呈する。Ⅲ期に属するものと思われる。

12・13・18は第5a層から出土した。12・13はいずれも須恵器杯蓋で、12は平城宮土器Ⅲに、13は平城宮土器Ⅰに属するものと思われる。18は土師質の管状土錐で、長さ3.3cm、直径1.0cm、孔径0.3cm、重量は3.0gある。

14~17・19・20は第5b層から出土したものである。14は須恵器杯蓋、15は同杯身である。いずれも平城宮土器Ⅲに属するものであろう。16は口径13.2cm、残存高3.2cmの土師器杯、17は口径20.8cmの土師器皿である。いずれも器表は剥離が激しく、調整は不明である。19・20は土師質の管状土錐である。19は長さ7.1cm、最大径2.6cm、孔径は0.7cm、重量39.6gあり、20は長さ7.5cm、最大径2.7cm、孔径は0.6cm、重量44.7gある。

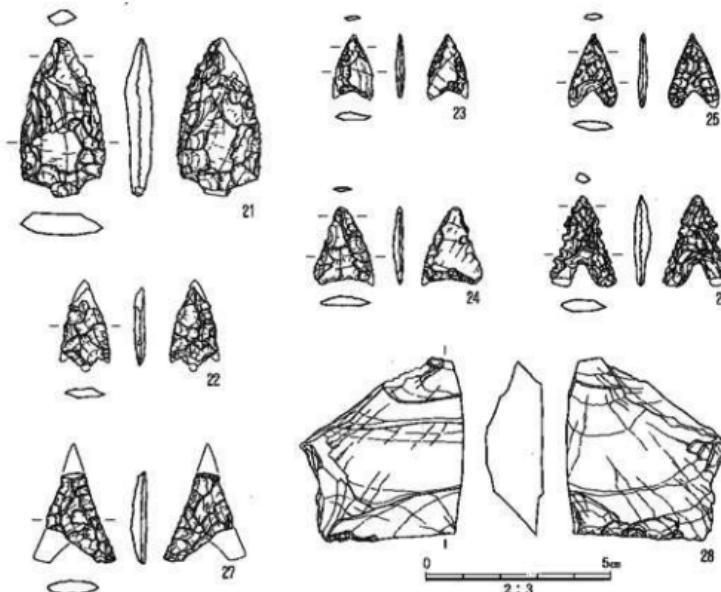


図9 各層出土石器
第3層(24)、第4a層(22)、第4b層(25)、第5b層(21・23・26~28)

また、遺物資料ではあるが、21~28のサヌカイト製の石器が出土した。24は第3層、22は第4a層、25は第4b層、21・23・26~28は第5b層からの出土である。

21・22は凸基有茎式石鎌である。両者とも茎部が欠損している。23~27は凹基無茎式石鎌である。23・24は両面ともに素材とした剥片の剥離面が大きく残り、細部調整は浅く仕上げられる。24の抉りは浅く、平基に近い。25は一方の逆刺を欠く。作用部は緩やかな曲線を描く。細部調整はていねいである。26は作用部を大きな単位で調整し、鋸歯状に仕上げる。27は逆刺の末端が直線的に仕上げられる。細部調整はていねいである。これらの石鎌はその形態と調整の特徴から21・22が弥生時代、23・24が縄文時代晚期、26・27は縄文時代中期、25は縄文時代前半に属するものであろう。28は打点付近で2つに折れた剥片のうち、一方を利用した削器であろう。細部調整は主剥離面の末端付近に施されている。

2) 遺構とその遺物

i) 江戸時代(図11、図版1)

第2a層下面で長方形の落込み

SX201・202を検出した。SX201は調査区南壁付近にある南北約3m、東西28m以上、検出面からの深さが0.3mの落込みで、底に作土層である第2b層が分布し、第2a層の砂礫で埋没していた。SX202は調査区東半の南壁際で検出された。遺構の全容を確認することはできなかったが、埋土の状況から判断してSX201と同様のものであろう。いずれも正東西方向に延びている。条里に規制されたものと思われる。

ii) 平安~室町時代(図11・12)

a) 第3a~4b層下面検出遺構

各層の下面で耕作溝群を検出

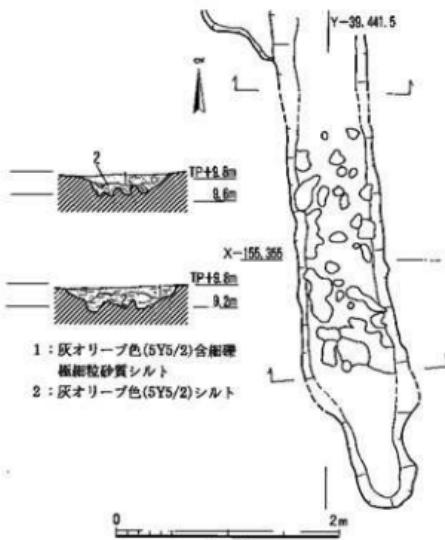


図10 SD403実測図

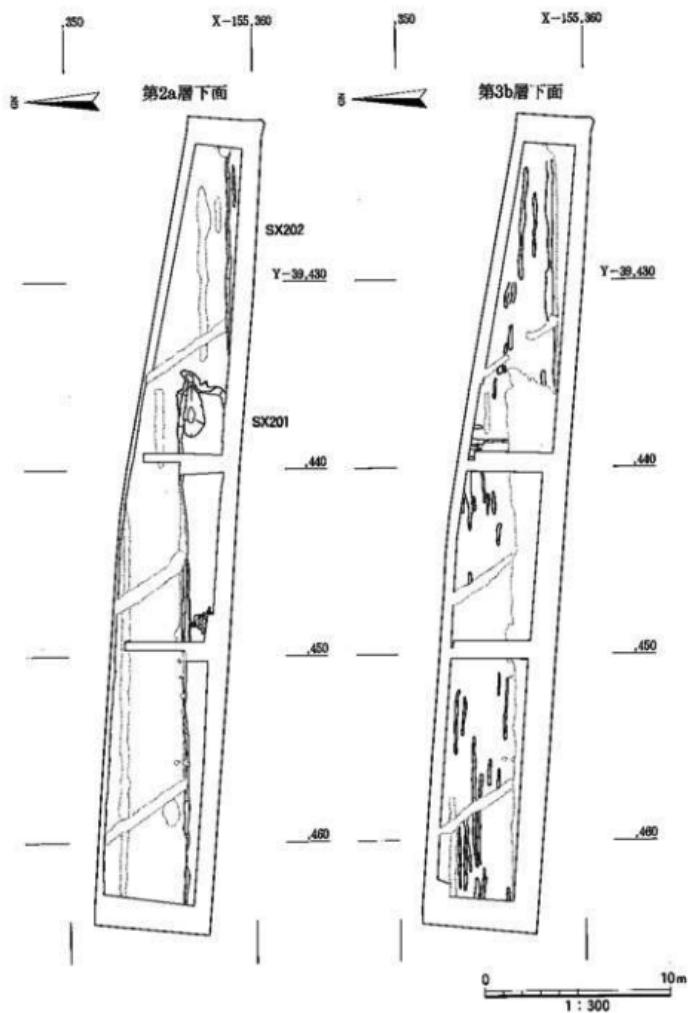


図11 室町～江戸時代の遺構平面図

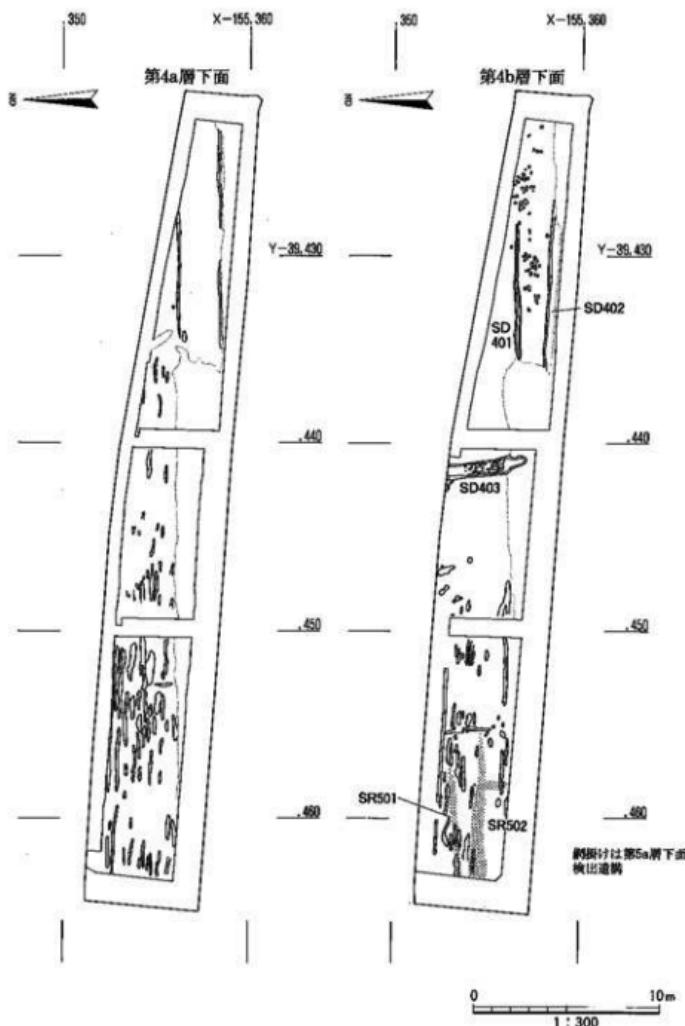


図12 平安・鎌倉時代の遺構平面図

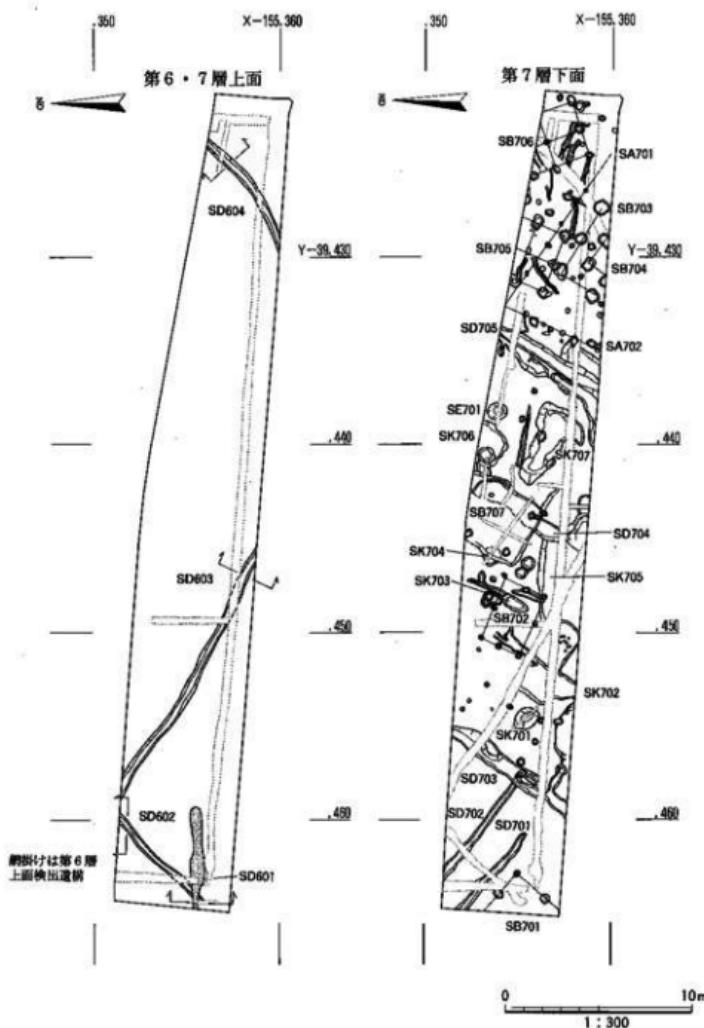


図13 古墳—奈良時代の遺構平面図

し、第3b・4a・4b層下面を図示した。いずれも正東西方向で、条里に規制されたものと思われる。なお、第4b層下面では上記の耕作溝群とは異なり、肩のしっかりした東西方向の溝SD401・402、南北方向の溝SD403を検出した。

SD403(図10、図版1)は幅0.8m、深さ0.2mあり、南部はSX201に削られて確認できない。水成のシルトが堆積していることから、溝水状態にあったと思われる。下面では踏込みが多数確認された。耕作溝の方向と直交し、本来は用水に係わる溝と推定される。

b) 第5a層下面検出遺構(図12、図版2)

調査区の西半で東西方向の畦畔の痕跡SR501・502を確認した。第5a層が耕作されていなかった段階の削り残しと思われる。

iii) 奈良時代(図13~15、図版2)

SD601は調査区の南西隅にわずかに残っていた第6層の上面で検出した溝である。西壁で断面を確認したところ、2段に落ちる溝で、幅は1段目が0.5m、2段目が0.1m、検出面からの深さが0.2mであった。

溝の底近くで鉄製品29が、溝の方向と同じ向きで出土した(図14、図版2・19)。全面の腐食が著しく、元の形状は不明である。図の下部は比較的の残りがよく、厚さ0.4cmあり、断面は長方形である。先端部ほど遺存状態は悪い。鉄刀もしくは鉄剣の可能性が考えられる。

また、第7層上面で溝を3条検出した。時期を決定できるような遺物はほとんど出なかつたが、埋土の状況が比較的よく似ていること、SD603から奈良時代の須恵器杯蓋の細片が出土したことから、これらの

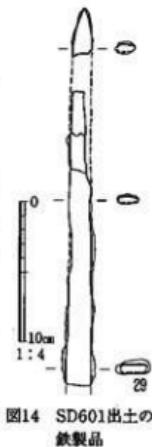


図14 SD601出土の鉄製品

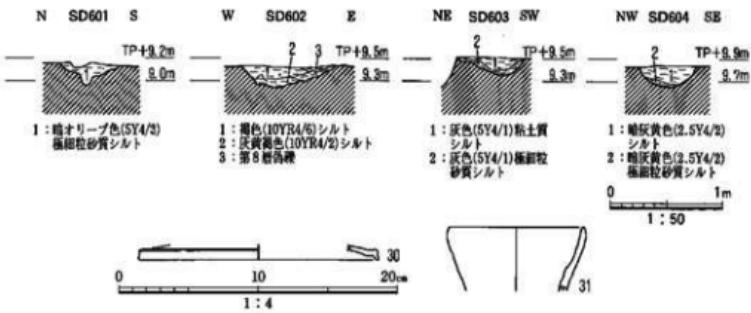


図15 SD601~604断面図および出土遺物
SD603(30)、SD604(31)

溝は奈良時代に属すると判断した。

SD602は調査区西端で検出された溝で、幅0.4m、検出面からの深さは0.2mである。南西→北東方向で、等高線に直交するように延びる。埋土は水成のシルト層である。

SD603は調査区中央で検出された溝で、幅0.4m、検出面からの深さは0.15mである。南東→北西方向で、等高線に平行する。埋土はSD602より粒子の細かい水成のシルト層であった。奈良時代の須恵器杯蓋30が出土した。

SD604は調査区東端で検出された溝である。幅0.4m、検出面からの深さは0.2mで、南西→北東方向に延びている。埋土は粒子の細かい水成のシルト層で、SD603と非常に似

ており、一連の溝である可能性が高い。須恵器壺の口縁部31が出土した。これは飛鳥時代の須恵器平瓶の可能性もある。

iv) 古墳時代(図13、図版2~4)

第7層下面で、古墳時代中期の掘立柱建物6棟、竪穴住居1棟、構2条、井戸1基に加え、多くの溝・土壙を検出した。

a) 掘立柱建物

SB701(図16) 調査区の南西隅に位置する、東西、南北とも1間以上の大規模な掘立柱建物である。柱穴は円形で直径約0.3m、深さ0.3mである。いずれも柱痕跡は確認できなかったが、柱穴の底に直径6~7cmの窪みが残っていた。これを柱位置とするとき、柱間は南北が2.0m、東西が1.4mである。柱穴から須恵器・土師器の細片が出土した。

SB702(図16) 調査区西半に位置する東西2間、南北2間の側柱建物

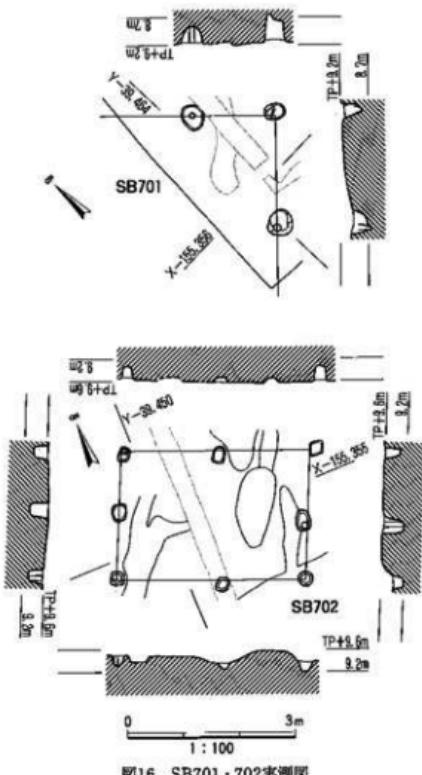


図16 SB701・702実測図

である。柱穴は一辺0.2m程度の隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.2~0.4mである。柱痕跡は東面の中柱と南西の隅柱の柱穴で検出された以外はわからなかった。柱間は柱筋の通るところで計測すると、東西1.7m、南北1.2mある。柱穴からの出土遺物はなかったが、後述するSK705を切っていることから、5世紀末以後の年代が考えられる。

SB703(図17) 東西2間以上、南北1間以上の建物で、南側は調査範囲外に延びる。柱穴は不整形な方形を呈し、一辺0.7m前後、深さは0.4~0.5mである。検出したすべての柱穴に柱を抜き取った痕跡が見られた。柱痕跡は残っていなかったが、北面の西から2番目の柱穴の底に、荷重によってできたと思われる窪みが残っていた。柱間は柱筋を基準に計測すると、いずれも2.1mである。この建物の北側には柱列SA701が平行して延びており、

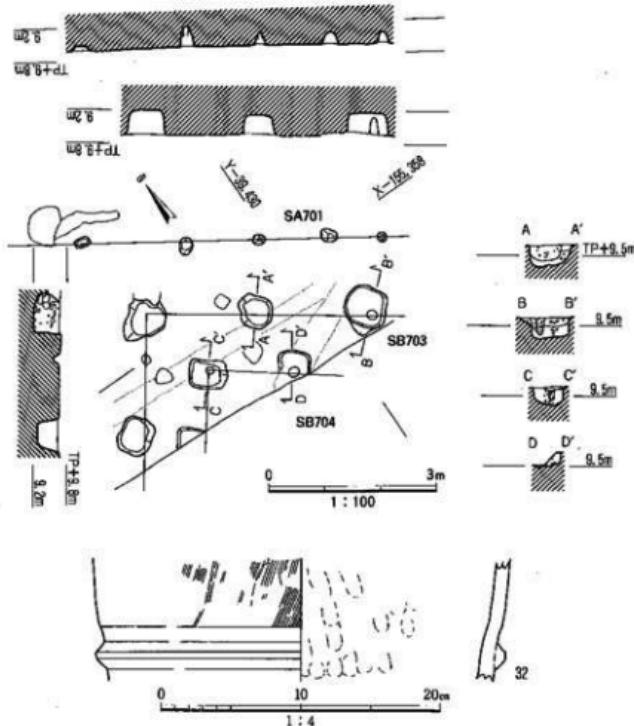


図17 SB703・704、SA701実測図およびSB704出土遺物

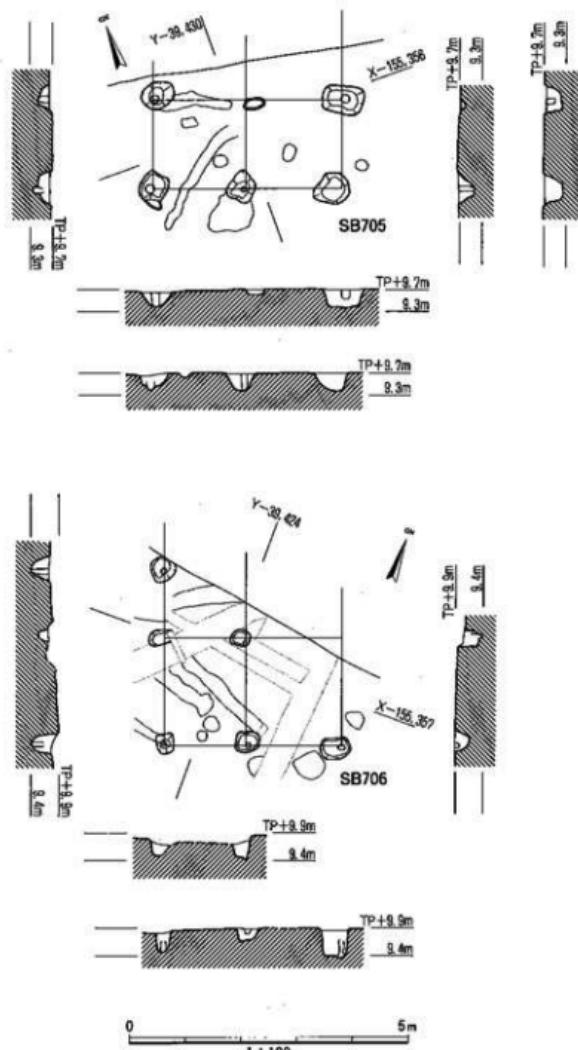


图18 SB705·706实测图

この建物に伴う構と思われる。なお、北西隅の柱穴は後述のSB705の柱穴に切られていることから、SB705より先行する。柱を抜き取った際の埋土中に、MT15型式に該当する須恵器杯蓋の細片が含まれていたことから、建物が機能していたのは6世紀初頭以前である。

SB704(図17) 調査区東半の南壁際で検出した、東西、南北とも1間以上の掘立柱建物である。柱は3基検出されたが、柱筋がほぼ直角であること、柱穴の大きさがほぼ同じ大きさであるということから、同一の掘立柱建物の柱穴と判断した。柱穴は一辺が0.4~0.5mの方形を呈し、深さは0.3m、柱痕跡は直径0.1mある。柱穴の埋土より須恵器・土師器の細片に加え、V期の円筒埴輪32が出土したことから、建物の時期は5世紀末と思われる。なお、当建物とSB703は時期がほぼ同じ頃と推定され、かつ、柱筋が平行で、柱穴の大きさも似ていることから、同一建物であった可能性も指摘しておきたい。

32は断面台形のタガをもつ(図17)。外面はタテハケ、内面はユビナデが観察される。

SB705(図18) 調査区東部に位置する東西2間、南北1間以上の総柱建物で、北側は調査区外に延びる。柱穴は東柱の柱穴のみが0.2m×0.4mの長梢円形で、そのほかはみな一辺約0.6mの隅丸方形であった。一部の柱穴で柱痕跡が認められ、その直径は0.1m前後であった。柱間は東西、南北ともに1.6mである。この建物に平行して、西側に柵SA702および溝SD705が延びていることから、これらの遺構は併存したと思われる。柱穴からはMT15型式と思われる須恵器の細片が出土していることから、建物の時期は6世紀初頭になると思われる。

SB706(図18) 調査区東端に位置する東西2間、南北1間以上の総柱建物である。柱穴は平面形が隅丸方形で、一辺0.3~0.5mある。柱穴には直径0.1m前後の柱痕跡が明瞭に残っていた。柱間は南北2.0m、東西1.5mである。柱穴からは須恵器・土師器の細片が出土した。この中でSD705の下層で出土した須恵器器台63に接合した破片もあった。このことから建物の年代は5世紀末以後と推定される。

b) 積穴住居

SB707(図19、図版4) 調査区中央に位置する、東西3.7m、南北3.9mの積穴住居である。深さは検出面から数cmしかないが、検出面より上で完形の土器群が出土していることから、本来は第7層の途中から掘り込まれていたものと思われる。地層観察用に残していた北壁の断面で貼床を確認することができたが、南側は貼床か住居廃絶後に堆積した埋土なのか判別できなかった。

柱穴は第8層上面近くで4基検出されたが、本来は貼床上から掘り込まれたものと思われ

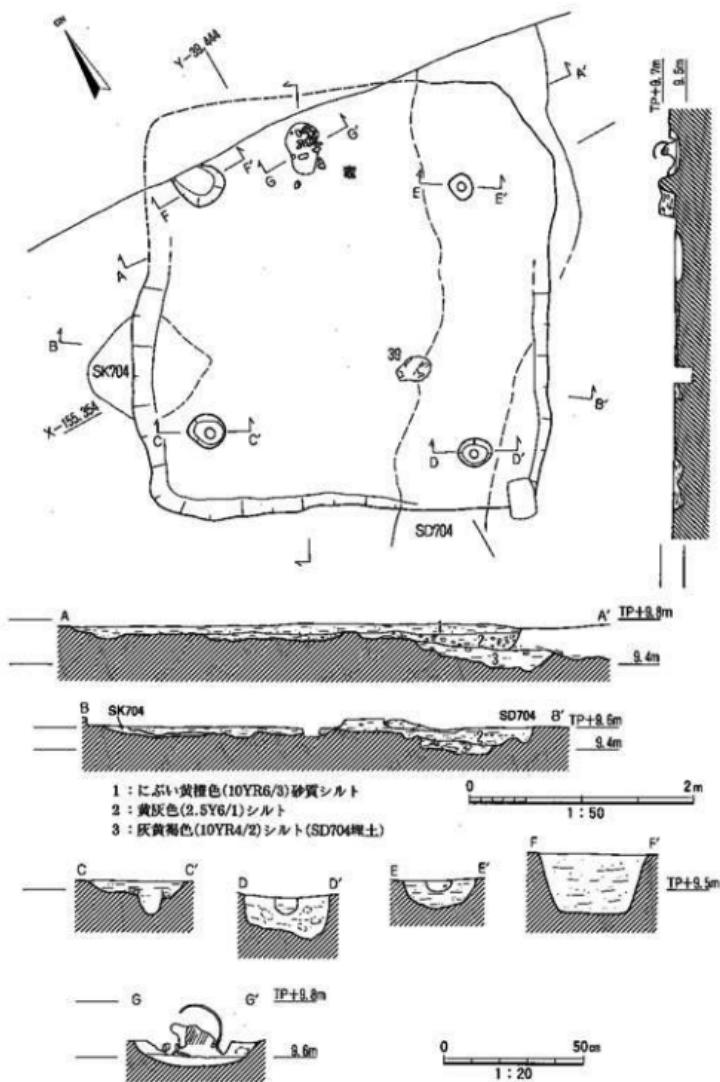


図19 SB707実測図

る。柱穴はいずれも直径0.3m前後の円形であり、3基で0.1m弱の柱痕跡を観察することができた。柱間はいずれも2.4mである。

北壁の付近には焼土面があり、その直上にはほぼ完形の土師器壺38が口縁を下にして据えられていた。その南側には灰を搔き出した跡が確認され、このことから本来は竈が備わっていたことがわかる。竈は旧地形でも標高の高い側に敷設されている。

出土した遺物は33~39である(図20、図版19)。33~36は須恵器である。33~35は杯蓋で口径は12.7~14.0cm、器高は5.0~5.3cmである。TK23型式のものである。36は壺の口縁部である。口径22.2cmで外面にカキメを施し、その上に2条の波状文を巡らす。

37・38は土師器壺である。37は口径10.5cm、器高12.3cmで、調整は内外面ともにハケで

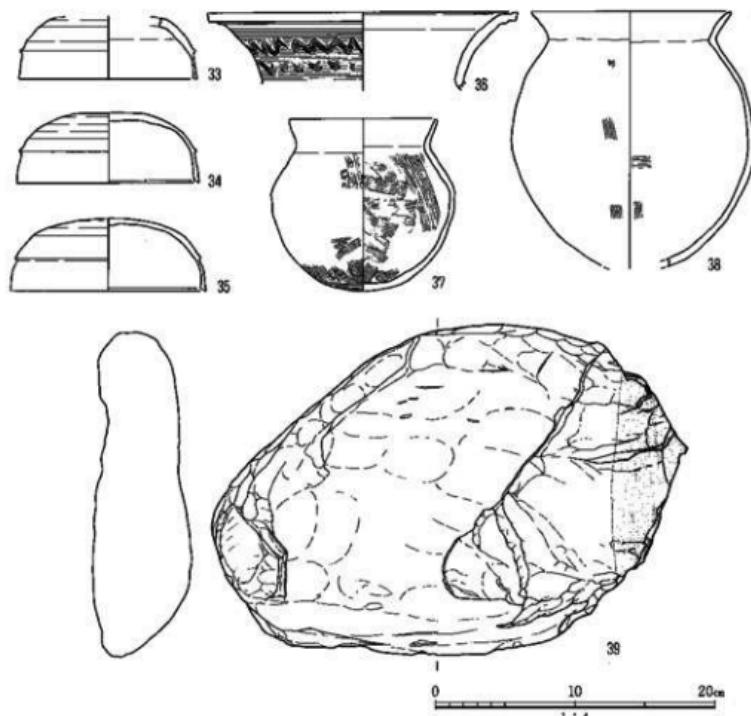


図20 SB707出土遺物

ある。色調は灰白色で、焼成はあまりよくない。38は口径14.1cm、残存高は18.1cmである。表面が磨滅し、調整を観察するのは困難であるが、タテハケがわずかに残っている。いずれも5世紀後半に属するものであろう。

39は安山岩質凝灰岩の平坦な石で、床面直上で出土した。長さ約30cm、幅約20cmある。出土時に上を向いていた面の一部が欠けており、実測図で網掛けで示した部分は被熱して赤変している。おそらく彼らの作業台として使用されていたものと思われる。

c) 構

SA701(図17) 南東一北西方向の構である。柱穴は直径0.1~0.2m、深さ0.4mあり、一部に直径0.1m弱の柱痕跡が残っていた。N60°Wの方向に延び、SB703に平行することから一連のものと思われる。

SA702(図22) 南南西一北北東方向の構で、柱穴は直径0.1~0.4m、深さは平均0.3mある。N25°Eの方向に延び、SD705に平行していることから、一連のものと思われる。

d) 溝

等高線に平行するSD701・702、直交するSD703~705およびそれとは方向が関係ない幅0.1m程度の小溝を検出した。SD701・702は、幅0.3~0.4m、深さ0.2mあり、遺物はほとんど出土しなかった。ここでは遺物が多量に出土したSD705と、平行して延びるSD703・704について述べる。

SD703(図21) 幅0.8m、検出面からの深さが0.2mの溝で、SD702を切る。須恵器・土師器の細片しか出土していないが、後述するSD704・705と平行していることからこれらの中には近い時期と考えられる。

44はSD703から出土した土師器高杯の脚部である(図21)。脚内の上部は中実で、残存している限りではスカシ孔は見られない。おそらく須恵器型式でTK216型式の時期より前に該当するものと思われる。

SD704(図21) 調査区中央に位置する、幅1.0m、深さ0.3mの溝である。第8層に由来する偽縞を少量含む黄褐色シルト層で埋まっており、水が流れた痕跡は見られなかった。SB707に上部を削られており、これより先行して存在したことがわかる。

埋土中からは須恵器40~42、韓式系土器43が出土した(図21、図版20)。40は無蓋高杯である。口径は16.0cmで、体部には縞が2条巡り、その下に波状文を巡らす。両側に本来把手が付いていたようで、剥がれた痕跡がある。外面は暗灰色、内面は自然釉が付着し灰色である。把手付碗41は、口径12.5cm、器高6.8cmである。調整は底部外面がヘラケズリで、

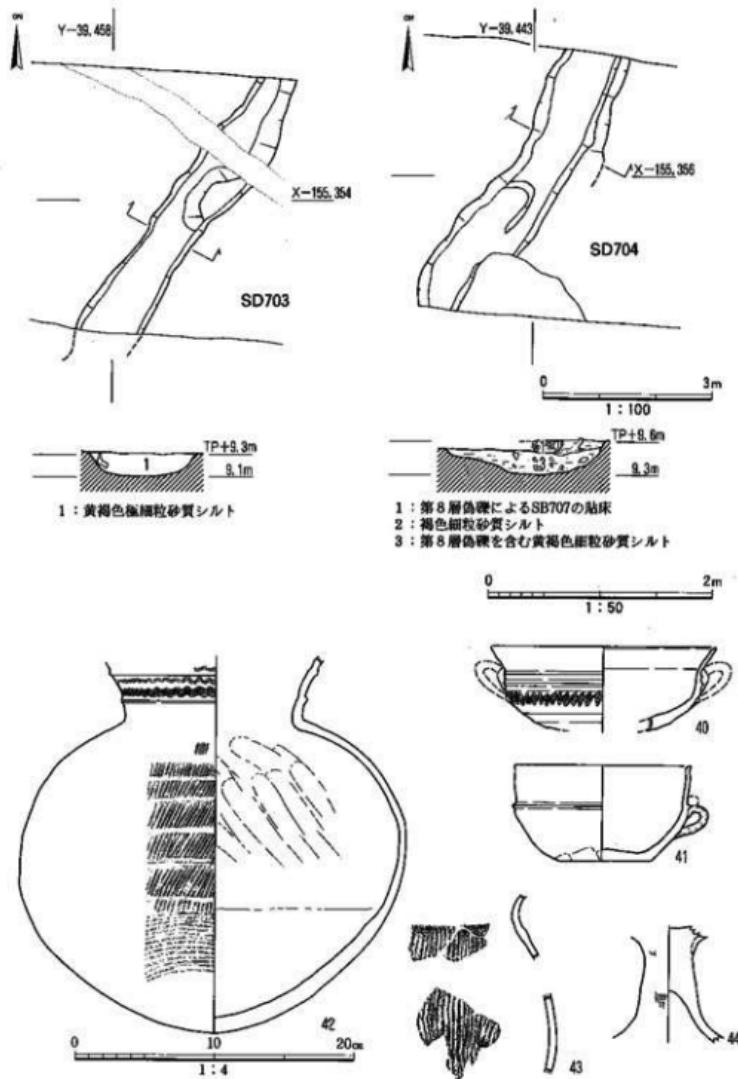


図21 SD703・704実測図および出土物
SD703(44)、SD704(40~43)

それ以外はヨコナデである。TK216型式に属する。42は壺である。口縁端部を欠き、残存高26.8cm、体部最大径27.8cmである。体部外面には縦方向の平行タタキを施している。内面はナデによりていねいに調整されている。口縁には稜を巡らし、その間に波状文を2条施す。色調は灰色で焼成は良好である。

43は韓式系土器の壺であり、2片は接点はないものの同一個体と思われる。外面は縦方向の平行タタキで、内面はナデである。色調はぶい橙色で胎土には石英・雲母が含まれる。

SD705(図22、写真4、図版4) 調査区東半に位置し、2段に落ちる溝で、幅は1段目が2.4m、2段目は1.0mあり、検出面からの深さは0.4mある。埋土は3層に区分される。1層は灰黄色細粒砂質シルト層で、底部が焼成後に穿孔されたTK10型式の須恵器杯身50が出土した。2層は埋土中に第8層に由来する粘土偽疊が若干含まれる黄灰色細粒砂質シルト層で、3層は黄灰色シルトの薄層で、滲水状態であったことを確認することができた。2層からはTK208型式を中心とする須恵器や土師器が多量に出土し、炭と製塩土器の細片が多量に含まれていた。なお、滑石製白玉など微細遺物の有無を確認するため、溝の埋土を持ち帰って洗浄したが、1点も見つからなかった。

1層から出土した遺物は45~55である(図23、図版20・21)。45~51は須恵器である。45~48は杯蓋で、TK208型式~TK47型式のものである。49・50は杯身である。49はTK47

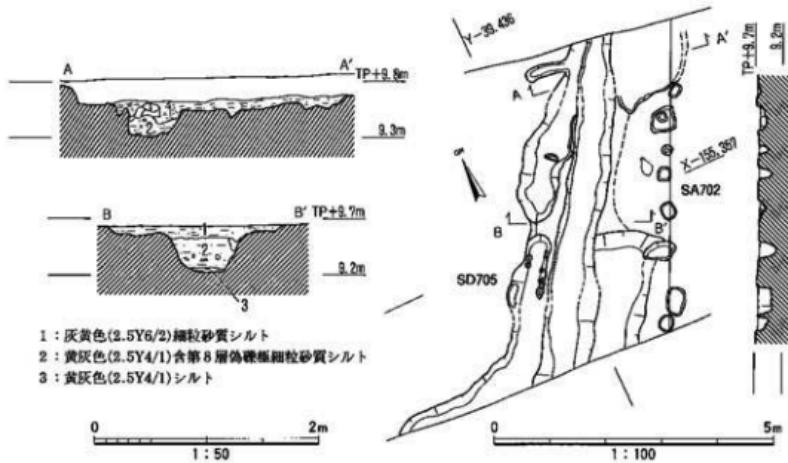


図22 SD705・SA702実測図

型式と思われる。50は焼成は極めて悪く、灰色を呈する。出土時は底部に焼成後の穿孔が認められたが、周辺で破片を回収することができ、完形に復元された。TK10型式に属するものであろう。51は4方向に長方形のスカシ孔を有する高杯の脚部である。TK216型式に属するものと思われる。

52~55は土師器である。52は口径が18.0cmの二重口縁壺である。調整は外面はハケである。内面は磨滅が甚だしく不明であるが、凹凸が観察できることからユビオサエがあったものと思われる。色調は灰白色で、焼成はややあまい。胎土には長石やシャモットを多く含んでいる。53・54は壺である。53は内外面とも調整は不明であるが、54の調整は体部外面にはタテハケで、内面は口縁部をヨコハケ、体部をヘラケズリで仕上げている。55は瓶である。口径は24.8cm、器高は27.6cmであり、内面の調整はヨコハケ、外面は磨滅が激しくわずかにユビオサエが確認できる程度である。底部は欠損していることから、蒸氣孔の形状は不明である。

56~82は2・3層から出土したものである(図24~26、図版20~23)。56~63は須恵器である。56は杯蓋で口径12.5cm、器高3.7cmである。57は杯身で口径11.4cm、器高4.3cmである。調整は口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリだが、底部中央は外面を一方向のナデで仕上げている。色調は灰赤色である。ON46型式と思われる。58は把手付椀である。口径7.3cm、器高5.7cmである。口縁はやや外反し、端部は尖っている。口縁部外面はヨコナデ、体部下半にはヘラケズリが施される。59は台付壺である。体部の最大径で21.2cm、残高17.2cmである。体部上半に2条、下半に1条の波状文を巡らす。脚部にはスカシ孔が認められ、4方向に設けられていたものと思われる。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈し、灰色の自然釉がかかる。60は有蓋高杯である。方形のスカシ孔を3方向に設ける。61・62は無蓋高杯である。61はにぶい赤褐色を呈する。胎土は精良で、ヨコナデによる仕上げもていねいである。62は波状文を巡らし、脚部には3方向にスカシ孔を穿つ。焼け歪みが激しいが焼成は良好である。自然釉の付着が顕著である。63は高杯形器台である。杯部と



写真4 SD705土器出土状況

脚部は接合できなかったが、口径約38cm、器高約35cmに図上で復元した。杯部は3条一組と2条一組の縁によって文様帯が3つに区分される。上、中段には波状文が施され、下段には鉢菌文が描かれる。脚部は2条一組の縁によって4段に分かれれる。いずれも波状文を巡らし、上3段には長方形のスカシ孔が8方向に穿たれる。色調は暗灰色で、焼成は良好

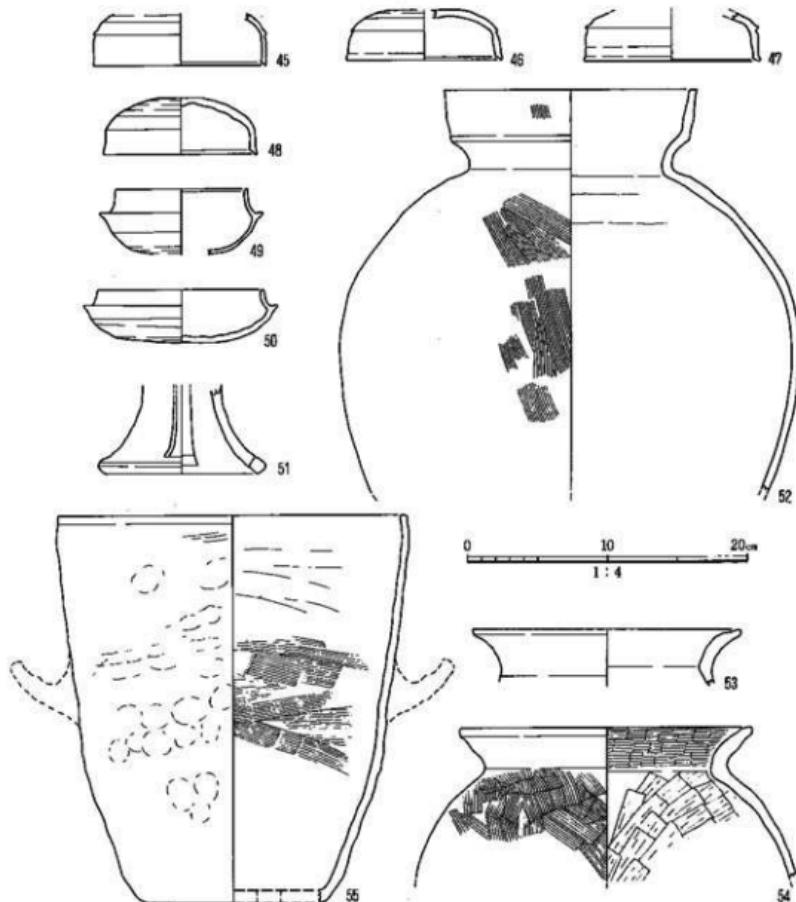


図23 SD705出土遺物(1)

であり、脚部外面には自然釉が付着する。

64~75は土師器である。64は小型の壺の口縁部である。65は杯で、口径12.9cm、器高5.3cmあり、色調は明赤褐色である。66・67は高杯の杯部である。66は内面に放射状の暗文を

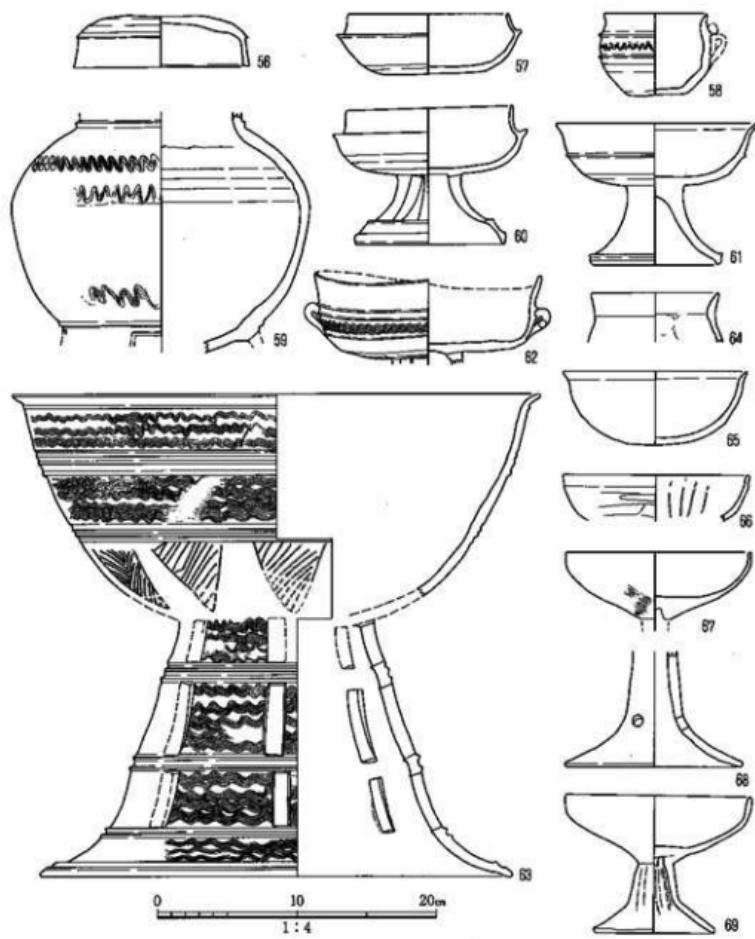


図24 SD705出土遺物(2)

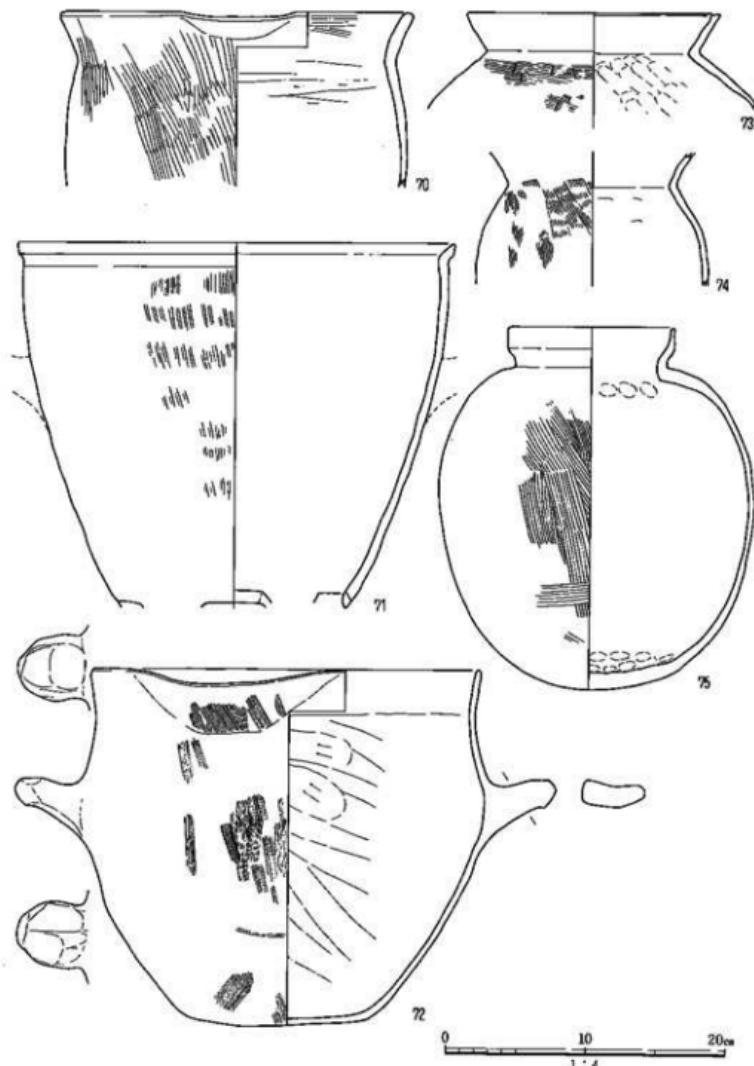


図25 SD705出土遺物(3)

施す。68は高杯の脚部である。円形のスカシ孔を3方向に穿つ。69は高杯で、口径13.1cm、器高9.9cmである。胎土は精良で焼成も良好である。器表は磨滅が著しく調整は不明である。

70・72は片口の鍋である。70は口径24.0cmで外面を粗いタテハケで調整する。72は口径27.2cm、器高25.5cmで、扁平な把手をもつ。片口は中央からやや左寄りにある。器表の荒れが著しいが、外面は細かいタテハケ、内面は左上がりのヘラケズリが施される。

71は甌である。底部を欠損し、蒸気孔の形状は不明である。また、把手も本来あったはずであるが、その部位が残っていなかったため、図上で推定復元した。口縁は短く外反し、ヨコナデで調整する。体部は剥離が著しいが、縱方向の平行タタキがわずかに観察できる。色調は橙色で、胎土には4mm大の砾・チャート・長石を多く含み、焼成は良好である。

73~75は壺である。73は口径17.7cmの、布留式壺の系譜を引くもので、口縁端部が上向きの面をもっている。外面は断続的なヨコハケ、内面はナデである。色調は橙色で、胎土には石英・長石を含み、焼成はあまりよくない。74は口縁端部を欠損している。調整は外面が縱方向のハケ、内面はナデで、色調は明褐灰色である。75は二重口縁の壺で、口縁が直立ぎみに立ち上がるところから吉備系と思われる。口径11.6cm、器高25.7cmである。調整は外面はタテハケ、内面はナデで、頸部と底部にユビオサエが顕著に認められる。色調は橙色で、胎土には長石・石英・チャートを含み、焼成は良好である。

76~82は製塩土器である(図26、図版22)。76~80は灰白色を呈し、外面がナデやユビオサエで仕上げられる。76は口径4.2cm、器高8.7cmある。81・82は黄褐色を呈し、外面を平行タタキで仕上げる。81は口径5.4cm、器高7.8cmある。

1層の須恵器はTK10型式のものがもっとも新しく、2・3層の須恵器はON46型式かTK208型式に属するものが多いが、土師器の中にはやや後出するものも認められ

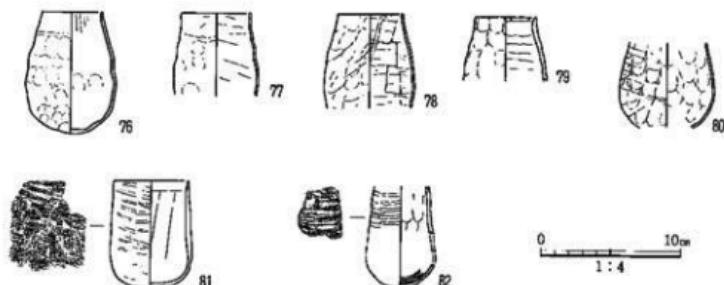


図26 SD705出土製塩土器

る。5世紀後半に掘削され、6世紀中頃には完全に埋没していたようである。遺物の大半が須恵器型式でいうTK208型式の時期のもので、この頃に溝が機能していたのであろう。

e) 井戸

SE701(図28、図版4) 調査区中央の北端に位置する素掘りの井戸である。上端の直径が0.9m、深さが0.7mで、底は段丘構成層の砂礫に達する。廃絶時に第8層に由来する偽縄で一度に埋戻されていた。底近くから完形の須恵器把手付椀86が出土した(図29、図

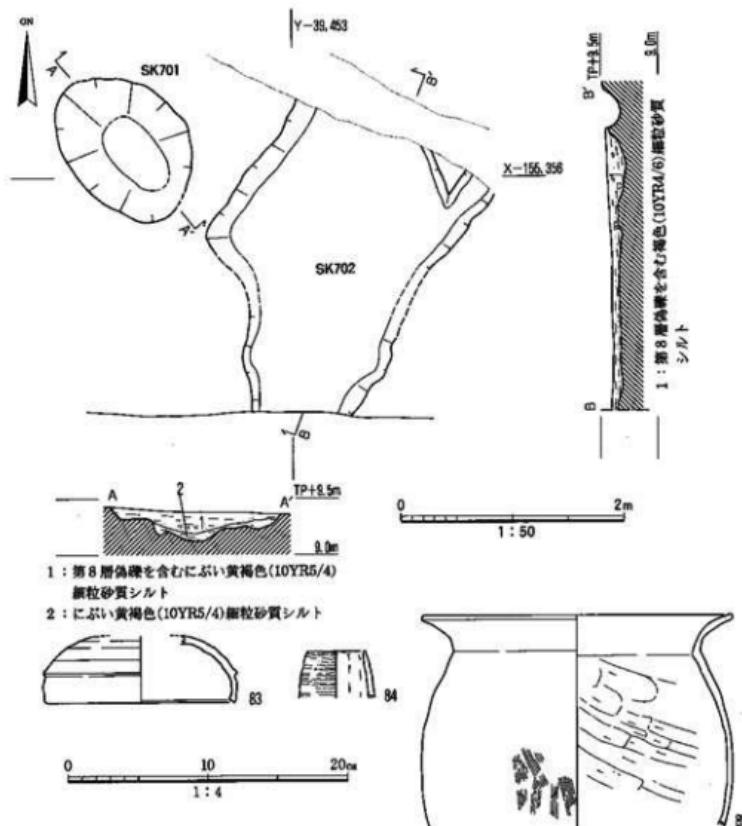


図27 SK701・702実測図およびSK702出土遺物

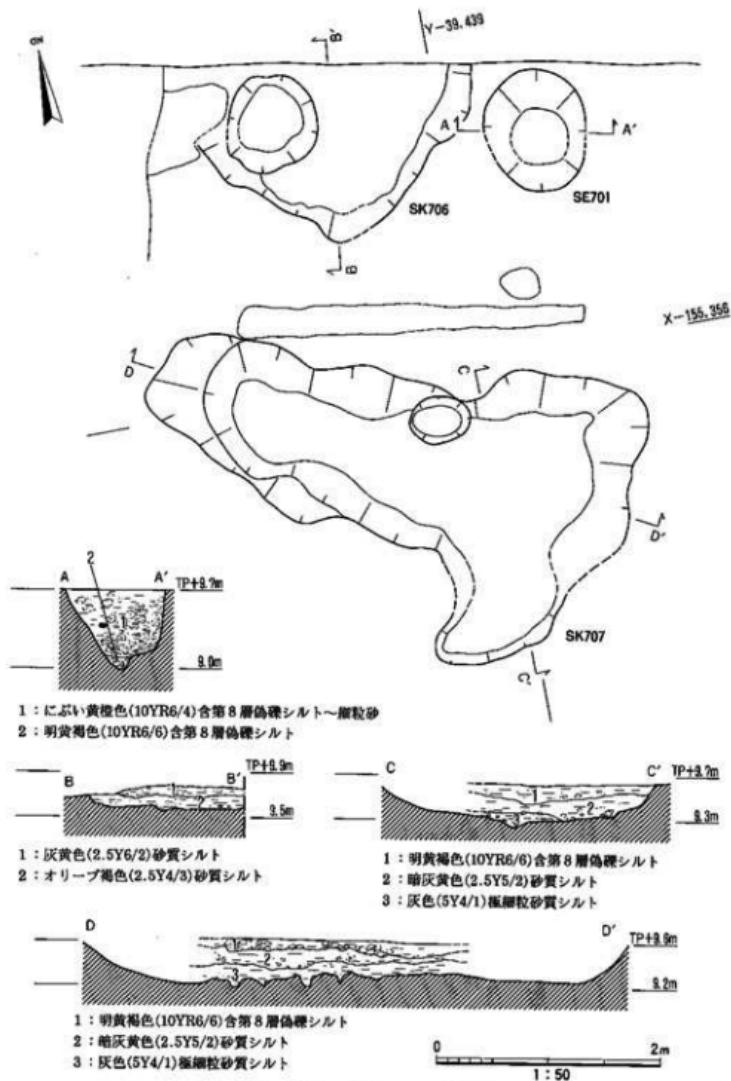


図28 SE701、SK706・707実測図

版23)。

86は口径10.8cm、器高7.4cmで焼成は良好である。把手は粘土紐を卷いて作られ、その上に球状の粘土塊が付けられる。体部には突帯が2条巡り、その下に波状文を巡らす。調整は、体部がナデ、底部はヘラケズリである。TK208型式に属すると思われる。

f) 土壙

SK701(図27) 長径1.4m、短径1.0mの梢円形を呈する土壙で、深さは0.3mある。遺物は須恵器・土師器の細片が出土したが、時期は確定することができなかった。

SK702(図27) 調査区南壁際で検出した浅く不整形な土壙で、南北2.7m以上、東西2.0m、深さは0.2mある。出土遺物には83~85がある(図27)。83は須恵器杯蓋で、口径13.4cm、残存高4.8cmある。84は製塩土器である。外面にはタタキが施され、色調はにぶい橙色を呈する。85は口径22.0cmの土師器壺である。口縁部は外反し、体部は球胴ぎみである。外面はハケ、内面はヘラケズリで仕上げられている。外面にはスヌが付着する。

SK703(図13) 長径1.4m、短径0.8mの平面梢円形の土壙で、深さは0.2mある。遺物は須恵器・土師器の細片が出土したが、時期は確定することができない。

SK704(図13) SB707の下で検出した直径1.0m、深さ0.2mの土壙で、SB707に東側を切られている。出土遺物には須恵器壺87がある(図29)。口径18.5cmあり、口縁部には2条一組の稜に区切られた文様帶に波状文が施される。TK216型式に属するものと思われる。

SK705(図13) 調査区中央の南壁付近で検出した段状の落込みである。出土遺物には須恵器杯蓋98・99と杯身100・101がある(図29)。いずれもTK208型式でおさまるものと思われる。

SK706(図28) 深さ0.2mの不整形な土壙で、北側は調査区外に延びている。後述するSK707とは異なり、人為的に埋戻された形跡は確認できなかった。88~97が出土した(図29、図版23)。

88~96は須恵器である。88・89は杯蓋で、90~94は杯身である。94がTK23型式、93がTK47型式、そのほかはMT15型式に属するものであろう。95は高杯脚部である。刺突によって作られたスカシ孔が3方向に穿たれている。96は壺の把手で、ヘラによる切り込みが見られる。

97は土師器小型壺である。浅黄橙色を呈し、焼成はややあまい。口縁部を欠損しており、残高は11.0cmである。調整は外面が縱方向のハケ、内面がヘラケズリである。

須恵器型式から判断するとSK706の年代は6世紀初頭になり、本調査区の古墳時代の遺

構の中では新しいものになる。

SK707(図28) SD705の西側に位置する不整形な土壇で、東西が4.40m、深さ0.35mある。埋土は3層に分けられ、いずれの層も第8層に由来する偽縄が含まれる。特に、1層に多く含まれ、最終的に人為的に埋戻されたことがわかる。102~112が出土した(図30、図版20・22・23)。

102~108は須恵器である。102・103は杯蓋である。102は口径13.1cm、器高4.8cmある。色調が灰白色で焼成が極めて悪い。103は口径13.4cm、器高4.6cmで胎土には長石を含む。

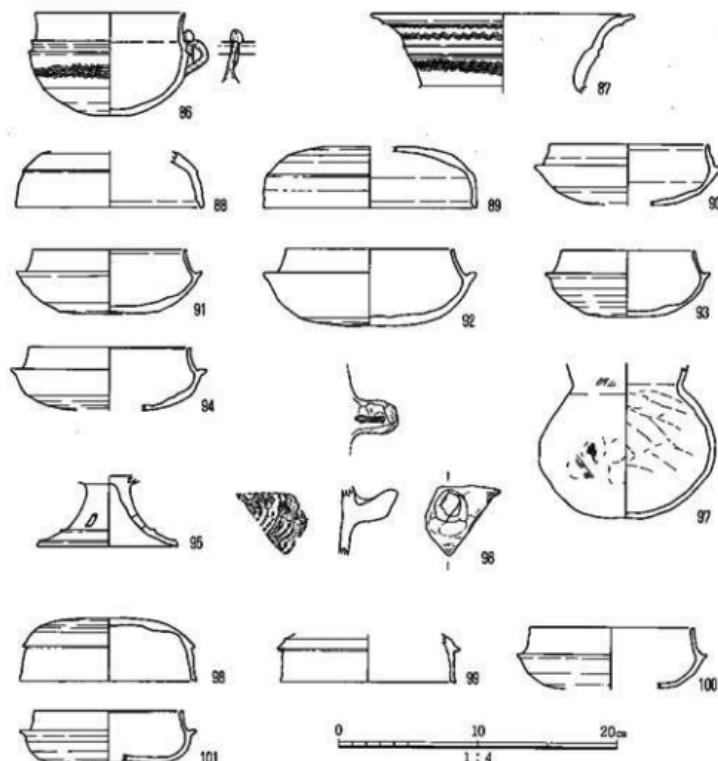


図29 SE701、SK704~706出土遺物
SE701(86)、SK704(87)、SK705(98~101)、SK706(88~97)

104・105は杯身である。105には底部にヘラ記号が認められる。106は口径17.8cmの壺の口縁部である。内面にはオリーブ黒色の自然釉が付着する。107は無蓋高杯である。スカシ孔は3方向に穿たれ、波状文を巡らす。焼成は良好で、内面には自然釉が付着する。108は口縁部を欠いた高杯である。杯部の底部および脚部はカキメで仕上げられる。脚部には方形のスカシ孔を3方向に穿つ。これらの須恵器はTK208型式もしくはTK23型式に属するものであろう。

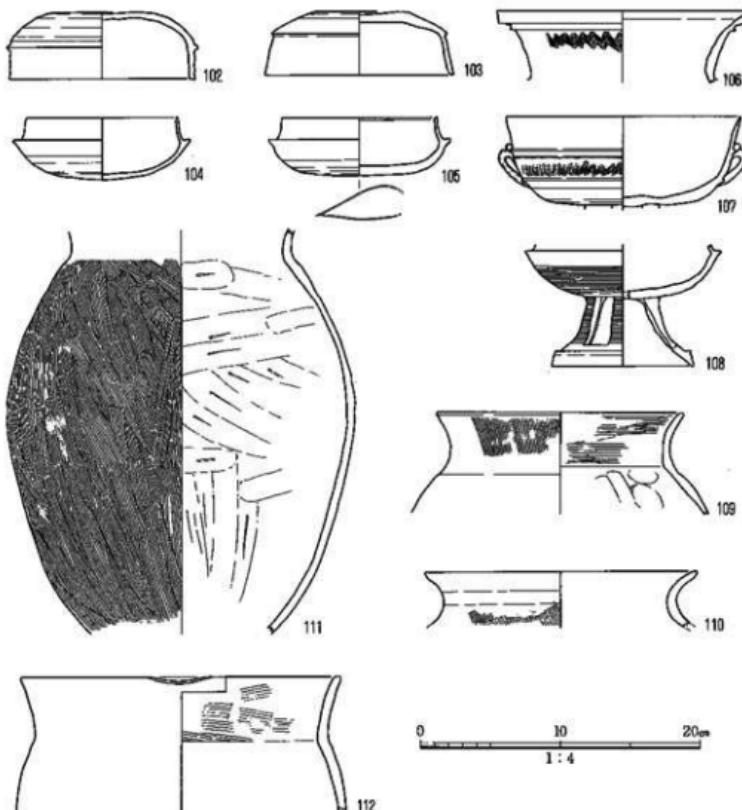


図30 SK707出土遺物

109~112は土師器である。109・110は甕の口縁部である。111は長胴の甕で、外面はタテハケ、内面はヘラケズリが施される。112は鍋の口縁部である。内面は口縁部をヨコハケで調整している。焼成はあまりよくなく、外面の調整は不明である。

以上の遺物から判断して、SK707の時期は5世紀末頃と考えられる。

3) 小結

本調査区の旧地形は南西が低く、北東が高くなる。検出された古墳時代の掘立柱建物や竪穴住居、溝の方向は、等高線と平行もしくは直交しているものが多いことから、いずれもこの傾斜に規制されたものと思われる。一方、後述する97-29次調査区では北側で急激な落ちが確認された。このことから両調査区の間に「馬池谷」につながる支谷状の窪みの存在が想定され、図31のような地形復元案が考えられる。

統いて、本調査区で多数検出された古墳時代の遺構変遷を示してみよう。出土遺物を基に以下のような3時期に区分することができる(図32)。

① 5世紀中頃(TK216型式・ON46型式)

SD703・704、SK704が該当し、SD705でもこの時期の完形の遺物が出土していることから、この段階すでに機能していたと思われる。また、時期決定可能な遺物が出ていないものの、SD702はSD703に切られていることから、この段階かそれ以前のものであり、

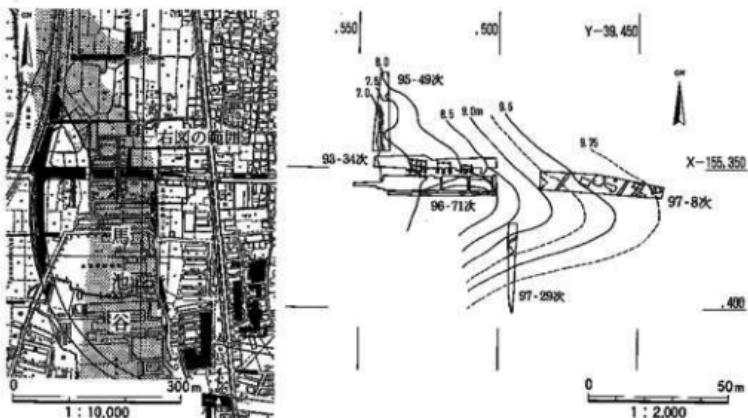


図31 周辺の古墳時代遺構分布図

それと方向を同じくするSD701およびSB701もこの段階に属する可能性がある。

② 5世紀後半～末(TK208型式・TK23型式)

本調査区で最も遺物が多かった段階であり、検出された遺構も最も多い。SD705の東側では掘立柱建物SB703・704があるが、報告でも述べたように、これら自体が別々ではなく、同一の建物であった可能性も考えられる。また、これらの建物の2方向には柵が伴っていた。一方、西側では竪穴住居SB707、井戸SE701が検出されている。溝や柵を挟んで空間的に分化しているのがこの時期の特徴であろう。

③ 6世紀初頭以降(MT15型式・TK10型式)

SD705は埋まって窪みを残すのみである。掘立柱建物は楕柱建物2棟、側柱建物1棟の計3棟あり、土壙SK706もこの時期に属する。なお、TK10型式よりも新しい須恵器が伴

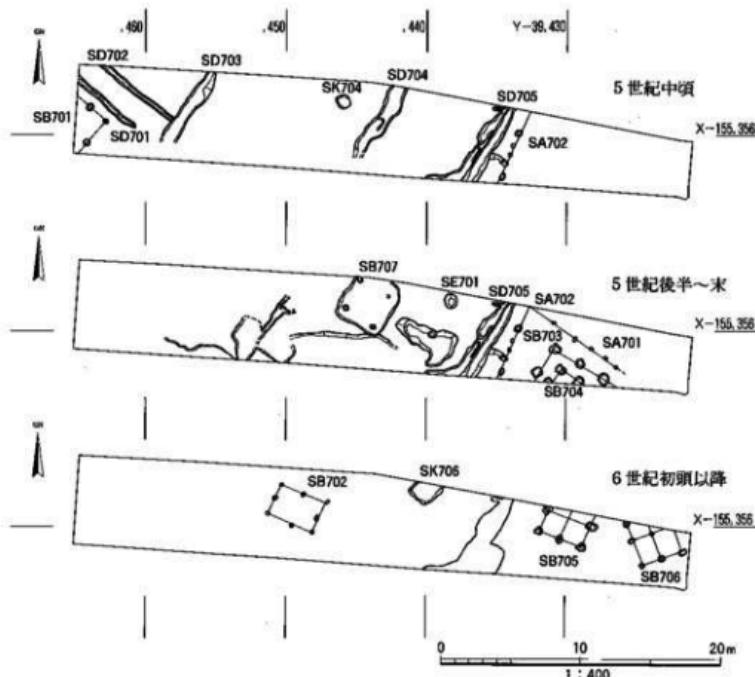


図32 97-8次調査区の遺構変遷図

う遺構は見つかっていないことから、当調査区の古墳時代の遺構の下限は6世紀中頃と思われる。

これまで明らかにされた長原遺跡の古墳時代集落の動向を見ると、5世紀末頃にピークがあり、その後は衰退すると考えられている[京嶋覚1993、高橋工1999]。本調査区での成果もこれにほぼ合致する。

ここで、②の段階で見られる溝による空間分化について取り上げてみよう。これについては社会的な階層差もしくは空間的な機能差を反映していることが想定される。前者の要素は、溝を挟んで竪穴住居と掘立柱建物が対峙し、掘立柱建物には檻が伴っているという点である。一方、溝と檻を挟んで西側に竪穴をもつ竪穴住居と井戸があり、SD705からは炭に伴って大量の製塙土器片が出土している状況からすると、西側が炊飯のための空間で、東側が居住空間と考えることもできる。検出状況からすると後者の要素が強いと判断されるが、溝で区分した上に檻まで設置していることについて、機能分化の点のみで説明するのは現状では困難である。よって、階層差と機能差を両方含む複合的な背景も視野に置いておく必要があろう。

この空間分化は③の段階では溝が埋まることによってなくなるが、竪穴住居があった西側には小型の側柱建物が、東側には総柱建物が2棟現れる。後者の総柱建物については倉庫か住居かは決めかねるもの、東西の建物に構造的な差異は当然あったと思われる。これが階層差を反映するものであるならば、前段階で見られた差異を継承していると捉えることもできる。

以上、本調査区における古墳時代の空間分化については暫定的な解釈に留め、踏み込んだ議論はできなかったが、今後は他遺跡も含めて比較検討を重ねることによって、検証したいと思う。

第2節 97-55次調査

1)層序とその遺物

i)層序(図33、表3、図版5)

現場は「馬池谷」の北東斜面に位置し、地層は南西に向うに従って厚くなる。ここで図示したのは西壁・南西壁である。

表3 97-55次調査の層序

標準層序	層序	層 相	厚さ (cm)	遺 墓	おもな遺物	特 徴	出目遺物
NG0	0	現代客土	≤120				
NG1	1	現代作土	≈20			作土	
NG2	2a	黄褐色(2.5Y5/5)細粒砂質シルト	≈15			作土	
	2b	黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト	≤45			土壤堆土	
NG3	2c	にぶい黃色(2.5Y6/4)細粒砂～粗粒	≈60			水成	
	3	オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂質シルト	≈30		瓦器・須恵器・土師器	作土	113~116
NG4A	4a	にぶい黃色(2.5Y6/4)粗粒砂	≤20		瓦器・須恵器・土師器	水成	
NG4BII	4bII	オリーブ灰色(2.5GY5/1)細粒砂質シルト	≈15	▼耕作跡	瓦器・須恵器・土師器	作土	117~120-134
NG4BIII	4bIII	灰色(2.5Y4/1)砂質シルト	≈15	▼耕作跡	瓦器・黑色土器	作土	
	4bIII	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂質シルト	≤15	▲畦畔	瓦器・黑色土器・須恵器・土師器	作土	121
NG5A	5a	灰オリーブ色(5Y5/3)細粒砂～細粒	≈20			水成	
NG5B	5b	灰オリーブ色(5Y5/3)細粒粒砂	≤5			水成	122~123
NG6AI	6aI	灰オリーブ色(5Y4/2)砂質シルト	≈15	▲SR601 ↓SR602	須恵器・土師器	作土	
	6aII	オリーブ灰色(2.5GY6/1)細粒砂	≤10		須恵器・土師器	水成	
	6bI	灰オリーブ色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト	≈15		須恵器・土師器・ 輪輪・白玉・竹筒	作土	136-145-158-159
	6bII	灰色(3Y5/1)細粒砂～粗粒砂	≤15			水成	124~126
NG7BI	7	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト	10~40	▼SD601 ↓SB701, SD701-702	瓦・馬鹿・牛骨・ 和同開跡	須恵器・土師器・ 竹筒	135-137~144 -146~157
	8	オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト～灰オリーブ色(5Y5/3)砂	≥30				127~133

第1層：現代作土層である。

第2a層：黄褐色極細粒砂質シルトの作土層である。平均層厚が15cmで、調査区全体に残る。長原2層に相当すると思われる。

第2b層：黄褐色砂質シルト層である。調査区北半の西壁で確認した。下半にシルト偽礫が多く見られる。下位の第2c層上面から掘られた土壌の埋土である。

第2c層：にぶい黄色極細粒砂～細礫の水成層である。平均層厚が60cmで、調査区全体に残る。長原3層に相当すると思われる。

第3層：オリーブ灰色砂質シルトの作土層で、調査区全体に分布する。平均層厚は20cmで、下位の第4bi層の偽礫を多く含み、淘汰不良である。長原3層に比定される。

第4a層：にぶい黄色粗粒砂の水成層で、第3層の畦畔の下や踏込みの中でのみ確認された。長原4A層に相当すると思われる。

第4bi層：オリーブ灰色極細粒砂質シルトの作土層で、調査区全体に分布する。層厚は平均15cmある。下位の第4bii層との境は漸移的ではっきりしないが、砂が少ないという点で区分した。Ⅲ期の瓦器を含む。下面で耕作溝を検出した。長原4Bi層に相当する。

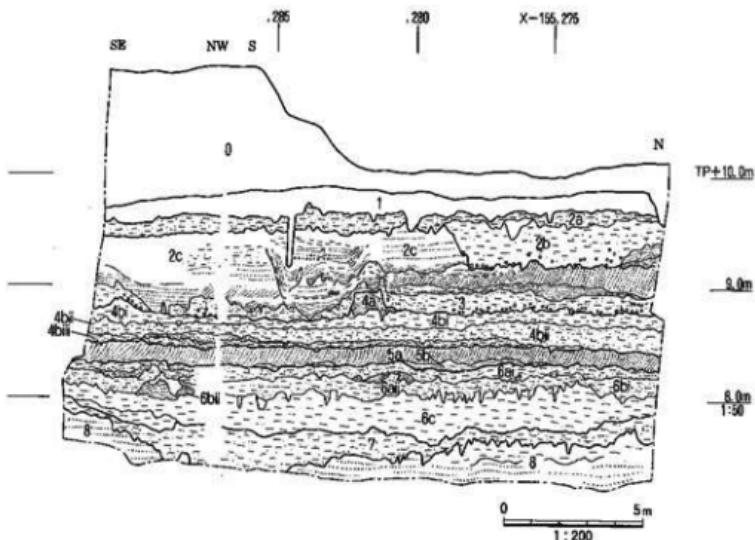


図33 97-55次調査区西壁・南西壁断面図

第4bii層：灰色砂質シルトの作土層である。調査区全体に分布し、層厚は平均15cmある。II期の瓦器を含む。下面で耕作溝を検出した。長原4Biii層に相当する。

第4biii層：暗オリーブ灰色砂質シルトの作土層で、調査区南端で確認された。下位の第5a層の砂を多く含む。遺物は少ないが、瓦器片が含まれていることから、長原4Biii層に相当すると思われる。

第5a層：灰オリーブ色極粗粒砂～細礫の水成層で、層厚は約20cmである。第4biii層の時期の耕作で削られた部分を除いて、調査区全体に分布する。長原5A層に相当する。

第5b層：灰オリーブ色極細粒砂の水成層で、層厚は5cm以下である。平城宮土器V・VIの土師器小型甕や壺が出土した。長原5B層に相当する。

第6ai層：灰オリーブ色砂質シルトの作土層で、下位の第6aII層に由来する砂を多く含む。主に調査区の西半分に分布し、西壁で確認された層厚は平均15cmである。上面で南北に延びる畦畔を検出した。遺物はほとんど出土しなかった。長原6Ai層に相当する。

第6aII層：オリーブ灰色細粒砂の水成層で、第6ai層の畦畔の下や踏込みの中でのみ確認された。

第6bi層：灰オリーブ色極細粒砂質シルトの作土層で、調査区全体に分布する。第6ai層の基底面で検出した畦畔の痕跡はこの層準のものである。当層からは絵馬145の破片に加え、平城宮土器II・IIIの土師器杯・皿の破片が出土した。長原6Ai層に相当する。

第6bii層：灰色細粒砂～粗粒砂の水成層で、第6c層上面の踏込みや窪み内で確認された。

第6c層：暗灰黄色シルト層である。調査区全体に分布し、溝SD601の窪みを埋める。層厚はもっとも厚い部分で40cmある。当層からは和同開珎144、ウマ・ウシの骨・齒に加え、平城宮土器II・IIIの土師器杯・皿の破片が多く出土した。

第7層：暗オリーブ褐色砂質シルト層で、調査区全体に分布する。層厚は10～40cmである。TK10型式を下限とする遺物が出土した。長原7Bi層に相当する。

第8層：オリーブ褐色極細粒砂質シルト～灰オリーブ色礫層で、長原16層に比定される段丘構成層である。

ii) 各層出土の遺物(図34・35、図版24・25)

113～116は第3層出土遺物である。113は口径12.4cmの土師器皿である。口縁は外反し、端部を丸くおさめる。胎土は精良で焼成も良好であり、色調はにぶい橙色を呈する。14世紀のものであろう。114は瓦器椀の底部である。高台の直径は5.3cmで内面にヘラミガキを施している。12世紀のものであろう。115は口径15.2cmの瓦器椀である。13世紀前半のもの

のである。116は中国製の白磁碗である。口径16.2cmあり、口縁部は丸縁である。12世紀のものと思われる。

117~120・134は第4bi層から出土したものである。117・118は土師器小皿である。117は口径10.0cm、器高1.5cmで黄灰色を呈する。13世紀前半のものであろう。118は口径8.9cm、器高は1.5cmで色調は灰黄色である。13世紀後半のものであろう。119は土師器の皿である。口径13.6cmで、色調にはぶい黄橙色である。13世紀のものであろう。120は土師器

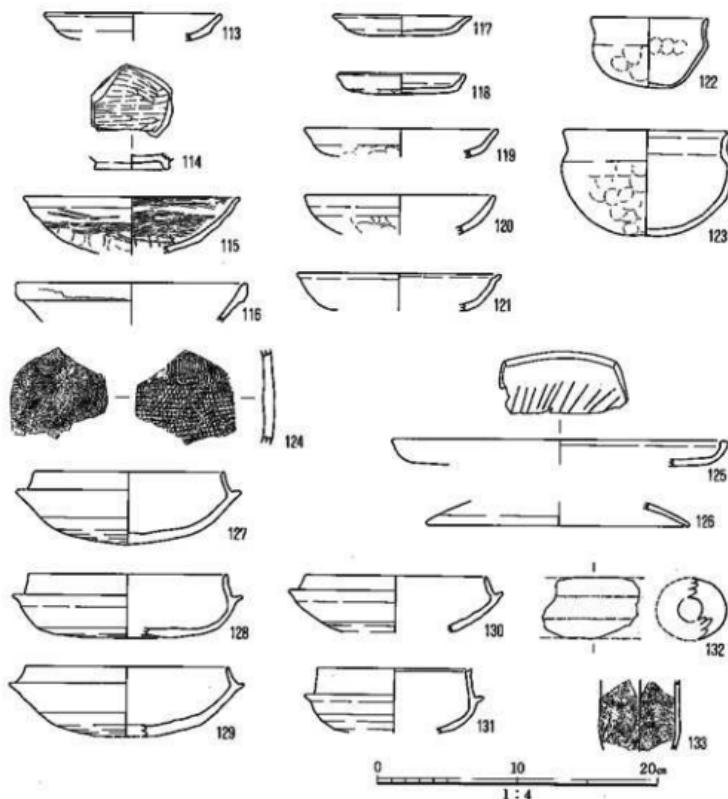


図34 各層出土遺物

第3層(113~116)、第4bi層(117~120)、第4biii層(121)、第5b層(122・123)、第6bii層(124~126)、第7層(127~133)

の皿である。口径は13.5cmで色調はにぶい黄橙色である。12世紀のものであろう。134は泥岩製の砥石で、4面に研ぎ痕を残す。

121は第4biii層から出土した土師器皿で、口径は14.4cmある。口縁はやや外反し、端部を少しつまみ上げている。浅黄色を呈する。

122・123は第5b層から出土したものである。122は土師器の小型壺で、口径8.2cm、器高5.0cmである。123は土師器の小型壺で、口径12.0cm、器高7.5cmある。胴部外面はユビオサエである。これらは平城宮土器VもしくはVIに属するものであろう。

124～126は第6bii層で出土したものである。124は縦方向の平行タキのあと、格子タキを施した須恵器壺の体部片である。色調は灰褐色であり、焼成は良好である。125は土師器皿で口径24.0cm、器高1.8cmで、内底面に放射状暗文を施す。126は土師器杯蓋と思われ、口径18.8cmである。125・126は平城宮土器IIIに属するものと思われる。

第7層からは127～133の遺物が出土した。127～131は須恵器杯身である。131はTK23型式で、それ以外はTK10型式に属する。132は筒状の土製品で、にぶい橙色を呈する。外面に平らな部分があり、内面にはナデの痕がよく残っている。一見管状土錐の破片に見えるが、網を通した痕跡は見られない。133は製塙土器である。外面にはユビオサエ、内面にはヨコナデが施され、色調は灰白色である。

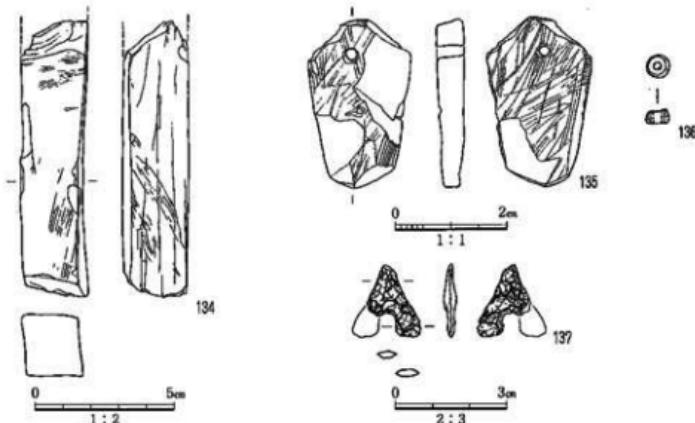


図35 各層出土の石器および石製品
第4bii層(134)、第6bi層(136)、第6c層(135・137)

135は第6c層から出土した滑石製の剣形模造品である。厚さ0.3~0.5cm、残高3.0cm、幅1.9cmである。表裏両面を不定方向に、腹側面は縦方向に研磨し、面取りしている。孔は一方からあけられている。136は第6bi層から出土した滑石製の白玉である。直径0.4cm、厚さ0.25cmである。側面は縦方向に面取りしており、わずかに稜線が認められる。137は第6c層から出土した凹基無茎式石鏡である。脚の先端は丸い。

2) 遺構とその遺物

ここではおもに奈良時代と古墳時代の遺構・遺物について説明する。

i) 奈良時代(図36~40、図版5・6・24・25)

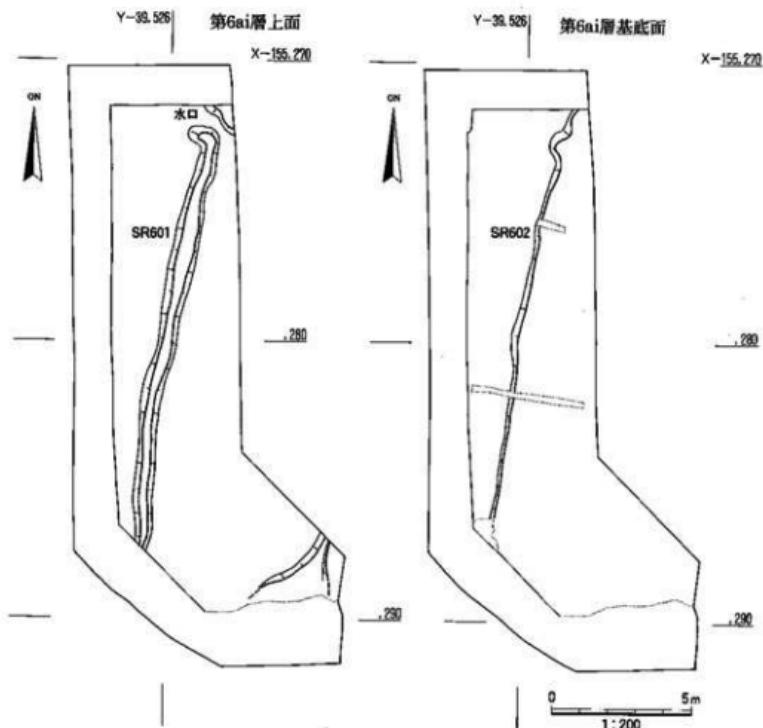


図36 奈良時代の遺構平面図

a) 第6ai層上面検出遺構

南北に延びる畦畔SR601を検出した。基底部の幅は約0.8m、高さ0.2mであり、調査区北端に水口がある。なお、この層準における作土の分布はSR601を挟んで西側にしか見られず、東側には耕起された痕跡は見られなかった。

b) 第6ai層基底面検出遺構

上位の畦畔SR601の直下で畦畔の痕跡SR602を検出した。第6ai層準の水田により上面が削られているが、本来は畦畔であったと思われる。西側の下がった部分に第6aii層が残っていた。

c) 第6c層下面検出遺構

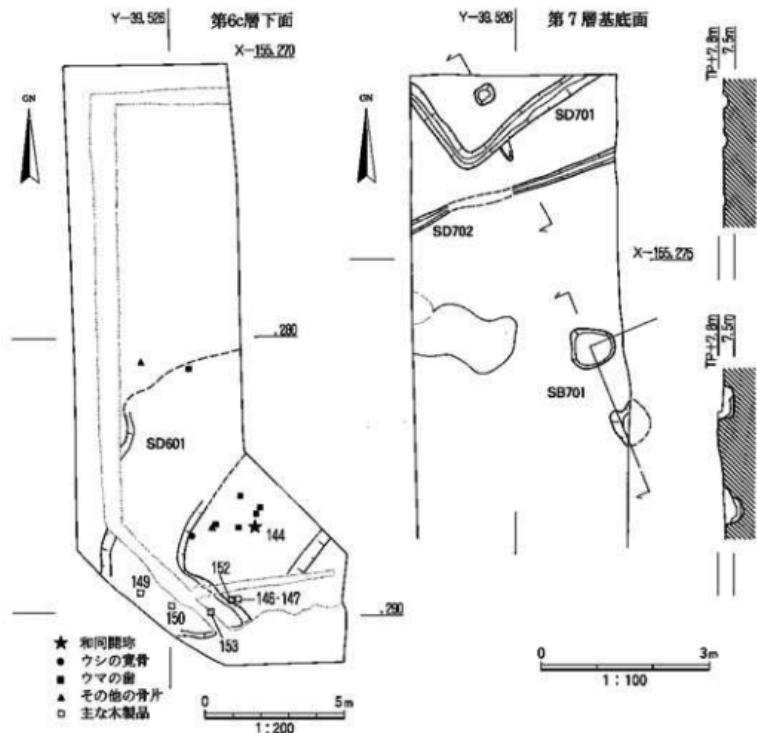


図37 古墳～奈良時代の遺構平面図

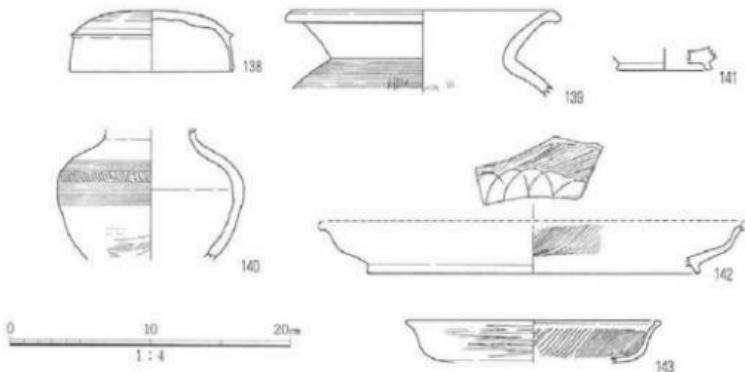


図38 第6c層出土遺物

調査区南半で溝SD601を検出した。溝はもっとも幅の広い部分で約4mあり、検出面からの深さは0.2mある。調査区南端の擾乱付近で底が上がるため、南東には延びないものと思われる。溝の埋土である第6c層から平城宮土器II・IIIに相当する土師器片や、曲物の側板と思われる板材や底板が出土した。また、和同開珎やウシの寛骨、ウシもしくはウマの臼歯がSD601のコーナー付近で多く出土した。

第6c層からは須恵器138~141、土師器142・143が出土した(図38、図版24)。138の杯蓋は口径11.8cm、器高4.4cmである。139は口径18.6cmの甕で、肩部にカキメが施される。140は甕と思われるが、孔の部分は残っていなかった。カキメのあとに列点文が施される。141は壺の高台部分で、奈良時代に属するものである。

142は高台の直径が24.0cmに復元できる土師器皿Bである。底部内面は螺旋状暗文を、その外側に放射状暗文を施している。143は杯Aで、口径18.2cmである。色調は黄橙色で胎土は精良である。内



図39 和同開珎拓影



写真5 和同開珎出土状況

面には放射状暗文が施される。この中で141～143が平城宮土器Ⅲに属するものであり、SD601の時期を示すものであろう。

144は和同開称で、直径は2.4cmある(図39、写真5、図版25)。字体から見て新和同に該当する。長原遺跡ではNG89-19次調査[大阪市文化財協会1997a]やNG00-6次調査でも出土しており、さらに平野区内ではほかに瓜破遺跡UR80-1次調査[大阪市文化財協会2000c]、加美遺跡KM95-16次調査[豆谷浩之1996a]、KM00-5次調査でも確認されている(註1)。

木製品は第6bi・6c層で出土した(図40・図版25)。埋土は第6c層で、その上の第6bi層か

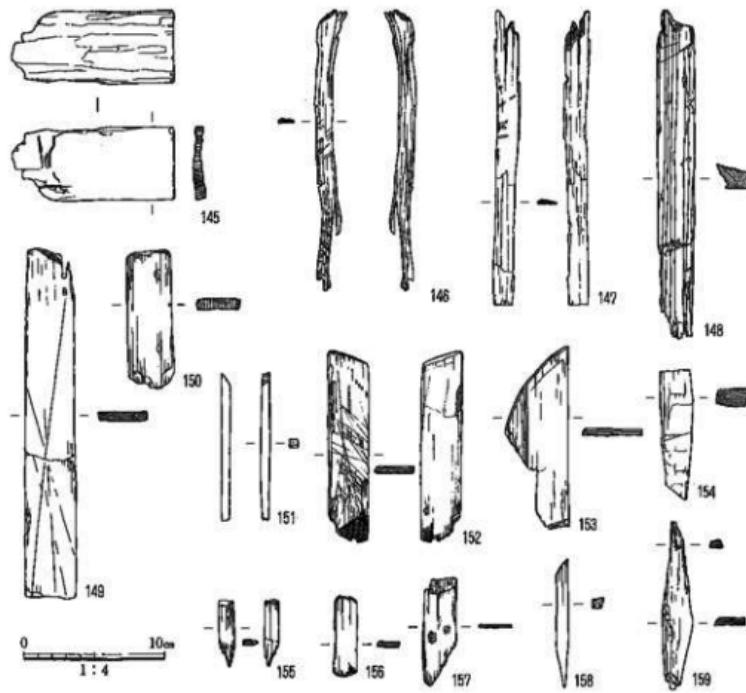


図40 SD601出土木製品
第6bi層(145・158・159)、第6c層(146～157)

ら出土したものについても本来第6c層に伴っていた可能性がある。よって、これらの層から出土した木製品についてもここではSD601出土遺物として扱うこととする。

145は縦11.6cm、横5.2cm、厚さ0.6cmの木板であり、表面に墨書きする。赤外線による観察の結果、絵馬の一部で、前脚が描かれていると判断した(図版25)。もう一個所にわずかに残っている墨書きは、平城京で出土した絵馬を参考にすると[奈良県教育委員会1995]、蹴り上げている前脚になるかもしれない。なお、絵馬は長原遺跡では初の出土であるが、平野区内では加美遺跡で奈良時代の絵馬が出土している[豆谷1996b・黒田慶一2001]。

149・150・152・153は曲物の底板の一部である。また、146・147は曲物の側板であった可能性がある。図の上部に焼けた痕跡が認められる。148・154は板状に加工した木材の一部であるが、木製品の加工途中に生じた廃材と思われる。155~157は形状から木筒の可能性も考えたが、赤外線による観察ではいずれの面にも墨書きの痕跡はなかった。151は串状に加工した木製品である。158も同様で、図の下部を細く削り出している。159は図の下端を削り、刀の刃状にしている。159は厚さが均一ではなく、凹凸がある。

ii) 古墳時代(図37・41、図版6)

第7層基底面で掘立柱建物1棟、および溝2条を検出した。

SB701 調査区北部に位置する掘立柱建物である。柱穴は2基検出され、いずれも一辺0.5mの隅丸方形で、柱間隔は1.4mである。調査区の東側に展開する掘立柱建物と思われる。

柱穴からは160の須恵器壺の口縁部が出土した(図41)。頸部は直立しながらやや外反する。外面はカキメで調整している。

SD701 調査区の北端に位置する、L字に曲がる溝で、幅0.3m、深さ0.05mを測る。

SD702 東西に延びる、幅0.2m、深さ0.05mの溝である。いずれも形態から見て竪穴住居の周壁溝と思われる。

3) 小結

本調査区の北側ではこれまで古墳時代中期から後期前葉の集落跡が検出されてきた。今回の調査でも同様の成果が期待されたが、古墳時代の遺構は調査区の北半にとどまり、遺物量は非常に少なかった。その一方で、奈良時代に相当する第6bi~6c層に絵馬をはじめと

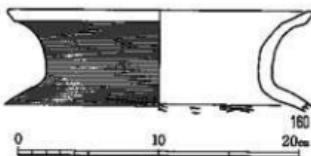


図41 SB701出土須恵器

する木製品、和同開珎、ウシ・ウマの骨・歯および平城宮土器Ⅱ・Ⅲの土師器・須恵器が含まれ、第6c層下面では遺構を検出するに至った。南側に位置するNG95-49次調査区で「米三石□斗五升」と書かれた木簡が出土している[大阪市文化財協会2000a]。しかし、出土遺物が全体的に少量であるため、具体的な状況を検討するのは困難である。犠牲が伴う祭祀だけでなく、日常的な食用に伴う解体など、さまざまな角度から検討する必要がある。

註)

- (1) NG00-6次及びKM00-5次調査は2000年度に実施され、現在整理中である。いずれも奈良時代の地層・遺構から和同開珎が出土している。

第Ⅲ章 長原遺跡西南地区の調査結果

第1節 97-18・49次調査

1)層序とその遺物

1)層序(図42・43、表4、写真6、図版8)

調査区は「馬池谷」の西方、瓜破台地上に位置している。調査区の層序は現代客土層以下に中世から現代にかけての作土層である第1～4層があり、第5層以下は段丘構成層となる。現場層序と長原標準層序との対応関係および層相については表4に記した。

第1層：暗オリーブ褐色～黄褐色含砂礫砂質シルトの現代作土層で、層厚は約20cmある。

第2層：にぶい黄色含砂礫砂質シルトの作土層で、層厚は約10cmある。下面で耕作溝・土砂探掘跡を検出した。遺物に肥前系陶磁器が含まれる。長原2層に相当する。

第3層：黄褐色含砂礫粘土質シルトの作土層で、層厚は約20cmある。層中と下面で耕作溝が見つかった。遺物には、瓦質土器・瓦器・土師器・中国製磁器がある。長原3～4B層に相当する。

第4層：黄褐色含砂礫粘土質シルトの作土層である。おもに97-18次調査区南部に分布する。黒色土器・須恵器・土師器が含まれ、瓦器が見られないことから長原4C層に相当すると思われる。当層基底面で平安時代や飛鳥時代の遺構を検出した。

第5層：明黄褐色砂礫層で、調査区南半に分布する低位段丘構成層である。層厚は約40cmである。下面で大型哺乳類の足跡化石を検出した。長原15層に相当すると思



写真6 97-18次調査区地層断面

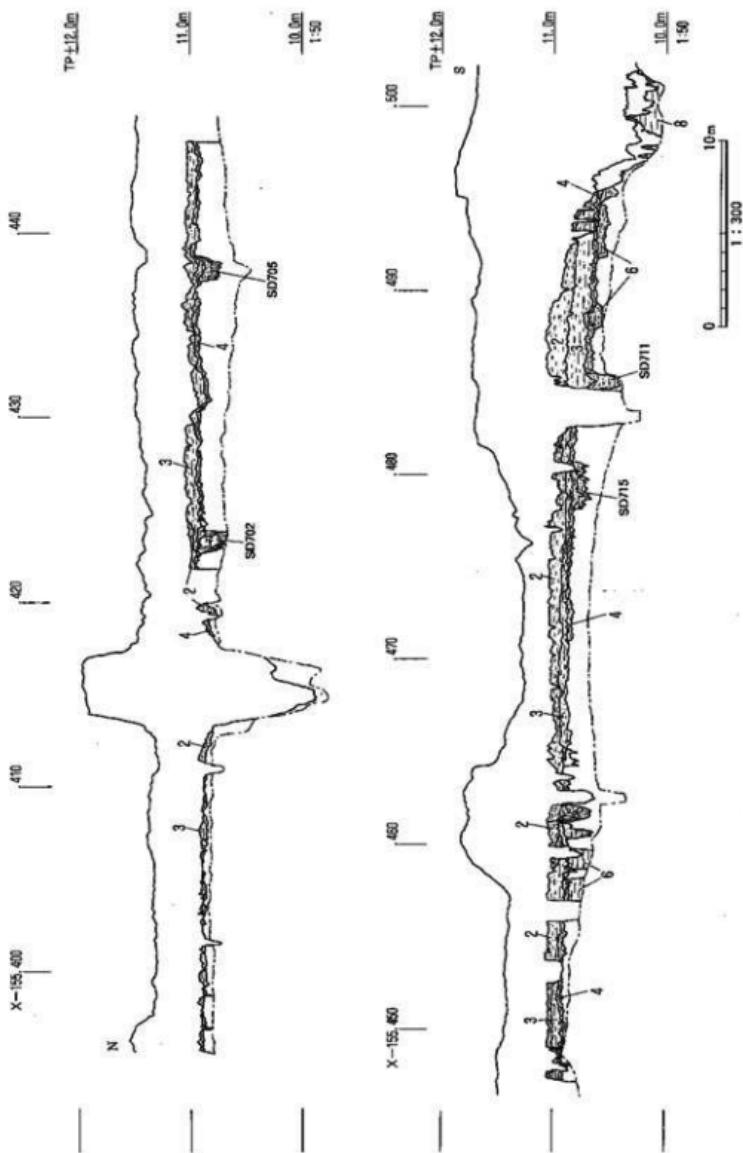


図42 97-18次調査区東壁断面図

われる。

第6層：明黄褐色砂礫～砂礫混り粘土質シルト層で、層厚は20cm弱である。長原15層の一つと考える。

第7層以下は調査区南部で深掘りを行った際、確認した地層である。おそらく、長原16A～16Biii層に相当すると思われる(図43、図版8)。

第7層：明黄褐色砂礫混り粘土質シルト層で、層厚は25cm弱である。長原16A層に相当する。

第8層：浅黄色粘土層で、吾彦火山灰(8.7万年前)を起源とする火山ガラスや、植物遺体を含む。層厚は10cm強である。長原16Bi層に相当する。

表4 97-18・49次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚(cm)	おもな遺構	おもな遺物	特徴	拘載遺物
NG1	1	褐色オリーブ～褐色(2.5Y3/3)～黄褐色(2.5Y5/3)含砂礫粘土質シルト	20		泥炭系陶器器・黑色土器・瓦	作土	171-172
NG2	2	ぼい黄褐色(2.5Y6/4)含砂礫粘土質シルト	10	▼耕作溝・島嶼・土砂堆積	泥炭系陶器器・瓦	作土	
NG3～4B	3	黄褐色(10YR5/6)含砂礫粘土質シルト	20	→耕作溝 ▼耕作溝	瓦質土器・瓦器・土器・中國製磁器	作土	161～165・ 166～169
NG4C	4	黄褐色(2.5Y5/3)含砂礫粘土質シルト	45	SB401-402, SK401 SB701～706	黑色土器・鐵器器・土器	作土	166-167・170 -173～179
NG15	5	明黄褐色(10YR7/6)砂礫	40	▼大型哺乳類足跡化石			
	6	明黄褐色(10YR7/6)砂礫～砂礫混り粘土質シルト	±10				
NG16A	7	明黄褐色(10YR6/6)砂礫混り粘土質シルト	25				
NG16Bi	8	浅黄色(7.5Y7/3)粘土	≥20		植物遺体	吾彦火山灰 起源の±93	
	9	オリーブ黃色(7.5Y6/3)粘土	20				
	10	浅黄色(7.5Y7/3)砂質シルト	20	▼大型哺乳類足跡化石			
	11	浅黄色(5Y7/3)砂礫底り粘土	20				
	12	オリーブ黃色(5Y6/3)～浅黄色(5Y7/3) 粘土・砂礫底り土・粗粒砂	15	▼大型哺乳類足跡化石 ↓大型哺乳類足跡化石			
	13	オリーブ灰褐色(5GYS1)粘土	10				
	14	綠灰色(7.5GY6/1)砂礫底り粘土	10				
	15	暗緑灰色(10GY3/1)含砂礫粘土	15				
	16	綠灰色(10GY6/1)～明緑灰色(7.5GY8/1) 砂礫	150				
	17	綠灰色(5G6/1)粘土	30				
	18	綠灰色(5G5/1)シルト					

第9層：オリーブ黄色粘土層で、層厚は約20cmである。

第10層：浅黄色砂質シルト層で、下面で大型哺乳類の足跡化石を検出した。層厚は約20cmである。

第11層：浅黄色砂礫混り粘土層で、層厚は20cm弱である。

第12層：オリーブ黄～浅黄色粘土偽礫混り中～粗粒砂層である。自然流路の埋土で、層厚は約15cmである。この層準の下面や基底面で大型哺乳類の足跡化石を検出した(図版8)。

第13層：オリーブ灰色粘土層で、鉄・マンガンの粒子を多く含む。層厚は約10cmである。

第14層：緑灰色砂礫混り粘土層で、層厚は約10cmある。粘性が強い。

第15層：含砂礫暗緑灰色粘土層で、カルシウムの粒子を多く含む。層厚は約15cmである。

第16層：緑灰～明緑灰色砂礫層で、層厚は1.5m程度あり、締まりがよい。長原16Biii層に相当すると思われる。

第17層：緑灰色粘土層で、層厚は約30cmである。

第18層：緑灰色シルト層で、TP+6.8mで上面を確認した。長原16Biii層の一つであると考える。

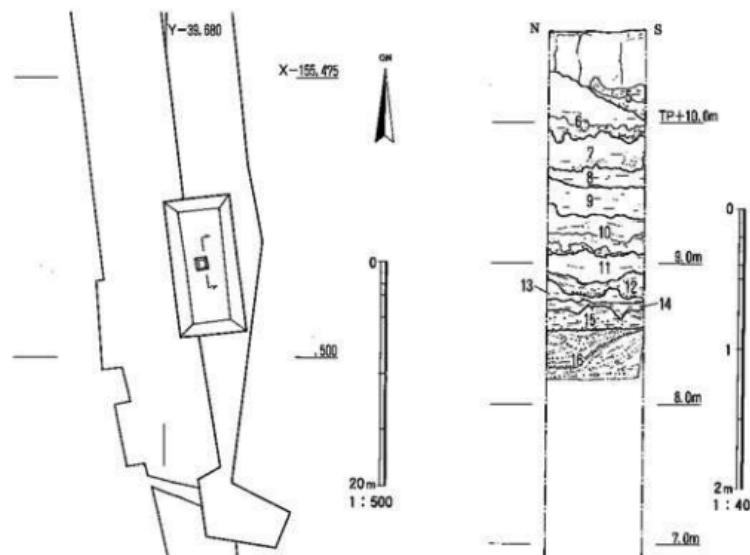


図43 深掘りトレンチの位置と東壁断面図

ii) 各層出土の遺物(図44・45、図版26・27)

161～165および168・169は第3層から出土したものである。

161は瓦質土器の擂鉢である。口径は25.2cmに復元できる。15世紀前半のものであろう。

162は土師器碗である。口径は11.4cm、残存高は3.3cmである。口縁部はヨコナデで調整し、やや外反する。底部はユビオサエで仕上げている。平安時代Ⅲ期のものであろう。163は口径8.0cm、器高1.5cmの瓦器皿である。口縁部はヨコナデで、端部を丸くおさめる。底部はユビオサエである。13世紀後半のものと思われる。164・165は須恵器杯身である。口径は164が9.8cm、165が13.0cmである。前者がTK217型式、後者がTK209型式に該当すると思われる。

168は分銅形土製品の上半部である。横7.2cm、縦の残存長3.5cm、厚さ1.0cmである。抉りは片方のみ残り、外縁に沿って列点文を施している。色調は浅黄色で、胎土には2mm以下の長石などを多く含み、焼成は良好である。弥生時代後期のものであろう[辻美紀1998]。

169は紡錘形の管状土錐で、残長5.4cm、直径2.6cm、孔径は0.6cm、重量32.8gある。色調は灰黄褐色で、胎土には5mm以下の長石・雲母が多く含まれる。

166・167・170は第4層から出土したものである。166は灰陶器碗の底部である。高台の断面は台形で、直径は5.7cmである。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。釉は灰白色である。167は口径11.2cm、器高1.9cmの土師器皿である。口縁部はヨコナデ、底部はユビオサエにより調整する。平安時代Ⅳ期に属するものであろう。170は残長3.9cm、直径1.9cm、重量14.3gの有溝土錐である。

171は直径0.65cm、長さ1.55cmの碧玉製の管玉である。孔の大きさは一方が直径1.73mmであるのに対し、もう一方が直径0.83mmと小さいことから、穿孔は一方向から行われたと

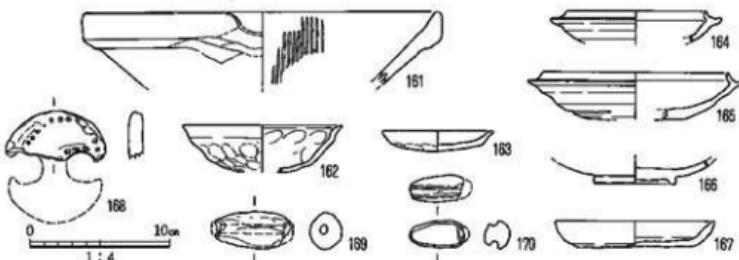


図44 各層出土遺物
第3層(161～165・168・169)、第4層(166・167・170)

思われる。97-18次調査区の南東部にある近現代の用水路から出土した。

172-179は各層から出土したサヌカイト製の石器で、すべて遊離資料である。172-175は凹基無茎式石鏃である。172は切先と逆刺の一方を欠く。逆刺に丸みを持たせていることからB-2類に属するものである。173は切先角が65°と幅広で逆刺が鋭いことからA-1類に属する。174は作用部が直線的で逆刺が比較的鋭いことからB-1類、175は逆刺が丸みを帯びていることからB-2類に属する。176-178は横長剥片を素材とするナイフ形石器で、すべて一個縁加工である。176は先端を欠く。細部調整は粗い。177は小型で、細部調整が基部に及ぶ。178はていねいな細部調整が施され、一部に対向調整も見られる。179は石槍あるいは作りがていねいであることから打製短剣の基部になる可能性もある。背面に自然面を残す横長の剥片を素材として作られており、打製短剣とすると鎬は明瞭ではない。

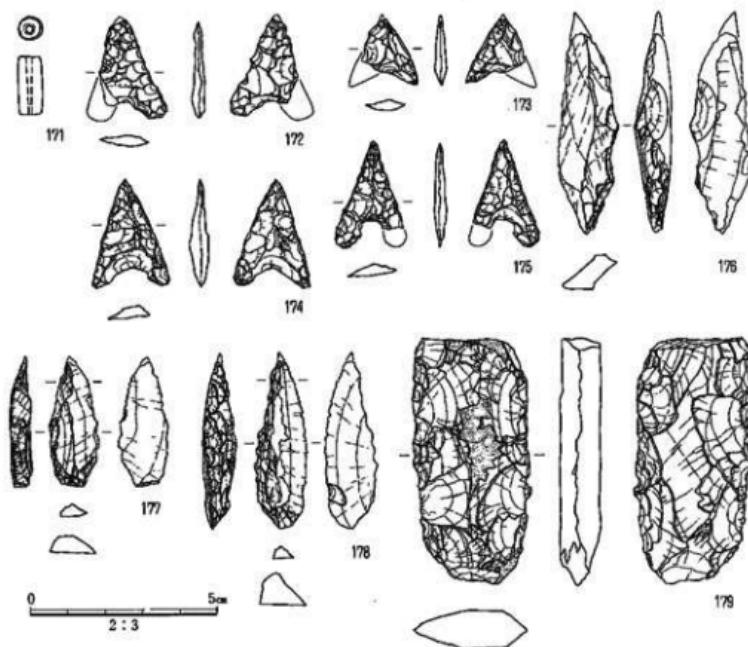


図45 各層出土の石製品および石器
第1層(171・172)、第4層(173-179)

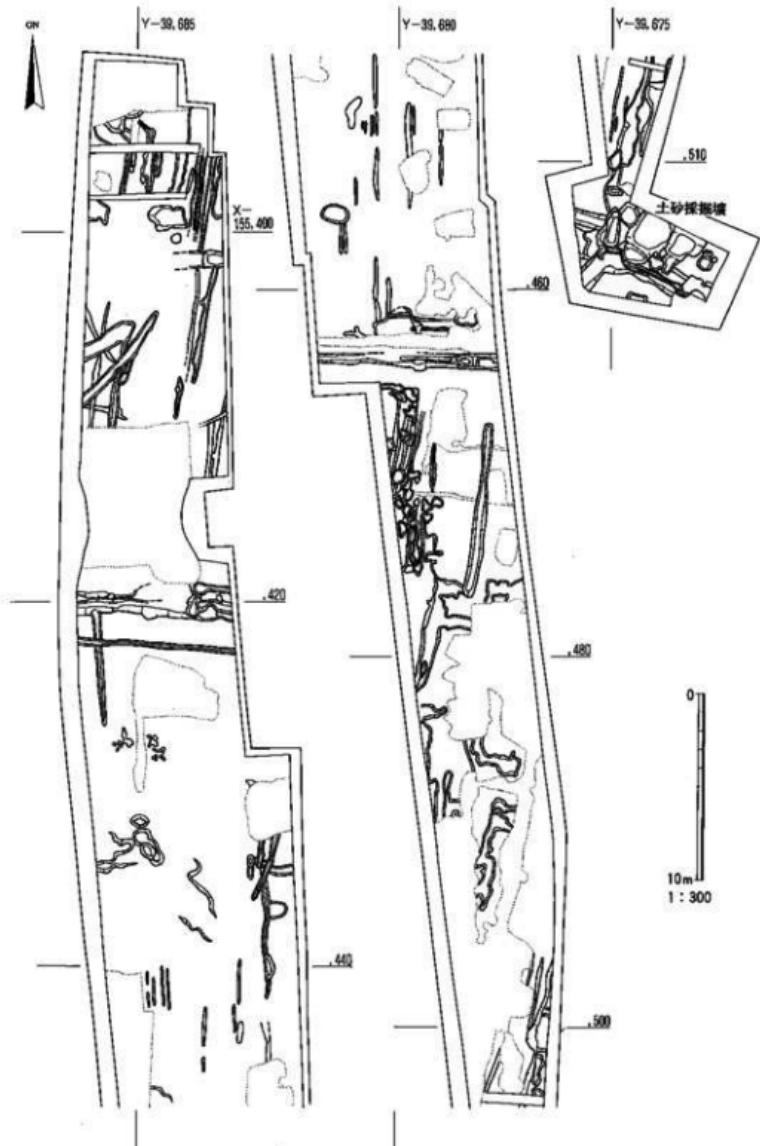


図46 江戸時代の造構平面図

2) 遺構とその遺物

i) 江戸時代(図46、図版7)

第2層下面で土砂採掘場および耕作溝を検出した。

土砂採掘場は97-18次調査区の南端から東壁に沿って、重複しながら掘られていた。平面形は不整形な楕円形と方形のものがある。深さは検出面から約0.7mある。埋土中からは肥前系陶磁器や土師器が出土していることから、18世紀の遺構と考えられる。

耕作溝は97-18次調査区全域に見られ、南北方向を示すものが多いが、97-18次調査区の南端で周囲より0.5mほど低くなった部分では東西方向のものが見られた。なお、97-49次調査区では、この段階の耕作溝は残っていなかった。

ii) 鎌倉～室町時代(図47・48、図版7)

第3層途中面および下面で耕作溝を検出した。耕作溝の大半は南北方向であるが、下面でのみ、調査区南端から54m付近と95m付近で東西方向のものが見つかった。これらは土地の境界を示すものであろう。なお、耕作溝は鎌倉時代以降のものであるが、作土層は平安時代からある。

iii) 平安時代(図49～53、図版8)

a) 掘立柱建物

SB401 柱穴の配置から、南北3間、東西1間以上と推定される庇付きの掘立柱建物である。柱穴の平面形は円形で、直径は

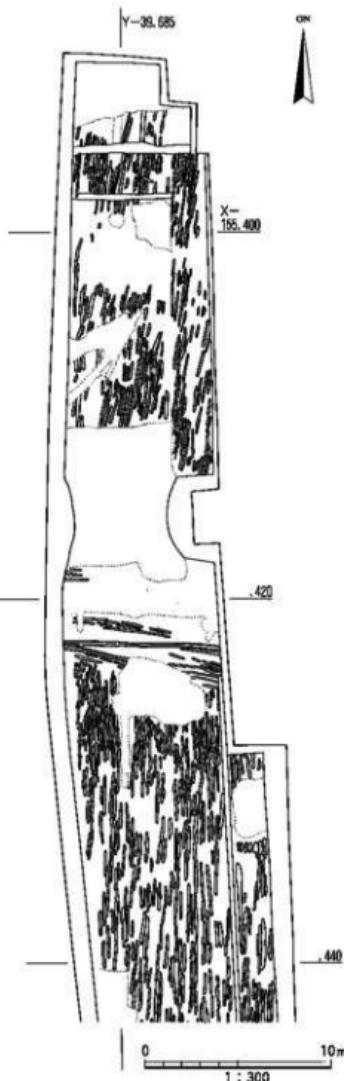


図47 鎌倉～室町時代の遺構平面図(1)

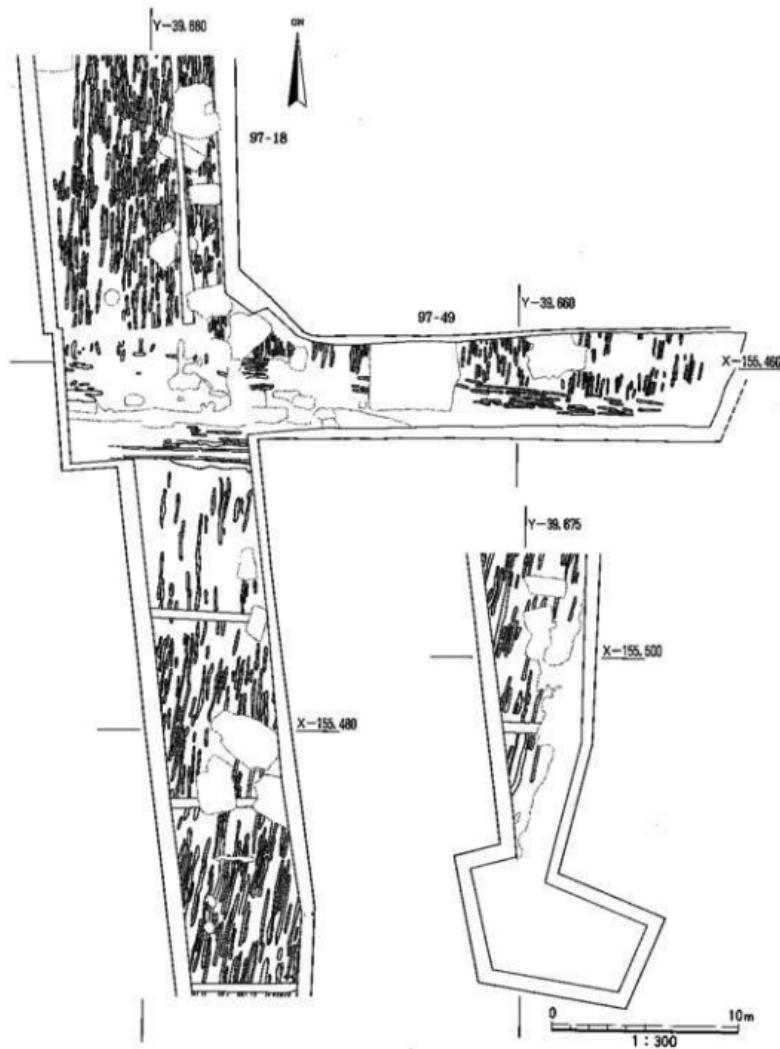


図48 鎌倉～室町時代の遺構平面図(2)

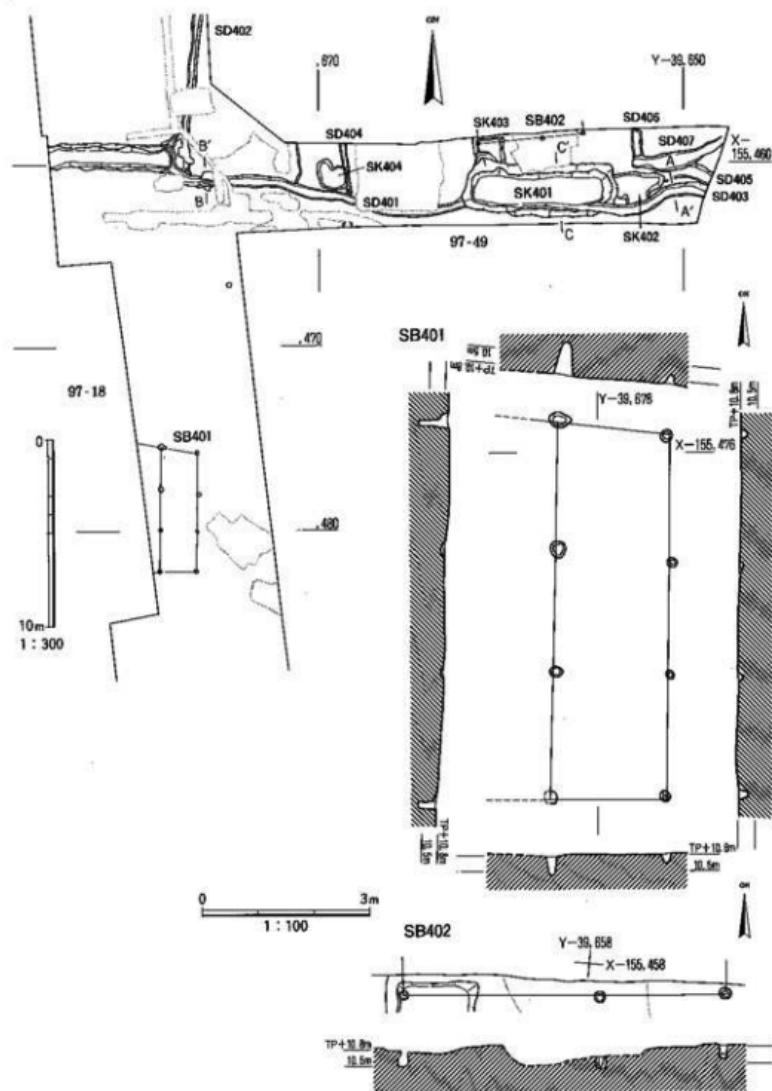


図49 平安時代の遺構平面図およびSB401・402実測図

約0.3mである。深さは北西と南西のものが深く、それぞれ0.55m、0.30mであったが、そのほかは0.10m弱である。柱穴の中心間の距離は約2.2mで、東側の柱列は柱穴が浅いことから、東側に庇をもつ掘立柱建物であった可能性がある。柱穴からの出土遺物はなかったが、柱穴埋土と柱穴の平面形から平安時代の建物と考えた。

SB402(写真7) 97-49次調査区で確認された。東西に柱穴が直線上に3基並ぶ。柱穴の平面形は円形で直径0.15mあり、その形態はSB401に類似する。柱穴の中心間の距離は西が3.5m、東が2.3mとばらつきがある。また、柱穴の底の高さは、西から順にTP+10.45m、10.35m、10.60mであった。なお、SK401のもっとも深い部分はTP+10.50mであったが、柱穴は見られなかったことから、SK401とは重複関係ではなく、建物自体は北側に延びるものと思われる。

b)水溜状造構

ここではSK401とSD401・403について、下記に記すとおり水溜として一連で機能していたと判断したため、一括して報告する。

SK401(図50、写真8)は、東西8.2m、南北2.6mの隅丸長方形を呈する土壙で、深さは0.35mある。埋土は3層に分層できる。

SD401(図52)はSK401の西側につながる溝で、NG82-23次調査区のSD407とは連続する[大阪市文化財協会1990a]。溝の規模は97-49次調査区および97-18

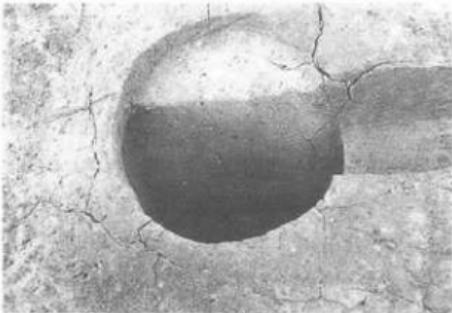


写真7 SB402柱穴断面

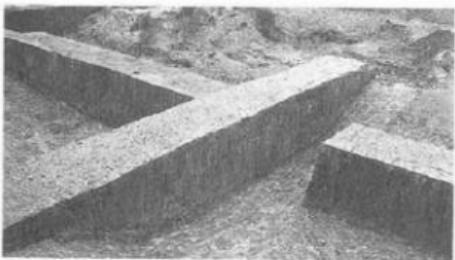


写真8 SK401地層断面



図50 SK401断面図

次調査区の東半分では幅0.3~0.5m、深さが0.2~0.3mであるが、後述するSD402と合流する付近では幅約1.4m、深さ0.4mとやや大きなものとなっている。この部分での埋土は大きく3分され、最下層である3層は粗粒砂、2層は粘土層、1層は段丘構成層の偽礫混りシルトである。溝の周囲は踏込みが顯著であることから、水が溝からオーバーフローすることが多かったと考えられる。また、溝の底は東側が高く、西側ほど低くなることから、西側に水を流したことがわかる。

SD403(図52)はSK401の東側に取付いている。幅は0.6m、深さ0.3mである。SD401と同じく、溝の底は東側が高く、西側が低いことから、西側に水を流したことがわかる。

これらの溝の埋土はSK401の2・3層と共通するうえ、切合いが確認できなかったことから同時期の遺構であると判断した。また、SK401の3層が水成のシルト質粘土層であったことから、この施設が滯水状態であったと判断される。よって、SK401はSD403から引かれた水を溜めて、上澄みをSD401に流し出した施設ではなかろうか。これらの遺構が機

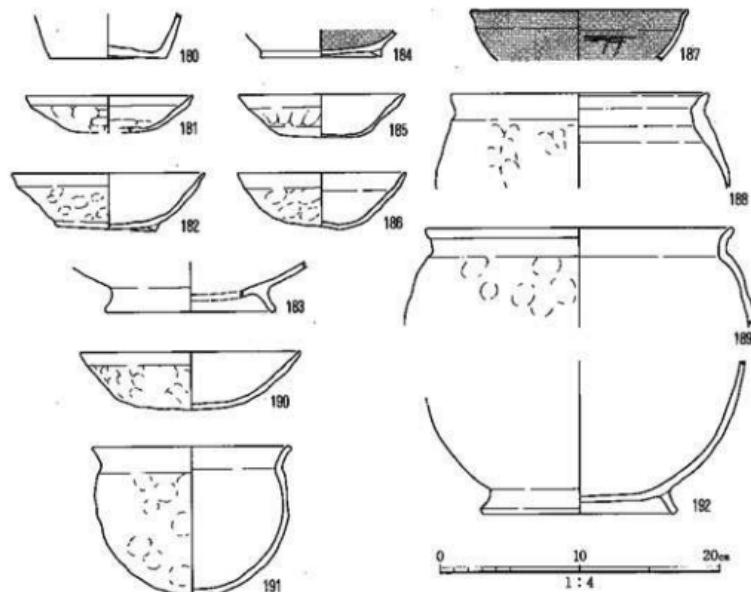


図51 SK401、SD401-404出土遺物
SK401(180~189)、SD401(190・191)、SD404(192)

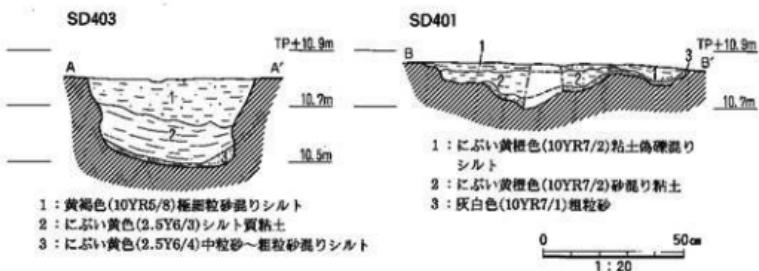


図52 SD401・403断面図

能した時期は、下記の遺物で示すとおり、10世紀前半頃と思われる。

SK401から出土した遺物は180～189である(図51、図版26)。1層からは180・183・187が出土した。180は底部の直径が8.2cmの須恵器壺である。底部には糸切り痕が観察される。焼成が非常にあまいせいか、器表の荒れが激しい。183は土師器壺の底部である。高台径は11.9cmである。187は口径が15.4cmある黒色土器B類椀である。口縁部はやや外反しており、ヨコナデによって調整している。内面には横方向のヘラミガキが施される。これらは平安時代Ⅲ期に属すると思われる。

2層から出土した遺物は181・182・185・189で、189以外は土師器椀である。181・185は口縁部をヨコナデで調整し、底部はユビオサエである。181は口径11.8cmで、器高は2.7cm、185は口径11.9cm、器高は3.1cmで、高台はない。182は口径13.7cm、器高4.2cmで断面が三角形の高台が付く。底部はユビオサエで調整し、口縁部はヨコナデで仕上げている。189は土師器壺で、口径は21.6cmである。口縁部は外反し、ヨコナデを施す。体部外面はユビオサエのあとナデで仕上げている。これらは平安時代Ⅲ期古段階に属するものと思われる。

184・186・188は3層から出土したものである。184は黒色土器A類椀の底部で、高台径は8.6cmである。186は土師器碗で、口径11.9cm、器高4.1cmである。外面調整はユビオサエで、口縁部はヨコ

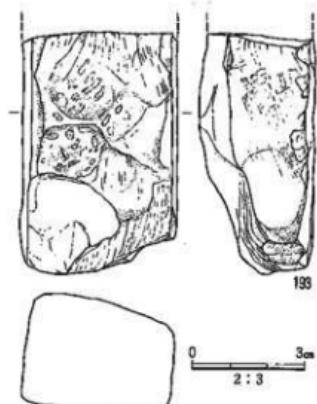


図53 SD401出土の砥石

ナデで仕上げるが、歪みが大きい。188は土師器壺である。頸部の器壁は厚く、口縁部がやや外反する。体部外面はユビオサエで、内面はナデ、口縁部はヨコナデで調整する。これらの土器は平安時代Ⅱ期中～新段階に属すると思われる。

SD401の遺物には190・191の土師器、193の砥石がある(図51・53)。190は口径15.6cm、深さ4.2cmの碗である。粗製で、器形は全体に歪んでいる。体部外面をユビオサエで調整し、口縁部はヨコナデで仕上げている。191は口径13.7cm、器高10.7cmの壺である。口縁部は外反し、調整はヨコナデである。体部外面はユビオサエである。これらの遺物は平安時代Ⅱ期中～新段階に属すると思われる。

193は幅4.2cm、最大厚3.0cmあり、砂岩製である。

c) そのほかの溝

SD402 幅0.45m、深さ0.1m弱の南北方向の溝で、南側でSD401に合流する。切合いか見られないことから、SD401と一連のものかもしれない。

SD404 幅0.35m、深さ0.1mの南北方向の溝である。SD401、SK404に切られている。遺物では192の土師器壺の底部がある(図51、図版26)。高台径は13.7cmである。平安時代に属すると思われる。

SD405 東西方向の溝で幅0.8m、深さ0.1mである。SD407とSK402に切られる。遺物は土師器の細片しか出土しなかった。

SD406 南北方向の溝で幅0.6m、深さ0.05mである。SD407に切られている。

SD407 東西方向の溝で幅0.8m、深さ0.1mである。出土遺物は土師器の細片のみで、黒色土器は出土していないことから、平安時代以前の遺構である可能性もある。

d) そのほかの土壤

SK402 97-49次調査区の東部に位置する不整形な土壤である。東西2.8m以上、南北1.6m以上で、西側をSK401に、南側をSD403に切られている。埋土には平安時代Ⅱ期頃の土師器片が含まれる。

SK403 97-49次調査区の中央に位置する。東西1.6m、南北1.3m以上で、南側をSK401に切られる。弥生土器と須恵器の細片が出土したのみで、時期を特定するのは困難であるが、平安時代以前の遺構になる可能性がある。

SK404 97-49次調査区の西部に位置する不定形な土壤である。東西1.5m、南北2.0mで、SD404を切る。遺物は少量であるが、平安時代中期の遺構になると思われる。

iv) 飛鳥時代(図54、図版9・10)

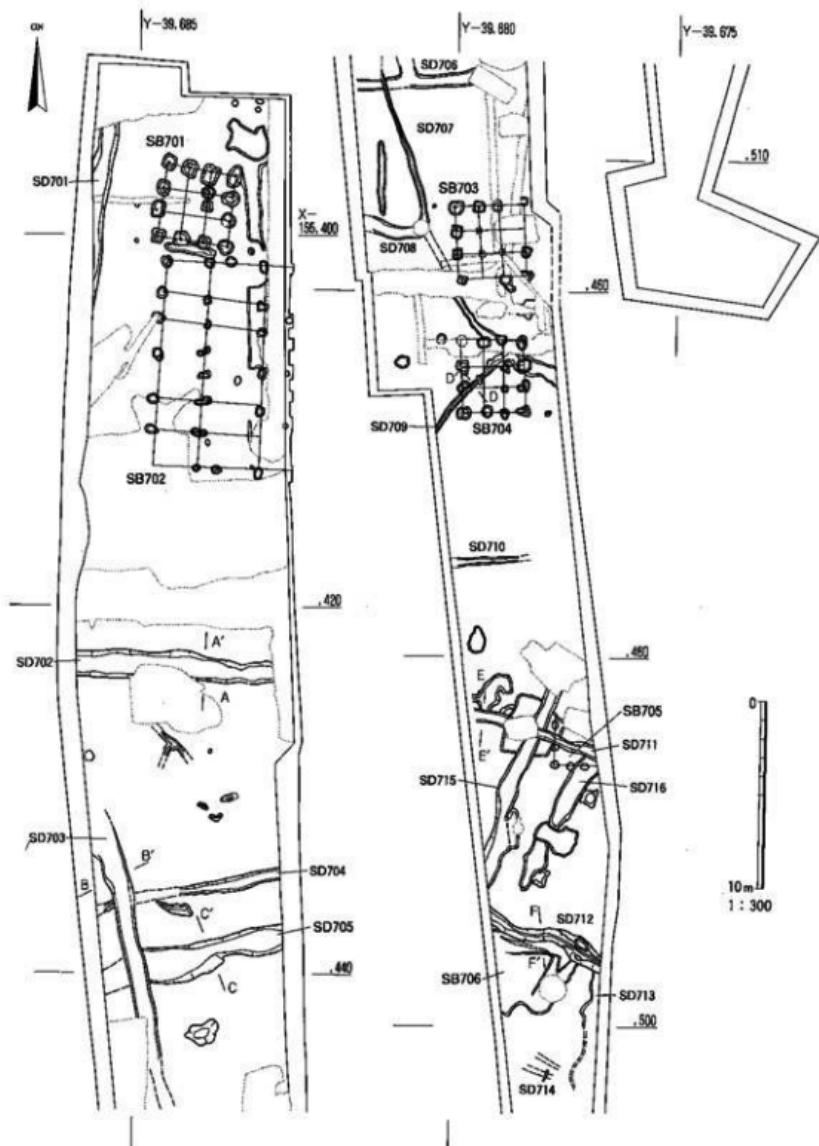


図54 飛鳥時代の遺構平面図

飛鳥時代の遺構は97-18次調査区で、掘立柱建物5棟、竪穴住居1棟、溝16条を検出した。なお、97-49次調査区ではこの時期に確定できる遺構はなかった。

a) 掘立柱建物

SB701(図55、図版10) 97-18次調査区の北端で検出した。東西が約3.7m、南北が約4.0mで平面形は正方形に近い。東西・南北ともに3間である。個々の柱穴は残存する深さが0.3~0.4m、一辺が0.6~0.8mの隅丸方形で、柱間距離は約1.3mである。建物の内部の柱穴は東側2列目に1つしかないが、本来は総柱建物であったと推定される。また、南東隅の柱穴の東側に、深さが0.3m、一辺0.4mの隅丸方形を呈する柱穴があったが、建物との関係は不明である。柱はいずれも抜き取られており、柱筋は柱穴の底にわずかに残っていた窪みによって推定した。柱穴からはTK209型式と思われる須恵器の細片が出土している。なお、NG95-76次調査で検出されたSB602は、SB701の北東側3mに位置する。この建物は東西方向が約4.2m、南北方向が約3.9mであり、大きさはほぼ同じである[大阪市文化財協会2000a]。

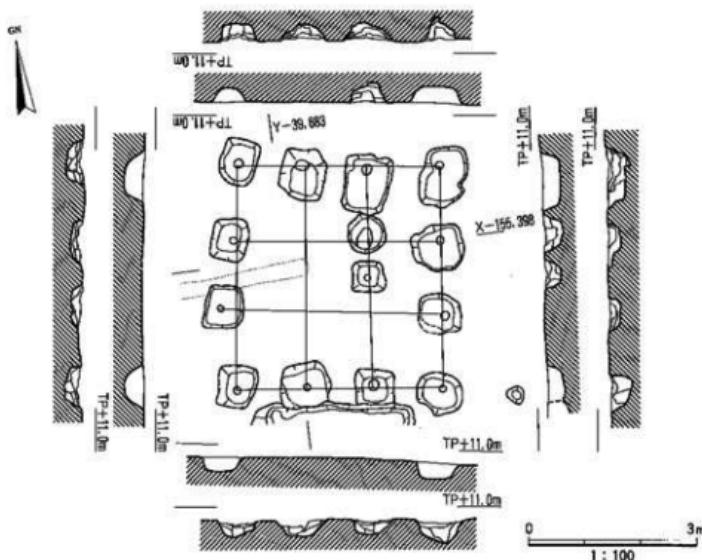


図55 SB701実測図

SB702(図56、図版9・10) SB701の南側に隣接する掘立柱建物で、南西隅の柱穴が後世の擾乱により失われているが、東西2間、南北6間と推測される。規模は南北が約10.8m、東西が約5.4mで、棟の方位はN3°Eである。個々の柱穴は一辺が0.3~0.5mで、深さが0.1mほどの浅いものと、0.3~0.4mの比較的深いものに2分される。ただし、中央列は

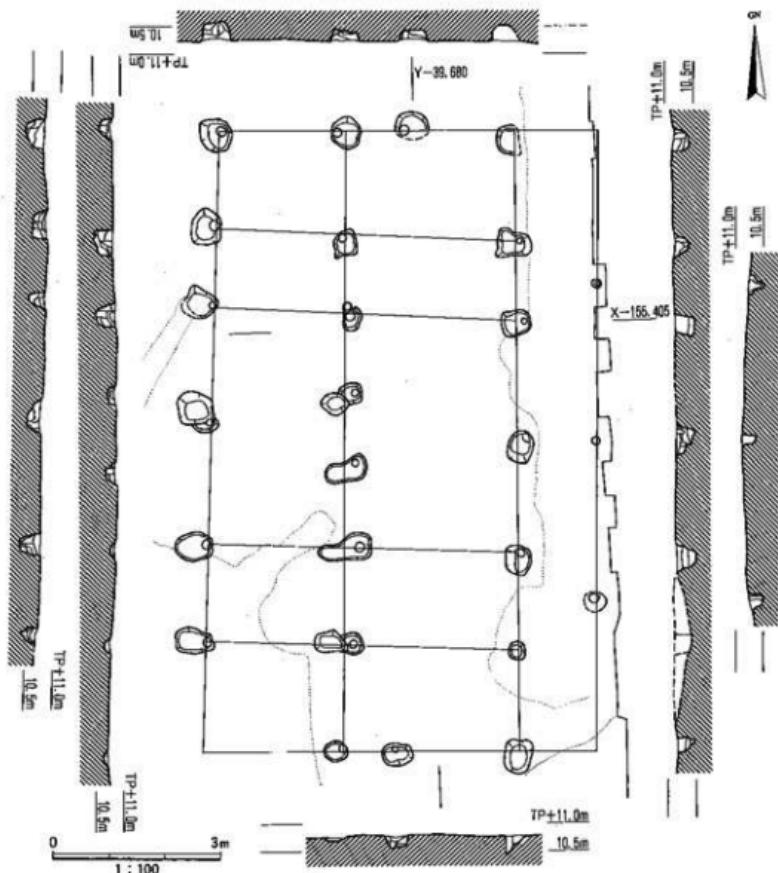


図56 SB702実測図

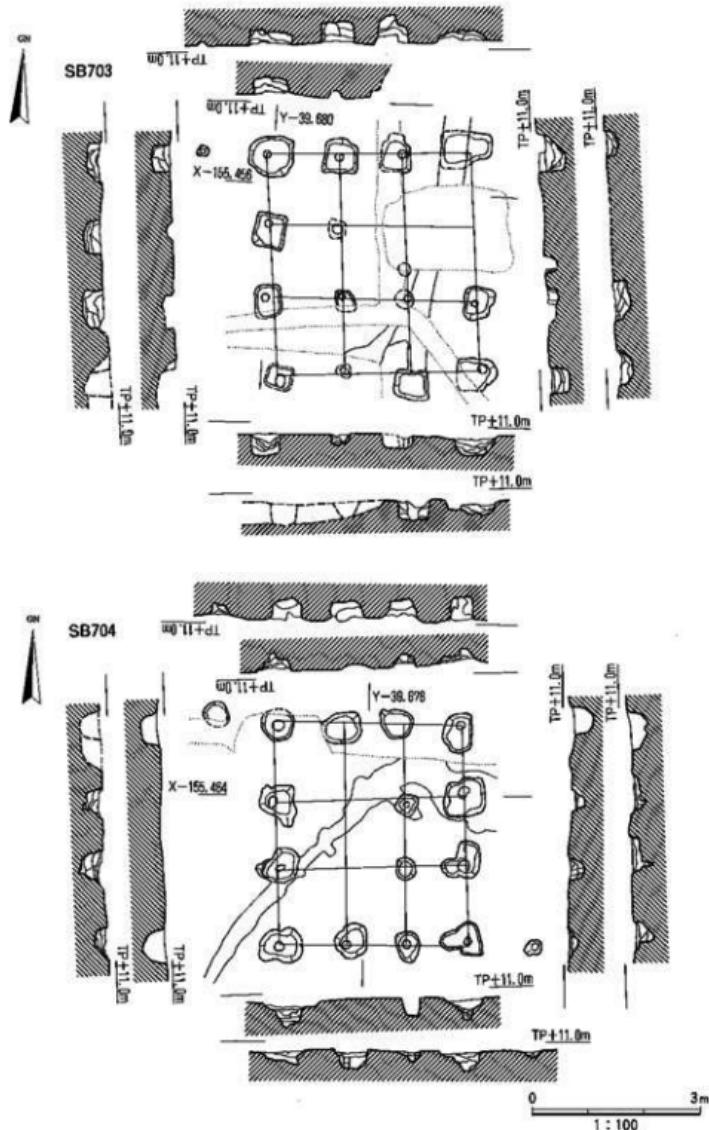


图57 SB703·704实测图

北側の3個が深いのに対し、南側の柱穴は浅い。また、梁行には梁を支えたと考えられる柱穴の東側に別の柱穴がある。柱穴はほとんどが抜き取られていたが、一部確認できたものによると柱痕跡は直径0.1mであった。また、柱筋は柱穴の底に残っていたわずかな丸い瘤みによって推定した。建物の東側に直径が0.2~0.3m、深さが0.25m前後の柱穴3基が棟の方に平行して並んでいることから、庇があったと思われる。

SB703(図57、図版10) 調査区のほぼ中央で検出された総柱建物である。桁行・梁行とともに3間で、東西が3.6m、南北が3.7mある。側柱の柱穴は一辺約0.5~0.6mの隅丸方形で、深さが0.3~0.4mである。側柱の内側で検出された柱穴はやや規模が小さく、一辺が0.4~0.6m、深さが0.3~0.4mである。柱はいずれも抜き取られており、柱穴の底に残ったわずかな瘤みを基に柱筋を推定した。これらの柱穴のほかに、北西の柱穴の西側に直径0.2m、深さ0.1mの小柱穴が存在する。なお、柱穴からは須恵器・土師器の細片が出土しているが、TK209型式と思われるヘラケズリが施された須恵器杯の破片が含まれていた。

SB704(図57、図版10) SB703の南側に約5m離れたところにある総柱建物である。桁行・梁行がともに3間、東西が3.3m、南北が3.7mある。側柱の柱穴は一辺約0.5~0.6mの隅丸方形で、深さは0.3~0.4mある。床東の柱穴はやや規模が小さく、一辺が0.4~0.6m、深さが0.3~0.4mである。柱はいずれも抜き取られており、柱穴の底に残っていたわずかな瘤みを基に柱筋を推定した。柱穴は後述するSD707・709に切られ、SD707からは7世紀前半頃の須恵器が出土していることから、建物の年代はそれ以前である。なお、北西の柱穴の西側と南東の柱穴の東側に小柱穴が存在するが、建物との関係は不明である。

SB705(図58) SD711と重なる部分で検出された東西、南北ともに2間以上の建物である。柱穴は直径が約0.3mの円形、深さが0.1m弱で、ほかの飛鳥時代の建物に比べて小型であるが、先述した平安時代のものとも異なる。柱穴の間隔も先の建物に比べて短いが、時期を決定する資料がなく、飛鳥時代以前の可能性もある。

b) 穫穴住居(図59、図版9)

SB706 調査区の南部で周壁溝と造付け竈が見つかったことから竈穴住居と判断した。ただし、主柱穴は検出できなかった。周壁溝から判断して、平面形は一辺が約3mの方形であったと考えられる。竈は南壁の中央から

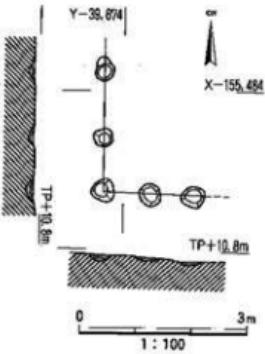


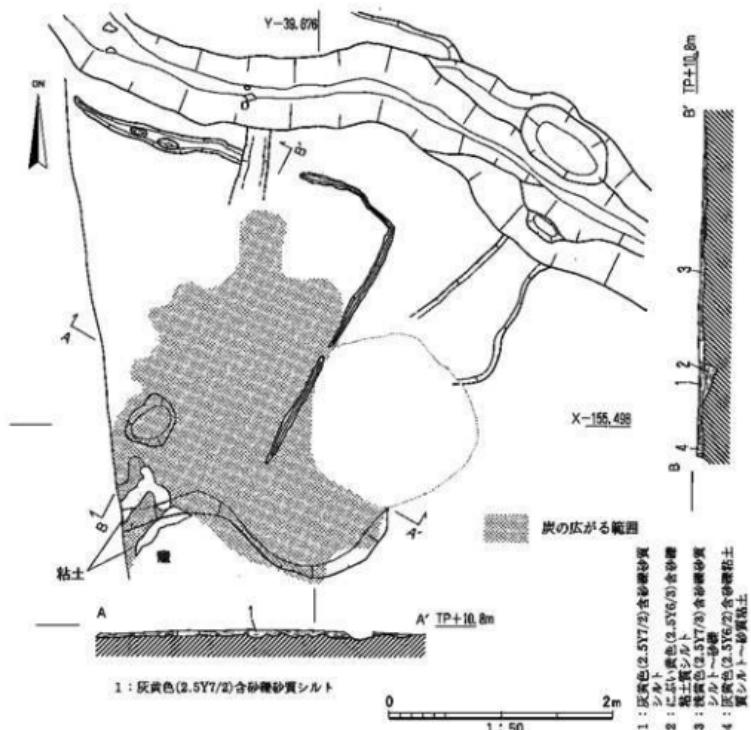
図58 SB705実測図

やや東寄りの部分に敷設されていたと思われる。馬蹄状に巡らした粘土の内側では、炭化物が多く見られた。

遺物としては194～197の須恵器がある(図61、図版27)。194は口径14.4cm、器高3.1cmの杯蓋で、天井部には回転ヘラケズリが施される。灰白色を呈し焼成は良好である。195～197は杯身で、口径11.2～12.2cm、器高は3.3～3.7cmで、いずれも回転ヘラケズリが施される。196は焼成が極めて悪いがほかは良好である。いずれも床面から出土したもので、TK209型式に相当すると思われる。

以上の遺物から判断して、この竪穴住居は飛鳥時代初頭に属するものと思われる。

c) 溝(図60・61)



SD701 97-18次調査区の北部で見つかった南北方向の溝で、NG95-76次のSD603と一連のものと思われる〔大阪市文化財協会2000a〕。幅は約1.3m、残存する深さは約0.3mである。埋土は大きく3層に分かれ、上層は後世に作土化した砂質シルトが垂れ込み、中層は水成起源の粘土質シルト、下層は段丘構成層の偽疊を多く含む砂質粘土であった。

遺物では198・206・209が出土した(図61、図版27)。198は須恵器杯蓋で口径12.8cm、残存高2.5cmで、天井部には回転ヘラケズリが施される。TK209型式に属すると思われる。209は須恵器の高台付長頸壺である。口径は8.8cm、胴部の最大径15.2cm、高台は失われているが、残高は20.5cmである。肩部に沈線を1条巡らし、以下をヘラケズリ、上はヨコナアで仕上げている。焼成はあまりよくない。206は土師器把手付椀の把手部分である。

SD702 東西方向に延びる溝で、幅が1.0~1.3m、深さが0.15~0.20mである。埋土はSD701に類似する。NG82-23次のSD404と一連の溝である。実測図には掲載していないが、この溝からTK209型式と思われる須恵器が出土している。

SD703 幅が約0.8m、深さは0.05m未溝である。後述するSD704・705を切っていた。また、SD701につながる可能性が考えられるが、これらの延長線上で交差すると思われる部分が調査区外に当り、確認することはできなかった。

SD704 SD705の北側に約2m離れて平行する溝であるが、溝底の踏込みしか確認できず、詳細は不明である。踏込み内から208の須恵器が出土した(図61)。

208は高杯形器台の杯部と思われる。口径は22.6cmあり、口縁部下に2条の沈線を巡らす。杯底部外面には平行タタキが施され、底部内面には同心円の当て具痕が見られる。

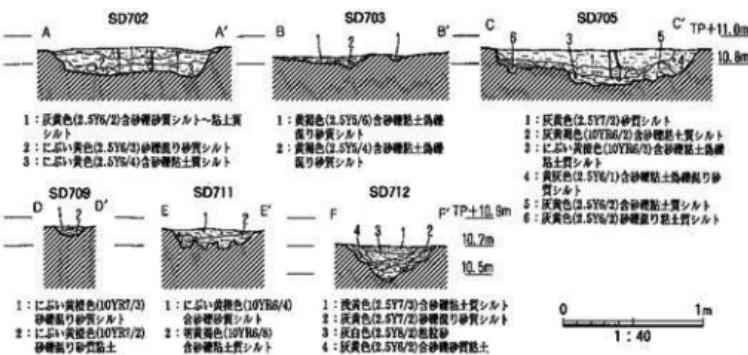


図60 飛鳥時代の溝断面図

SD705 東西方向の溝で幅が1~2m、深さは0.2m前後である。

遺物では199・200・203・204が出土している(図61、図版27)。199・200はいずれも須恵器の杯身である。口径は10.8~11.6cm、器高が3.6~3.8cmである。199は底部の回転ヘラケズリが粗雑で、胎土もかなり悪い。200は仕上げはていねいだが、焼成は極めて悪く、灰

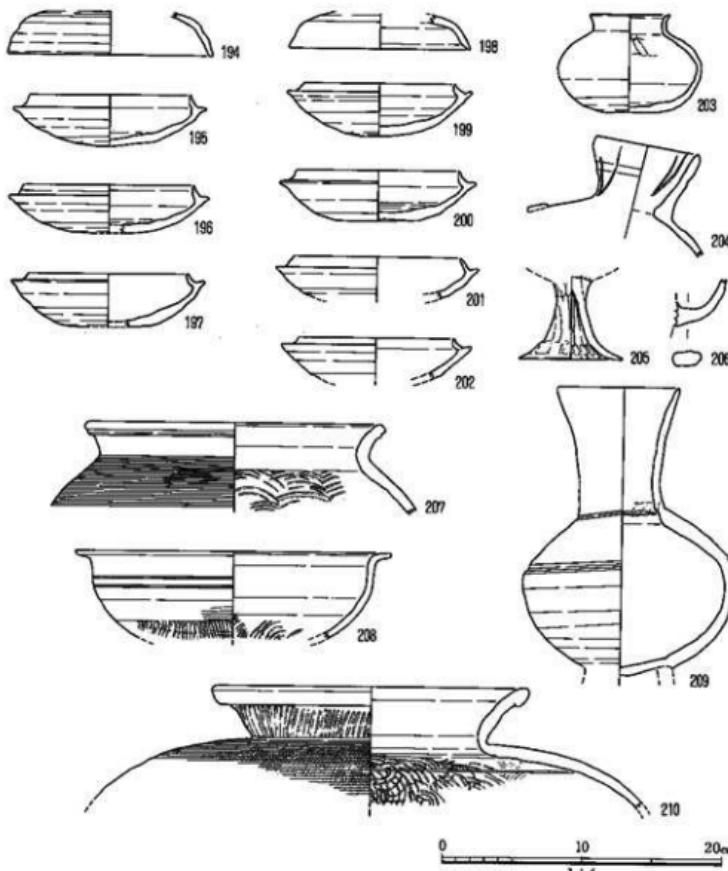


図61 飛鳥時代の各遺構出土遺物

SB706(194~197)、SD701(198・206・209)、SD704(208)、SD705(199・200・203・204)、SD707(210)、SD711(202・205・207)、SD712(201)

白色を呈する。203は須恵器短頸壺である。口径は5.6cm、体部最大径は10.3cm、器高は7.0cmである。底部はヘラケズリで調整し、ほかはヨコナデである。口縁部はやや外反しながら立上がり、端部は鋭い。204は須恵器平瓶の口縁部である。口径は7.4cmであり、浅い沈線を1条巡らしている。口縁部内外面に「V」字状のヘラ記号を刻んでいる。全体に浅黄橙色を呈し、焼成は極めて悪い。これらはいずれもTK209型式のものであろう。

SD706 SD703の南側にある東西方向の溝で、幅が0.65m、深さが約0.05mある。

SD707 幅0.3m、深さ0.1mの南北方向の溝で、調査区の中央部で東側へ大きく曲がり、SB704を切っている。SB703と重なる部分で、210の須恵器壺が出土した(図61)。口径は22.6cmで、口縁部は外反し、端部は折り返して丸くおさめている。体部外面はタタキを施したのち、カキメにより仕上げている。TK209型式もしくはTK217型式に属するものと思われる。

SD708 調査区の中央西寄りの部分で検出した溝である。幅は0.6~0.9m、深さは約0.1mである。NG82-23次調査区のSD406につながるものと考える。

SD709 NG89-67次調査区のSD627[大阪市文化財協会1997a]へとつながる南西-北東方向の溝で、底の踏込み部分しか残っていなかった。SB704の柱穴を切っている。

SD710 NG89-67次調査区のSD628へ続く溝であるが、97-18次調査区の東半部では削平されていた。幅は0.5~0.7m、深さは0.1mほどであった。

SD711・712 NG89-67次調査区のSD629・630と一連の溝でほぼ平行し、いずれもSD715を切る。深さはSD712が深く約0.25mある。SD712の下部の埋土は粗粒砂で水の流れられた痕跡を残すが、埋土の上半は砂礫を多く含む砂質シルトで、埋戻し土と思われる。

SD711から202・205・207が、SD712からは201が出土した(図61、図版27)。

201・202は須恵器杯身である。口径は11.2~11.8cmである。口縁部の立ち上がりは短く、底部には回転ヘラケズリが施される。いずれも胎土は2mm大の長石を多く含んで粗いが、焼成は良好である。207は須恵器壺である。口径は21.2cmで、全体に灰白色を呈し、焼成はあまりよくない。いずれもTK209型式に属するものであろう。なお、実測図には掲載していないが、SD711からヘラ切り後不調整の須恵器杯蓋の破片が出土している。

205は土師器高杯の脚部で、脚部の裾は直径7.4cm、残存高6.0cmある。内面にはシボリメがあり、脚柱部の外表面はナデで仕上げている。飛鳥IもしくはIIに属するものであろう。

SD712の東側と南側にも溝の痕跡と思われるSD713・714があったが、後世の削平を被つており、詳細はわからなかった。遺物は須恵器と土師器の破片が出土したのみである。

また、SD711に切られる北東から南西に向う2本の溝SD715・716がある。いずれも水成の砂質シルトを埋土とするが、遺物が出土しなかったため時期は不明である。

3) 小結

i) 平安時代

掘立柱建物2棟・水溜状遺構・土壤・溝が検出された。

水溜状遺構は報告で触れたとおり、SK401につながる部分ではSD403が深く、SD401が浅いという点、SK401の最下層である3層が水成のシルト層であるという点から、東から水を引いてきて、SK401で泥を沈殿させ、上澄みをSD401から排水した施設であると考えられる。これで得られた水は、おそらく飲料水などの生活用には適しないものであったと思われる。むしろ、97-18次調査区の南側で平安時代にさかのぼる作土層が確認されていることから、当調査区一帯は平安時代以降耕作地であり、農業用水として用いられたのであろう。なお、東側にあったと思われる水源については、東除川から求めるのは間に「馬池谷」があることから困難である。その一方で、「馬池谷」は平安時代にはかなり埋まっており、どの程度水源として利用可能であったかは不明である。この問題を解決するには今後の周辺調査の進展に期待したい。

ii) 飛鳥時代

掘立柱建物5棟、竪穴住居1棟、溝16条が検出された。

「馬池谷」の西岸で現在の大和川と瓜破支流に挟まれた一帯は、多くの飛鳥時代の建物跡が検出されている。これらは東西2群に分かれて分布しており、今回報告したのは東側の群に含まれる。ここでは東側の建物群の時期と遺構の拡がり、さらに周辺調査で検出された飛鳥時代の遺構群との関連について若干の検討を加えたいと思う。なお、以下では「馬池谷」の西側で東西に分かれて分布する建物群についてはそれぞれ「東側建物群」、「西側建物群」と称し、東側建物群で特定の建物を称する場合は表5に倣い、たとえばNG96-76次調査のSB701ならば、建物1と称することにする。

a) 遺構とその分布範囲

「馬池谷」西側の旧地形については[高橋2000]で整理されているが、それによると「馬池谷」の西岸沿いに南北に細長く延びる尾根状の高まりがあり、その西側には現大和川の堤防付近まで入込む浅い谷地形が存在する。さらにその西側は再び高くなり、瘤状に張出す丘陵状の地形となっている。建物群はこの東西の高まり上にそれぞれ立地している。

ここではさらに東側建物群の立地と分布範囲について細かく検討してみよう。図62は本調査区とその周辺の調査の成果で明らかになった飛鳥時代の遺構分布と、段丘構成層上面の標高を基にして作成した旧地形復元を示したものである。この尾根状の高まりの先端付近と西側斜面および東側の平坦面で建物が確認されており、本調査区の西に延びるNG82-23次調査の第Ⅱ調査区でも飛鳥時代と推定される柱穴が、NG89-43次調査区では飛鳥～奈良時代と思われる溝や井戸が検出されている[大阪市文化財協会1997a]。よって、建物群は本調査区より西にも展開するのは確実であろう。

建物3～5は今回報告した溝SD701の東側に分布している。この溝が建物3～5の西側を区切っているとするなら、さらに東側に建物が存在することを予想させる。しかし、NG95-13次[大阪市文化財協会2000a]や97-49次調査では飛鳥時代の遺構は検出されなかつた。建物3～5から約50m東では「馬池谷」の傾斜面にかかり、分布可能な範囲が限られることから、それほど多くの建物は存在しないと思われる。また、本調査区の南西のNG90-46次[大阪市文化財協会1997b]、西側のUR93-14次調査[大阪市文化財協会1999b]では飛鳥時代と思われる柱穴は見つかっておらず、同時期の遺構も少ない。特に、UR93-14次調査区より西側は谷地形の傾斜に当たり、これより西に建物群が拡がるには地形的に制約があったと推定される。NG90-46次については、調査所見によるとそれほど削平を受けておらず、元から遺構はなかったと考えられている。

以上から、飛鳥時代の建物の分布範囲を等高線や国土座標を目安に表現するならば、北と東西はTP+10.75mの等高線、南側はX=-155,550mの直線で囲まれた三角形を呈する

表5 長原遺跡西部地区の飛鳥時代建物

番号	次数	遺構名	間数	建物の形態	時期	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	方位	文献
1	96-76	SB701	3×2	繩柱	1期or2期	4.25	3.3	14.03	N38°W	④
2	95-41	SB601	2以上×2	側柱、柱穴小	2期	3.5≤	3.4	11.9≤	N20°E	③
3	95-76	SB602	3×3	繩柱か?	2期	4.18	3.86	16.13	N11.5°E	③
4	97-18	SB701	3×3	繩柱か?	2期	4.0	3.7	14.8	N7°E	①
5		SB702	6×2	繩柱、東面庇	2期	10.8	5.4	77.0	N3°E	①
6		SB703	3×3	繩柱	1期	3.7	3.6	13.32	N5°W	①
7		SB704	3×3	繩柱	1期	3.7	3.3	12.21	N2°W	①
8		SB705	2以上×2以上	側柱、柱穴小	?	2.5≤	2.0≤	5.0≤	N2°E	①
9		SB706		茎穴庇居、廻付	1期					①
10	89-67	SB618	3×2以上	側柱	1期	5.7	4.2≤	23.9≤	N10°W	②
11		SB619	2以上×2以上	側柱、柱穴小	1期	4.1	2.8	11.5≤	N1°W	②
12		SB620	4以上×3	側柱	1期?	8.0≤	5.7	45.6≤	N28°W	②

註1) 文獻の番号は以下のものを目指す。

①本報告、②[大阪市文化財協会1997a]、③[大阪市文化財協会2000a]、④[大阪市文化財協会2001]

註2) 桁行、梁行、面積で「≤」は「～以上」という意味を示す。また、建物の面積で庇付きは庇の部分も含める。

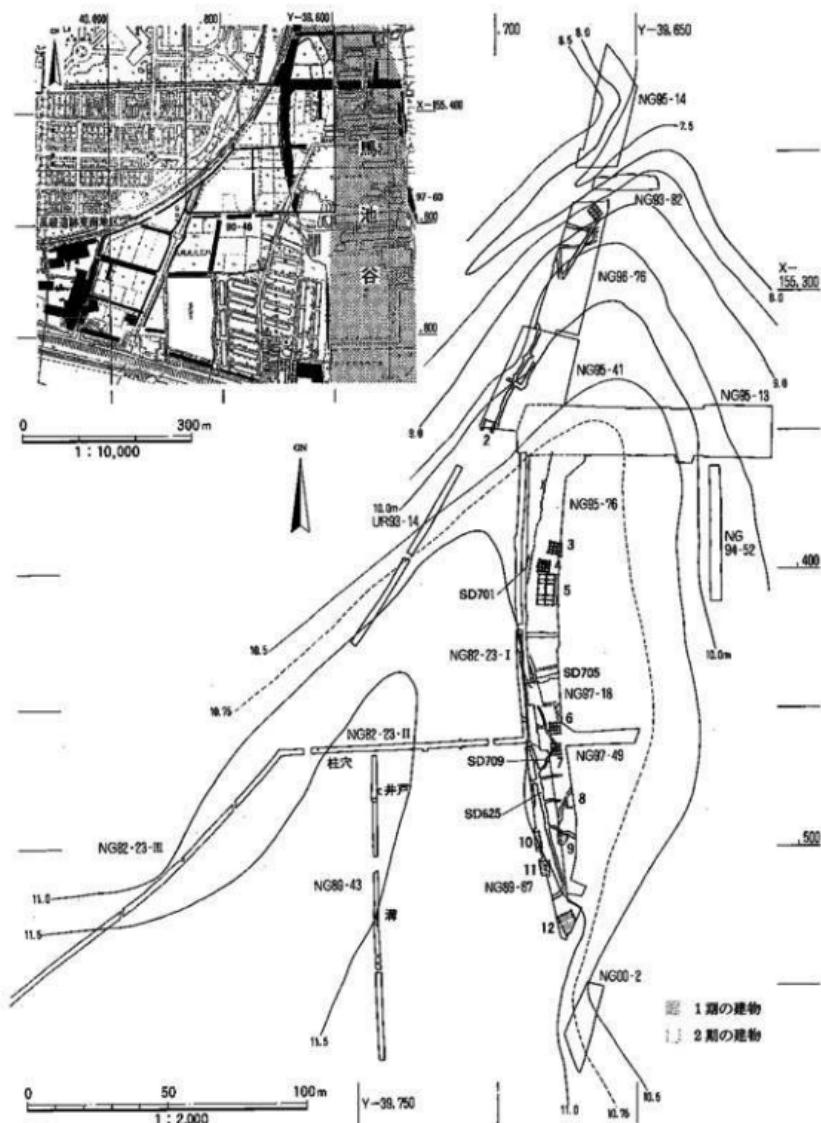


図62 調査地周辺の飛鳥時代の遺構

平坦地に多く分布していると思われる。

b) 出土遺物の時期

統いて、東側建物群内の変遷を把握するために、表5の調査で出土した飛鳥時代の遺物を概観する。ここではおもに時期の指標としやすい須恵器杯身・蓋を基に検討し、土師器などその他に良好な資料があれば用いることとする。

NG96-76次のSD712では飛鳥時代の遺物が比較的まとまって出土している[大阪市文化財協会2001]。ここから出土した須恵器杯Hの大半は口径は10.4~12.0cm、杯H蓋は12.0~13.2cmであり、天井部・底部は回転ヘラケズリで仕上げられるが、ごく一部にヘラ切り後不調整のものもある。これらはTK209型式に該当すると思われる。また、土師器杯Cも出土しているが、いずれも口径に対して器高が高く、飛鳥Iでも古い様相をもつ。なお、建物1との関係については方向が同じであるものの、建物1自体がSD712と同時期と思われる別の溝を切っていることから、後出する可能性がある。

NG95-41次のSD601は建物2に平行し[大阪市文化財協会2000a]、須恵器杯Hが完形で出土した。口径は9.6cmで、底部はヘラ切り後不調整である。TK217型式に属する。

NG95-13・76次のSD601[大阪市文化財協会2000a]と本報告のSD701は一連の溝で、建物3~5はこの溝にはほぼ平行する。ここから出土した須恵器杯Hは口径10.0cmあり、底部はヘラ切り後不調整である。TK217型式である。

NG89-67次で検出されたSD625などの溝[大阪市文化財協会1997a]や97-18次のSD705以南で検出された溝、建物9では、底部に回転ヘラケズリが施される須恵器杯Hが出土している。その口径は10.2~12.2cmで、TK209型式におさまると思われる。また、97-18次調査区に限れば、今回報告から除外した細片を含めてみても、底部および天井部がヘラ切り後不調整である杯は非常に少なかった。

このように、須恵器杯Hは底部・天井部に回転ヘラケズリが施される一群と、ヘラ切り後不調整で口径が10cm以下の一群に大別することができる。[佐藤隆2000]に沿うなら前者が難波II期新段階、後者が難波III期古段階に該当する。

c) 建物の時期と変遷

東側建物群の時期は2時期に分かれることを示したが、以下では前半を1期、後半を2期と称する。これを基に、遺構の切合い関係や建物と平行して延びる溝の時期といった断片的・間接的な手掛かりから建物の時期比定を行う。その上で建物群の変遷を検討しようと思う。

①1期

総柱建物3棟(建物1・6・7)、隅柱建物3棟(建物10~12)、竪穴住居1棟(建物9)をこの時期と判断した。建物6・7と建物10・11の関係については、前者の柱穴を切る溝SD709が、後者を囲う溝SD625につながっているため、建物6・7→建物10・11という順序も考えられるが、並存したことも十分考えられる。建物1については先述したように、周辺で検出された溝群でこの時期の遺物が出土しているために1期に含めたが、柱穴が溝を切っており、2期に下る可能性を残す[大阪市文化財協会2001]。

総柱建物はいずれも15m²以下と小型であるが、[植木久1998]の考えに依るならば高床倉庫であったと思われる。建物9は削平を受けているため全体の形状は不明であるが、窓を有していることから簡易な構造の厨房であったのだろうか。もしそうであるなら、建物10・11とはNG89-67次の溝SD625で区分されており、空間的な機能分化を示すものかもしれない。なお、建物1以外は東西方向の溝SD705より南に分布しており、この溝が建物群の北を区画するものであったことが考えられる。

②2期

建物2~5が該当すると思われる。建物5は東面庇を有する総柱建物で、建物4とは近接しすぎているため同時存在しないが、建物3とは共存しうる距離である。また、建物3~5の一組から離れた位置にある建物2は、他の建物と比べて柱穴が小さく、簡易な倉庫であったのかもしれない。

以上より、建物群が多く検出されている平坦地では、1期のものが南半に、2期のものが北半にあることがわかる。これは建物群内でも中心が移動していることを反映しているのであろう。また、2期に庇付き建物が存在し、1期にはないという点については、時期が下るとともに中心的な役割を果たす建物が現れるとも判断できるが、この解決には本調査区東側で建物が存在すると思われる範囲の発掘調査を待たねばならない。

d)周辺調査との比較

本調査区周辺に目を移すと、NG95-14次調査区[大阪市文化財協会2000a]と97-60次調査区(本報告第Ⅲ章第3節)において、本稿の1期に併行するか、それよりやや古い資料が検出されている(表6)。後者の調査区は本調査区とは「馬池谷」を挟んで向い側で、直線距離にして約250mの位置にある。そこでは一連の溝であったと推定される落込みSX701~703が検出され、TK209型式の須恵器杯Hや飛鳥Iでも古相に当る土師器杯Cなどが括で出土している。須恵器杯Hは口径が10.4~12.8cmで大きく、やや古い様相が見られる。

また、一辺0.5m前後の方形の柱穴が2基見つかっており、建物があったことを窺わせるが、旧地形から判断するなら、それほど多くの建物はなかったと推定される。

続いて、東側建物群に後続する時期の建物群は、本調査区から約500m南西に位置する「西側建物群」である[大阪市文化財協会2000c]。ここでの建物群の変遷については[大庭重信2000a]で「第1段階」から「第3b段階」の4段階に区分して整理されている。それを東側建物群と対比しながら要約すると以下のようになる(表6)。

「第1段階」は本稿の2期に当る。建物群は方向を描える程度で、建物配置に計画性は見られない。建物構成では庇付き建物と倉庫があり、東側建物群の構成と類似しているといえよう。「第2段階」では建物がコの字形に並び、庇付建物が庇を広場に向けており、計画的な建物配置が窺える。一方、東側建物群はこの時期にはなくなってしまう。さらに、「第3a段階」では広場であったところに四面庇で大型の南北棟建物が成立し、次の「第3b段階」では、これらの建物群に柵が巡らされるようになる。これらの建物群は建替を繰り返しながら、中核となるような施設が一個所に固定化していたようであり[大庭2000b]、建物構成・出土遺物などからみて、支配者層の居宅もしくは公的な施設といった地域の拠点であった可能性が高いと考えられている。

以上から、本稿の1期に「馬池谷」の東西両岸で建物群が存在し、次の2期では「馬池谷」の西側にある2筋の高まりにそれぞれ分かれて分布していることが窺える。ただし、これは発掘調査で把握できた現象であって、時期を重ね合わせながら西に建物群が移動していくのが実態であると判断される。なお、「馬池谷」の東岸に位置する97-60次調査の出土遺

表6 周辺遺構の時期と建物群の変遷

西側建物群1区	(西) 時期 (西)	東側建物群	その他の遺構
	(難波Ⅱ期) 1		95-14次SE701上層 97-50次SX701-703・98-76 次SD712
西面庇建物1、倉庫3、側柱建物3、 旗、埴	1 (難波Ⅲ古) 2	片面庇建物1、倉庫2、小型の側柱建物 1、旗	
片面庇建物3、倉庫2、側柱建物3、小 型の側柱建物2、旗	2 (難波Ⅳ中)		
西面庇建物1、片面庇建物2、倉庫2、 側柱建物2、旗、埴	3a (難波Ⅴ中)		
西面庇建物1、倉庫1、側柱建物3、 旗、旗	3b (難波Ⅵ新)		

註1)「西側建物群1区」はUR86-11次調査区の1区に加え、[大庭2000a]で検討されたUR91-22、NG87-65・92-46・98-46調査区も含める。

註2)表中の「小型の側柱建物」とは便宜的に設定したもので、面積が15m²以下(調査区外に延びるものは否定)のものを指す。

物は後述する報告で示しているとおり、古墳時代と飛鳥時代の遺物に連続性は見られない。よって、古墳時代の集落が拡がっていた「馬池谷」の東岸に位置するとしても、古墳時代の集団とは別であったと思われる[高橋1999など]。

e)まとめ

近年の成果を含めて東側建物群を検討した結果、2時期に区分され、群内で建物が北に移動していることが明らかになった。また、これに先行する建物群が「馬池谷」を挟んで東側に存在するようで、それが西へ移動して東側建物群が成立した可能性を示した。

立地の変遷からいえば、谷の両岸からより平坦な地形に移っている状況が読み取れる。特に、東側建物群が立地する尾根状の高まりは細長く両側に谷地形が存在するため、建物群の範囲を括げるには限界があるが、西側建物群は傾斜面が非常に緩やかで、平坦面がより広い高まりに立地している。建物群の範囲を拡大するなら、後者の方が立地的に有利であり、その有利な条件を求めて移ったということも可能である。

[高橋2000]で指摘されているように、東側建物群は西側に比べて建物の方位が地形に規制されて統一性がなく、建物配置に計画性がないことから、一般の集落に近い要素を有している。一方、西側建物群は、移動したその次の段階に規格性の高い建物配置が成立している。従来から東西の両建物群は、瓜破台地東縁部の水田開発・經營に係わった公的な施設か支配層の居宅と考えられている。建物群の変遷過程については、拠点の移動は地形的な利点を求めたという単純な要因だけでなく、これらの建物を取り巻く政治的・社会的要因からも検討しなければならない。なお、本稿では「馬池谷」の東西で点在する飛鳥時代の遺構までは検討が及ばなかったが、これらの中には西側建物群でコの字形建物配置が完成した頃に廃絶しているものもある(註1)。今後の調査の進展でこのような例が増加していくなら、西側建物群が拠点化するのと併行して、分散していた小集落が統合されていった可能性も検討しなければならない。これについては今後の課題としている。

註)

- (1) 本調査区から東に約800mの地点に位置するNG82-4・87-35次調査区では、飛鳥I・IIの土師器を伴う土壙・井戸が検出されている[大阪市文化財協会1982・1992]。これらの遺構は水田作土である長原6Bi層基底面で検出されていることから、水田が開かれる直前に集落が廃絶したことがわかる。

第2節 97-29次調査

1)層序とその遺物

i)層序(図63、表7、図版11)

調査区の基本的な層序および長原遺跡標準層序との関係は表7のとおりである。基本的には現代客土の下には長原1~4層の作土層が続き、間には長原4A層相当の水成層が介在する。II区では第4b層の直下が第8層となるが、I区北半では段丘構成層の上面が北へ向かって急激に落込んでおり、この上に長原5~7層の堆積が確認された。

調査区の北東にある97-8次調査区は全体に南西に下る地形であった。このことを考慮するならば、本調査区と97-8次調査区の間に「馬池谷」の支谷状の窪みがあったものと推

表7 97-29次調査の層序

標準層序	層序	層相	層厚 (cm)	遺物	おもな遺物	特徴	掲載遺物
NG0	0	現代客土	~140	↓SB401, SK402			
NG1	1	灰オリーブ色(5Y4/3)含礫繊維シルト質 粘砂	≤10	▼耕作済	陶器器・瓦器・瓦	作土	
NG2	2a	灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質繊維粘砂	≤10		陶器器・瓦器・瓦	作土	
	2b	暗オリーブ色(10Y4/2)含繊維シルト質 粘砂	≤10	▼SD201,耕作済	陶器器・瓦器・瓦	作土	
NG2-3	3a	オリーブ色(7.5G4/1)粘性砂～ 中粘砂	≤20		瓦質土器・瓦器	水成	
	3b	灰オリーブ色(7.5Y5/2)含シルト粘砂シ ルト質繊維粘砂	10~30		瓦質土器・瓦器・ 黑色土器	作土	
NG3	3c	灰オリーブ色(5Y5/2)含繊維粘砂	≤20		瓦質土器・瓦器・ 黑色土器	作土	
	3d	灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト質繊維粘砂	≤20		瓦質土器・瓦器・ 黑色土器	作土	
NG4A	4a	オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粘砂～粗粘砂	≤10		瓦器・須恵器・ 土師器	水成	
NG4B	4b	灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質繊維粘砂	≤15	▼SK401,耕作済	瓦器・須恵器・ 土師器・瓦	作土	
NG5A	5	灰オリーブ色(5Y5/3)含繊維粘砂～ 粗粘砂	≤70		須恵器・土師器・ 黑色土器	水成	211-212
NG6AI	6a	灰オリーブ色(5Y4/2)含粗粘砂・繊維粘砂 質シルト	≤15		須恵器・土師器・ 磚・竹子(分)	作土	213-215
	6b	馬場色(10YR3/2)シルト質繊維粘砂	≤20		須恵器・土師器	作土	
NG7B1	7	オリーブ褐色(5Y4/2)シルト質繊維粘砂	≤15	↑SD701 ↓SD701,SD702-703,SK701	須恵器・土師器		
NG15	8	オリーブ褐色(5Y4/2)繊維粘砂質シルト	≥60				

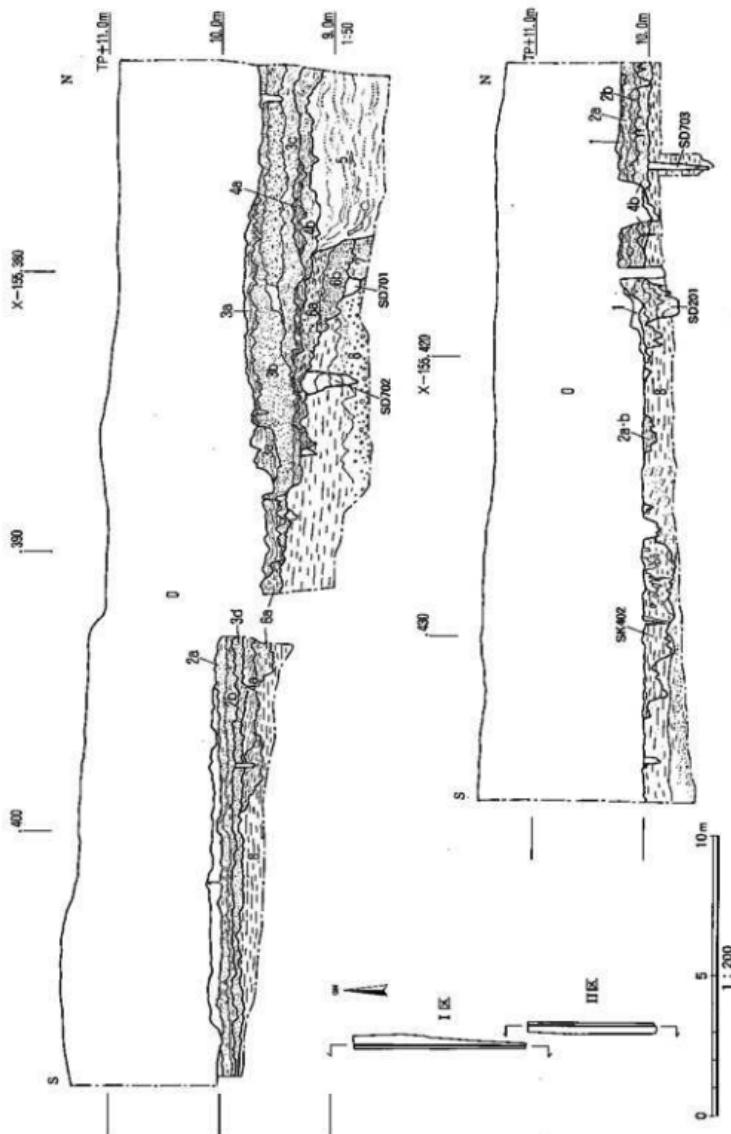


圖63 97-29次調查區西壁斷面圖

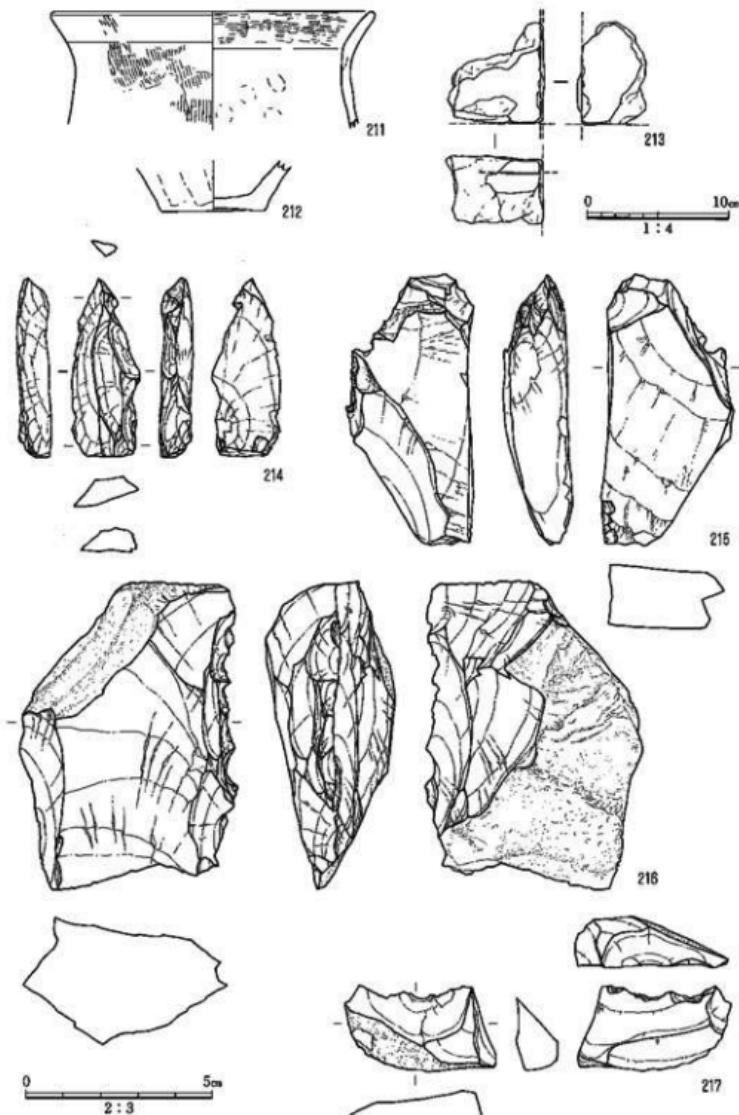


图64 各层出土遗物
第5层(211·212)、第6a层(213)、第6层(214·215)、SK701下部(216)、SD702下部(217)

測することができる(本書第Ⅱ章第1節参照)。

第5層の下には部分的に長原6Ai層・長原7Bi層が確認できた。古墳時代の遺構は長原7Bi層に相当する第7層中および基底面で検出されている。

第8層は段丘構成層である長原15層に相当すると思われる。上部はシルト、下部に3~4cm大の風化の著しい角円礫・円礫を多量に含む。淘汰は極めて悪く堆積後に地震などの搖れがあったものと思われる。

なお、I区北半においては土留めの掘削限界深度を越えたため、第5層以下の遺構の平面的な調査はできなかった。

ii) 各層出土の遺物(図64、図版28)

第5層からは211・212が出土した。211は土師器壺の口縁部で、口径は22.6cmである。色調はにぶい褐色で、外面はタテハケで調整し、口縁部はヨコナデで仕上げている。212は弥生土器の底部で、底径は7.3cmである。灰白色を呈し、4mm大の砂粒・チャート・雲母を含む。213は第6a層から出土した壺である。色調は灰白色で焼成は良好である。

214~217は石器で、すべてサヌカイト製である。214・215は第6層から出土した。216・217は古墳時代の土壙SK701、溝SD702の下位に残された、長原12層に相当する層準から出土した。214は横形剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器で、基部は折れている。215~217は石核である。215は板状の剥片を素材として横長の剥片を剥離したものと思われる。中央で折れたため廃棄されたのであろう。主剥離面側の末端に細部調整が見られ、廃棄後、なんらかの道具として再利用した可能性もある。216は背面側に自然面の残る板状の剥片を素材としており、これから横長の剥片を剥離している。打面部の調整は比較的ていねいである。217は背面に自然面の残る薄い板状の剥片を素材として、横長の剥片が剥離されている。打面部の調整はほとんど行われていない。

2) 遺構とその遺物

本調査区においては、近世の溝、中世の水田および掘立柱建物・土壙、古墳時代の溝・掘立柱建物・土壙が確認された。

i) 平安~江戸時代(図66、図版12)

a) 溝

SD201はⅡ区の第2b層下面で確認された南北方向の溝であり、東に東西方向の溝が取付いている。確認できた個所で幅は2.0m、深さ0.5mである。溝は下部に明瞭な水成層があ

り、第2a・b層によって埋戻されている。現在でもこの溝に重なる形で用水路が存在しており、この溝も付近の水田に伴う用水路であったと思われる。

b)掘立柱建物(図65、図版12)

SB401は調査区南端の現代客土基底面で見つかった掘立柱建物で、3基の柱穴で構成される。図65で示した復元案では、梁行は1間、桁行は2間以上になると思われる。柱掘形は直径約0.4m、柱痕跡は直径0.1mである。柱間寸法は梁間が1.75mで、桁間が1.15mである。埋土中に土師器・須恵器のほか、瓦器の細片が入っていたことから、この時代の遺構と判断した。柱穴の組合せと時期の決定については周辺の調査を待ちたい。

c)土壤

SK401は第4b層下面で検出された方

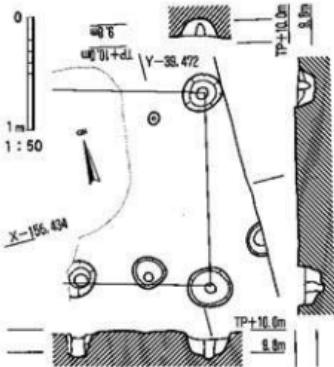


図65 SB401実測図

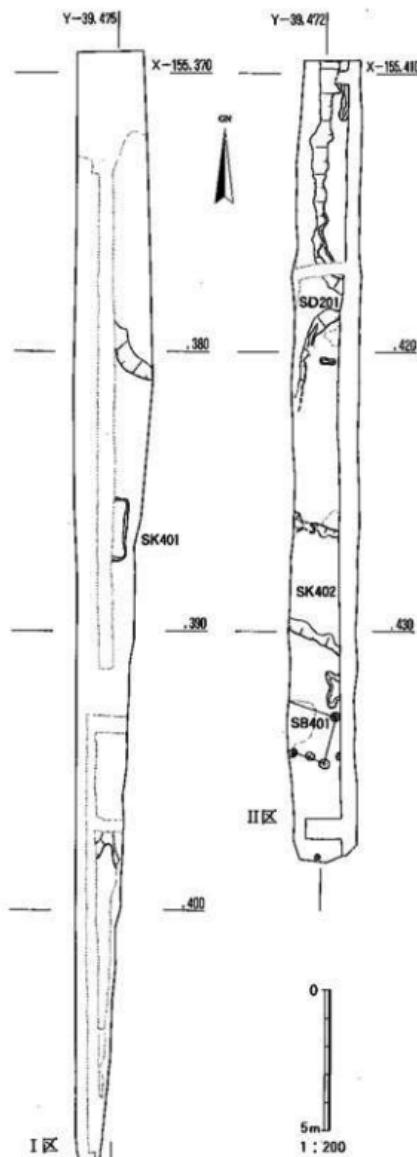


図66 平安～江戸時代の遺構平面図

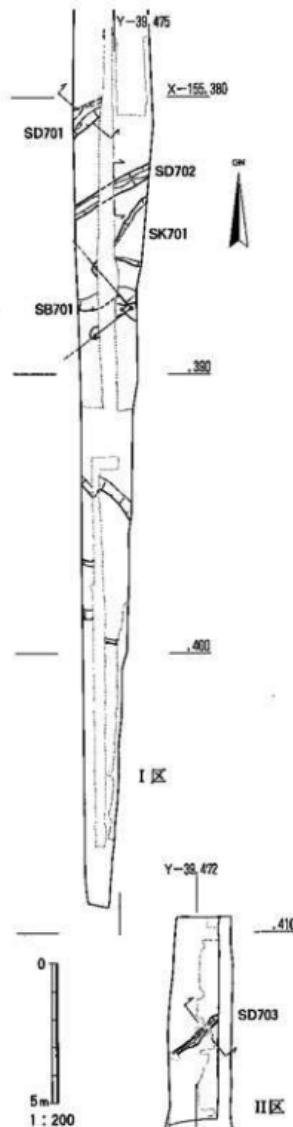


図67 古墳時代の造構平面図

形の浅い土壤で、南北の幅は2.3m、深さは0.15~0.50mある。埋土には埋戻した形跡は見られなかった。本遺構からは瓦器・土師器などが出土したが、性格は明らかにできなかった。

SK402は現代客土基底面で確認された。南北幅4.0mで、東西は調査区外に拡がりをもつ。埋土は段丘構成層の偽礫を主体とする。遺物は極めて少なく、瓦器・土師器の細片を少量含むのみであった。土壤の深さは0.3mで、底は第8層の粘土層を掘り抜きその下の砂層で止まっていることから粘土採掘場と思われる。

ii) 古墳時代(図67、図版11・12)

第7層中で溝を1条、第7層基底面で掘立柱建物1棟、溝2条、土壤1基を検出した。

a) 掘立柱建物

SB701(図68) I区中央の第7層基底面で、掘立柱建物の一部と思われる柱穴を3基確認した。掘形の平面形はいずれも直径0.4m前後の円形で、柱痕跡は直径約0.1mである。このうち、SP702は東肩をSP701に切られており、建替えが行われた可能性がある。

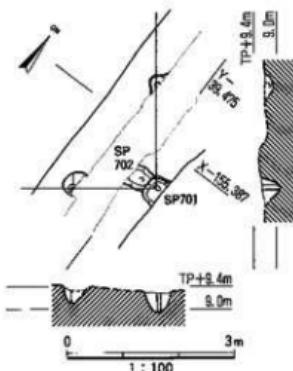


図68 SB701実測図

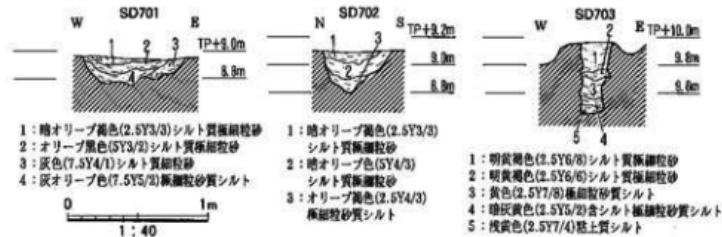


図69 SD701~703断面図

b)講

SD701(図69) 第7層内で検出された。東西方向の溝であるが、調査区東半分では第5層の水流によって削られている。幅0.74m、深さ0.2mで、ラミナの傾きから西から東への水流が確認できた。

遺物としては218の須恵器器台の杯部分が出土したのみである(図70)。口径は28.6cmで、外面には波状文が巡る。焼成は良好である。

SD702(図69) SD701とは平行し、調査区を東西に横切る幅0.5m、深さ0.3mの溝である。下部に水成層が堆積しており、ラミナの傾きから西から東への水流があったと思われる。

遺物としては219・220の土師器高杯の脚部が出土している(図70、図版28)。219は脚部径9.0cm、残高6.6cmで、2方向に円形のスカシ孔があり、外面の調整は脚柱部がタテハケののちヘラミガキで、内面にはシボリメが認められる。220は脚部幅径が9.7cmであり、残高7.9cmである。外面にはナデが施され、内面は断続的な横方向のヘラケズりである。

SD703(図69、図版12) 幅0.25m、深さ0.5mで、肩がほぼ垂直の東西方向に延びる溝で、底に水成の粘土および砂が堆積していた。

最下層である5層からは221の須恵器杯蓋が出土している(図70、図版28)。口径は14.6cm、器高は5.0cmで、天井部と口縁部の境には浅い沈線が1条巡る。MT15型式に属する。

c) 土壤

SK701 I区の中央で検出された土壙で、大半が調査区の外へ拡がる。南北2.4m、東西1.1m以上の方形を呈すると思われ、深さは0.5mである。遺構の性格は不明であるが、須恵器および土師器が出土した(図70、写真9、図版28)。

222～228は須恵器で、222・223は杯蓋、224・225は杯身である。222は口径13.4cm、

器高4.0cmである。天井部の全面にカキメが施される。口縁部はやや外反し、端部の内面には浅い沈線による段が見られる。223の口径は13.4cmであり、口縁部はやや外反している。これらの杯蓋はTK208型式に属するものであろう。224は口径が10.6cm、器高5.0cmである。口縁端部に明瞭な面をもつ。225は口径10.4cm、器高4.7cmである。底部外面の2/3をヘラケズリで調整する。口縁端部は丸くおさめており、ヨコナデによる仕上げはていねいである。226は匙の口頭部である。稜線は明瞭に入り、その下に波状文が巡る。全面に灰オリーブ色の自然釉がかかり、焼成は良好である。227は高杯である。口径は10.7cmで、

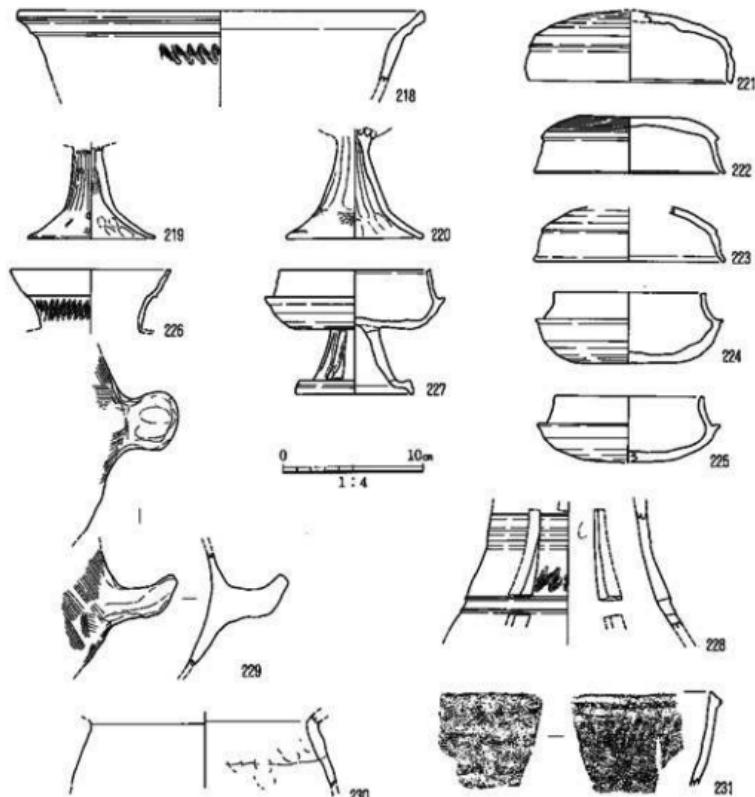


図70 古墳時代の遺構出土土器
SD701(218)、SD702(219・220)、SD703(221)、SK701(222~231)

器高は8.9cmである。脚部には3方向に方形のスカシ孔が設けられる。口縁端部内面の稜はシャープで、杯部外面のヘラケズリはない。228は器台の脚部である。外面には波状文が巡り、全体の調整もていねいである。長方形のスカシ孔が6方向に穿たれたものと思われる。外面は灰色を呈し、自然釉が剥離している。229

は土師器の鍋である。体部外面はハケ、把手はユビオサエで仕上げている。以上、SK701の時期は出土した須恵器の年代から5世紀後葉といえよう。

なお、この遺構からは遊離資料であるが、弥生土器甕230と長原式土器の深鉢231が出土した。230は両面ともナデで仕上げられている。231は口縁端部の突帯上に刻み目を施す。いずれも表面がかなり磨滅している。

3) 小結

今回の調査では、中世から近世にいたる耕作の状況と、古墳時代の集落遺構を確認することができた。調査地一帯は、古墳時代の「西ムラ」に位置するが、今回、南北方向に長い調査区を設定したなかで、このムラが最盛期を迎える5世紀後葉の遺構が検出されたのはI区の北半に限定される。なお、調査区の南で行われた97-60次調査(次節)においては古墳時代の可能性を持つ竪穴住居や韓式系土器が見つかっており、当該期の遺構は散漫ながら調査区の南にも抜がっていたのであろう。

また、調査区の北溝においては長原5層によって埋没する落込みを確認した。すでに述べたように、北東に位置する97-8次調査の結果と併せて考慮するならば、両調査区の間に「馬池谷」に取付く支谷状の崖みがあったことが想定される。

今回の調査で確認された古墳時代の3条の溝は、いずれもこの落込みに直交するように設けられており、落込みと調査区の西側を南北に延びる「馬池谷」に規制された土地利用がなされていたことがわかった。



写真9 SK701土器出土状況

第3節 97-60次調査

1)層序とその遺物

i)層序(図71、表8、図版13)

I～III区では長原4層以下は長原5A・6・7B・12C・15層が堆積しており、IV・V区では長原2層以下に長原3・4・15層の堆積が確認できた。もっとも北に位置するVI区では、近世の土砂採掘場により包含層が擾乱を受けており、遺構を確認することはできなかった。なお、I～III区の西は深い落込みとなっていた。最終的には長原5A層により埋積されるこの落込みは、東南に位置するNG89-63次調査区や、東隣のNG96-56次調査区でも確認されている[大阪市文化財協会1990b・2001]。調査区の層序と長原標準層序との対応は以下のとおりである。

第0層：層厚130cmの現代客土層である。

第1層：現代作土層で、主としてI～III区に分布し、IV・V区には部分的に分布する。

第2層：暗オリーブ色シルト質細粒砂の作土層で、I～V区に分布する。長原2層に比定できる。本層下面で溝群や土砂採掘場が検出されている。

第3a層：暗オリーブ色シルト混り細粒砂からなる作土層であり、I～III区に分布する。なおIV・V区では次の第3b層との区別が困難となる。

第3b層：暗オリーブ色シルト質中粒砂～極粗粒砂の作土層で、I～III区に分布する。

第4a層：暗オリーブ色シルト質細粒砂の作土層で、I～III区に分布しており、IV・V区では以下の第4b・4c層との区別が困難となる。

第4b層：黄褐色含シルト偽礫粗粒砂の作土層で、I～III区に分布する。下部に部分的にラミナが認められる。

第4c層：灰オリーブ色シルト質極細粒砂の作土層で、I～III区に分布する。

以上の第3a～第4c層は長原3層に対比される。

第5層：灰オリーブ色極細粒砂～粗粒砂からなる水成層である。I～V区に分布しており、南にいくにしたがって層厚を増して粗粒化する。長原4A層に比定できる。

第6層：にぶい黄色シルト混り極細粒砂からなる作土層で、I～V区に分布する。上面において畦畔と踏込みが確認された。長原4Bi層に比定できる。

表8 97-60次調査の層序

標準層序	層序	層名	層厚(cm)	おもな造構	おもな遺物	特徴	拘束遺物
NG0	0	現代客土					
NG1	1	現代作土					
NG2	2	緑オリーブ色(7.5Y4/3)シルト質粘粒砂～粗粒砂	≤20	▼SD201～207, 土砂採掘場	陶器器・瓦器・瓦		作土
NG3	3a	緑オリーブ色(7.5Y4/4)シルト混り細粒砂	≤15		粘器・瓦器・須恵器・土器器・瓦	作土	
	3b	緑オリーブ色(7.5Y4/4)シルト質中粒砂～粗粒砂	≤10		瓦器・須恵器・土器器・JL-1954件	作土	254
	4a	緑オリーブ色(7.5Y4/4)シルト質細粒砂	≤10		粘器・瓦器・土器・須恵器・土器器	作土	
	4b	黄褐色(2.5Y5/4)含シルト粘粒粗粒砂	≤15		粘器・瓦器・土器・瓦器・須恵器・土器器	作土	
	4c	灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質粘粒砂	≤15		瓦器・須恵器・土器器・瓦器	作土	
NG4A	5	灰オリーブ色(7.5Y5/2)粗粒砂～粗粒砂	≤30		瓦器・J234件	水成	232-233
NG4Bi	6	にぶい青色(2.5Y6/0)シルト混り粗粒砂	≤30	▲SR401～403, SX401～402	白器・瓦器・須恵器・土器器・J234件	作土	234-236
NG4Bii	7	黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂	≤15		瓦器・須恵器・土器器・J234件	水成	
NG4Biii	8	にぶい黄褐色(10Y6/2)シルト質粗粒砂	≤15	▲SR404～406 ▼耕作溝	白器・瓦器・須恵器・土器器・J234件	作土	239-243, 259
	9	灰色(5Y5/1)極粗粒砂質シルト	≤5	1.SB701, SK701～703, SB701, SK701～702	瓦器・須恵器・土器器・灰生土器	作土	
NG5A	10	灰色(10Y5/1)極粗粒砂～粗粒砂	≤30		須恵器・土器器	水成	
NG6A	11	灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土質シルト	10-20	▲SR601, SD601, 踏込み	須恵器・鉄器	水成多處に 食む。一部は が埋められる	246-249-266
	12	緑オリーブ灰(2.5G4/4)シルト質粗粒 粗粒砂	≤20		須恵器・土器器・漆		250
NG6Bii	13	灰色(10Y4/2)粗粒砂質シルト	≤10		須恵器・土器器	作土?	256
NG7B	14	オリーブ黒色(5Y3/2)含粗粒砂シルト質 粗粒砂	≤30	▼SX704, SK703	須恵器・輪式土器	244-245, 247-248-251	
NG12C	15	灰色(10Y5/1)シルト質粗粒砂	≤30		石器遺物	738m火山坂 越前約8'32	327-336
NG5層以下	16	オリーブ灰色(5G5/1)上部シルト, 下部 粗粒砂	≥70				

第7層：黄灰色中粒砂からなる水成層である。IV～V区に部分的に分布し、西側で層厚を増す。長原4Bii層に比定できる。

第8層：にぶい黄褐色シルト質粗粒砂の作土層である。III～V区に分布する。本層の上面では畦畔と踏込みが、また下面では南北方向の耕作溝が確認された。長原4Biii層に比定できる。

第9層：灰色極粗粒砂質シルト層で、IV・V区に部分的に分布しており、北西でやや層

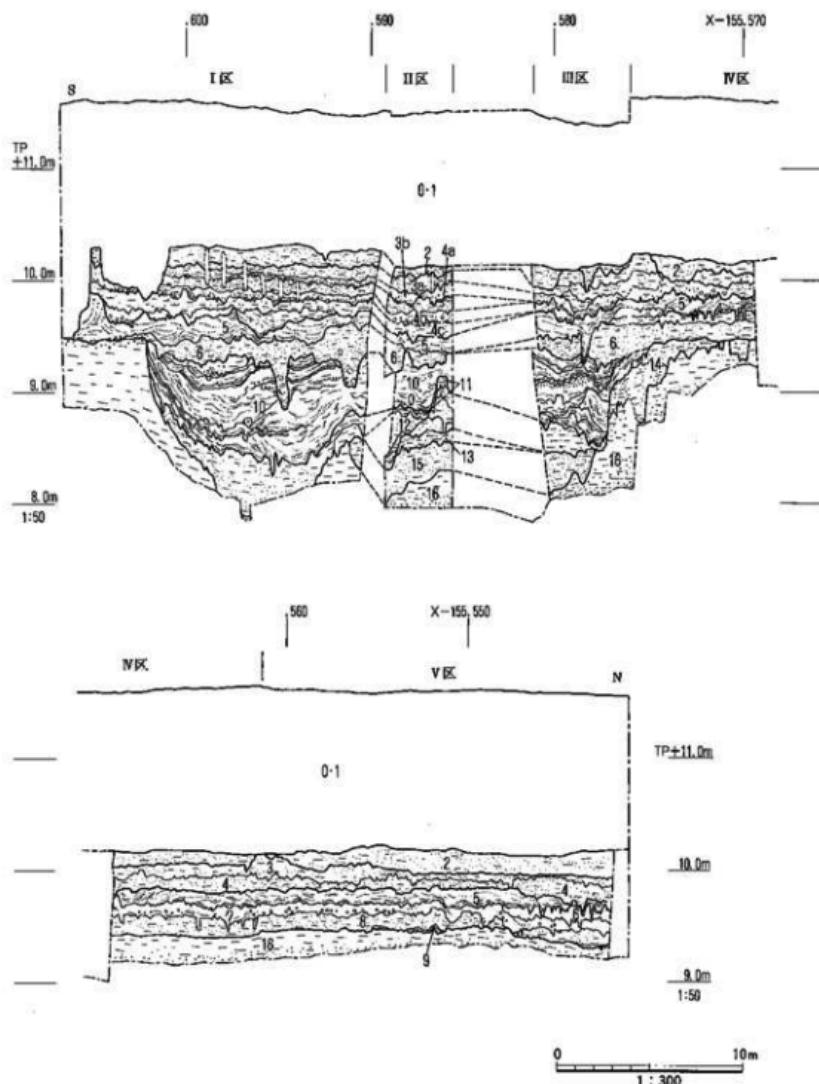


图71 97-60次调查区西壁断面图(I~V区)

厚を増している。本層は作土層であり、長原4Biii層に比定される。

第10層：灰色極細粒砂～極粗粒砂の水成層である。I～IV区南端に分布しており、長原5A層に相当する。

第11層：灰オリーブ色粘土質シルト層で、木片が多量に含まれる。上を第10層の砂礫によって覆われる。長原6A層に相当する。本層の上面で溝や畦畔と踏込みが確認されている。

第12層：暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂層で、I～III区に部分的に分布しており、一部で中粒砂のラミナが観察された。

第13層：灰色極細粒砂質シルト層であり、II・III区の東部に分布する。出土した遺物はごく少量であるが、長原6B層に相当すると思われる。

第14層：オリーブ黒色含粗粒砂シルト質細粒砂層で、III～IV区に分布しており、北東から南西へと下がる落込み内に埋積している。長原7B層に相当する。

第15層：灰色シルト質細粒砂層であり、下部は粗粒化する。I～III区に分布する。本層においてアカホヤ火山灰起源の火山ガラスが確認されており、長原12C層に相当すると思われる。本層より石鐵・ナイフ形石器・翼状剥片が出土した。

第16層：オリーブ灰色シルト層であり、下部は漸移的に粗粒化し細緻になる。長原15層に比定される段丘構成層である。

ii) 各層出土の遺物(図72・73、図版29・35)

232・233は第5層から出土した。土師器皿232は口径8.2cm、器高1.2cmで、口縁部は外反したのち端部が内湾している。233は瓦器椀で口径13.4cm、器高3.6cmである。高台は断面三角形である。口縁部外面はヨコナデ、底部の外面にはユビオサエが施される。いずれも13世紀中葉のものであろう。

234～238は第6層から出土した。234・235は口径7.6～8.0cm、器高1.3cmの土師器皿である。236は須恵器の無蓋高杯である。杯部には稜が1条巡り、その下に波状文を施す。脚部は欠損しているが、杯底部外面にあるヘラによるキザミの痕から判断すると、4方向にスカシ孔があったものと思われる。外面は灰色で、内面には自然釉が付着する。焼成は良好で、胎土も緻密である。TK208型式に属すると思われる。237・238は瓦器椀である。237は口径12.8cmで内面にヘラミガキが施される。238は口径15.0cmである。いずれも焼成はよくない。これらの瓦器は13世紀前半のものであろう。

239～243は第8層出土の瓦器である。239・241は椀の高台である。240は皿で、口径8.2cm、器高は1.3cmである。242・243は椀である。これらは12世紀後半であろう。

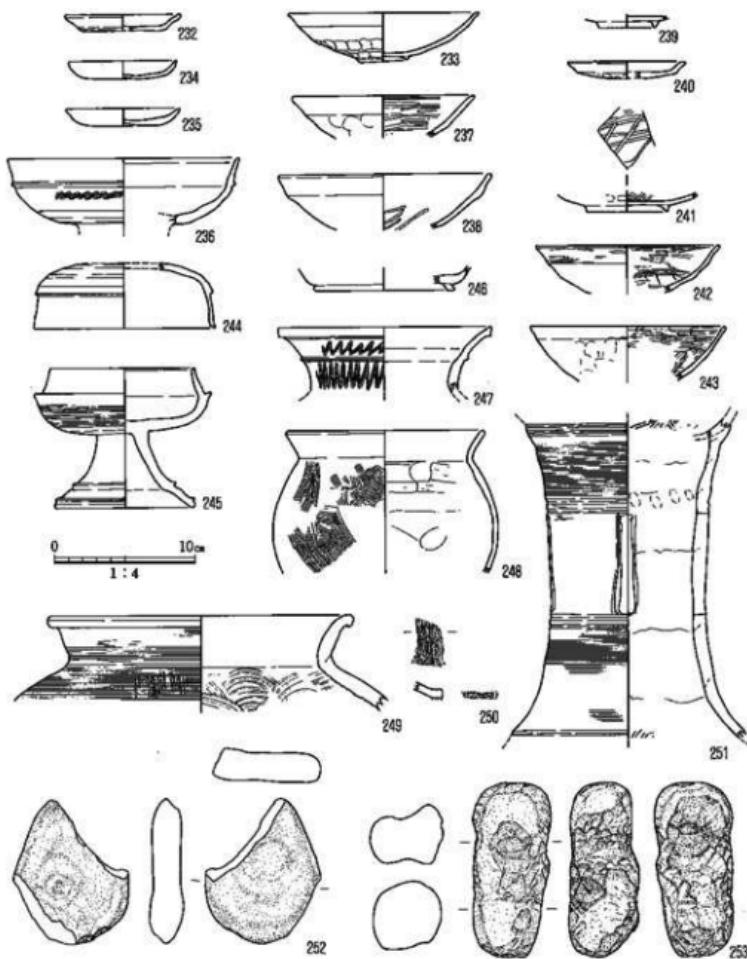


图72 各层出土遗物

第5层(232·233)、第6层(234~238)、第8层(239~243)、第10层(253)、第11层(246·249·252)、第12层(250)、第14层(244·245·247·248·251)

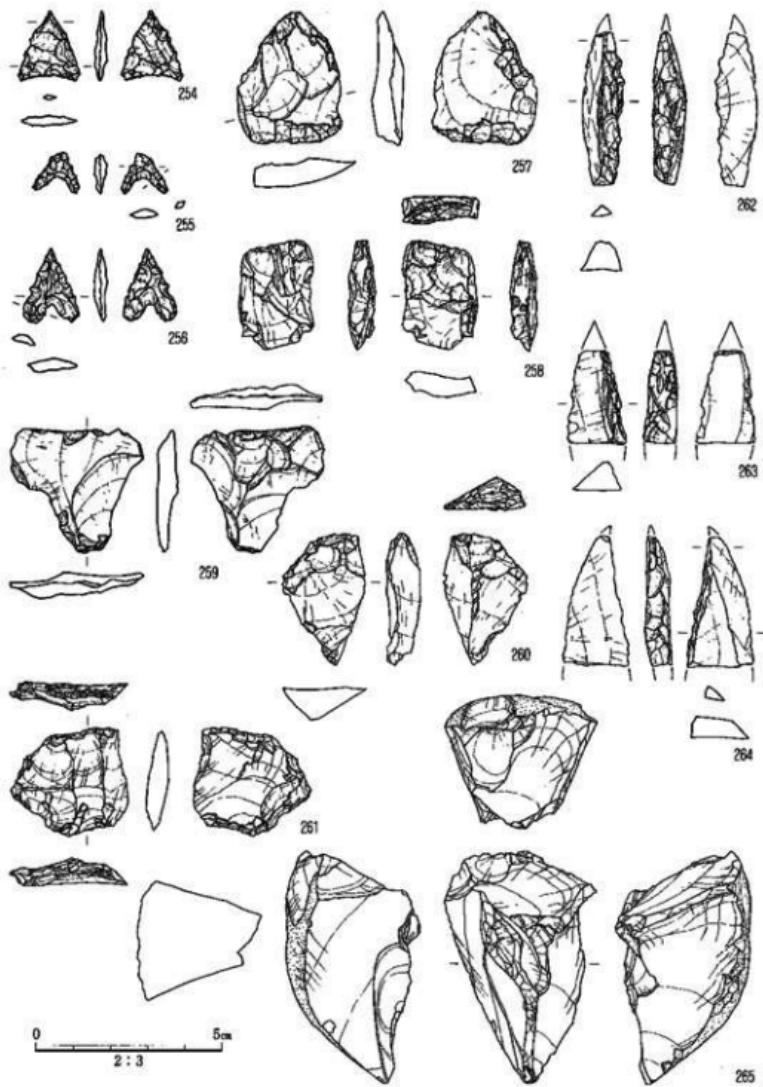


图73 各层出土石器遗物

第3层(254)、第5层(262·265)、第6层(260)、第8层(258·259·263·264)、第9层(255·257·261)、
第13层(256)

246・249は第11層出土の遺物である。246は須恵器杯Bで、高台径は9.8cmである。249は須恵器壺の口縁部である。体部外面にはカキメを施し、口縁部には粘土紐の接合痕跡が認められる。246は奈良時代、249は飛鳥～奈良時代に属するものであろう。

250は第12層から出土した須恵器の破片である。竹管文が2方向に施されているため、新羅系土器ということを想定して図化したが、縁が直線的であることから、NG85-16次調査で出土している皮袋形瓶のような器形になる可能性もある[大阪市文化財協会1993]。

244・245・247・248・251はIV区の南端にある溝状の窪み内に堆積する第14層から出土した。244は口径12.8cm、残存高4.6cmの須恵器杯蓋である。245は須恵器高杯である。口径10.3cm、器高は10.0cmで、底部にはカキメが施される。脚部にスカシ孔はなく、ナデによりていねいに仕上げられている。色調は灰色で、焼成は良好である。247は須恵器壺である。口径は15.2cmであり、口縁部外面の文様帶は稜によって2段に分けられ、波状文が巡らされる。色調は灰白色で、焼成は極めて良好である。251は須恵器器台の脚部で、方形のスカシ孔が4方向に穿たれる。外面には2条で1単位となる浅い沈線が4条施され、その間にはカキメが施される。色調は灰色で、焼成は良好である。248は土師器壺である。口径は14.0cmで、体部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整されている。

252～265は石器遺物で、すべて遊離資料である。252は砂岩製の磨石である。下端に敲打の痕跡がある。253は砂岩製の敲石で、周囲には著しい敲打痕が見られる。254～265はサヌカイト製である。254～256は凹基無茎式石鏃である。254はA-1類、255・256はA-2類に属する。257は石鏃未製品である。薄い剥片の周辺に押圧剥離による細部調整が施されるが、素材となる剥片の打面となる自然面を取り去ることができずに剥離が終了している。258～261はクサビである。258・259・261は板状の剥片が素材で、258・261は四周に使用のために生じた細かい剥離面が並ぶ。260は先端の細い剥片が素材で、図の上下方向に使用されている。側面は裁断面である。262～264はナイフ形石器で、すべて一側縁加工である。対向調整は認められない。262は先端が折れて失われており、263・264は先端と基部が欠損している。265は石核である。末端に自然面を取り込むようにして剥離された、分厚い板状の剥片を素材とする。数枚の剥片が剥離される。

2) 遺構とその遺物

i) 江戸時代(図74、図版13)

III～V区では第2層下面で幅約0.5m、深さ約0.3mの溝SD201～206が約1.5mの間隔を

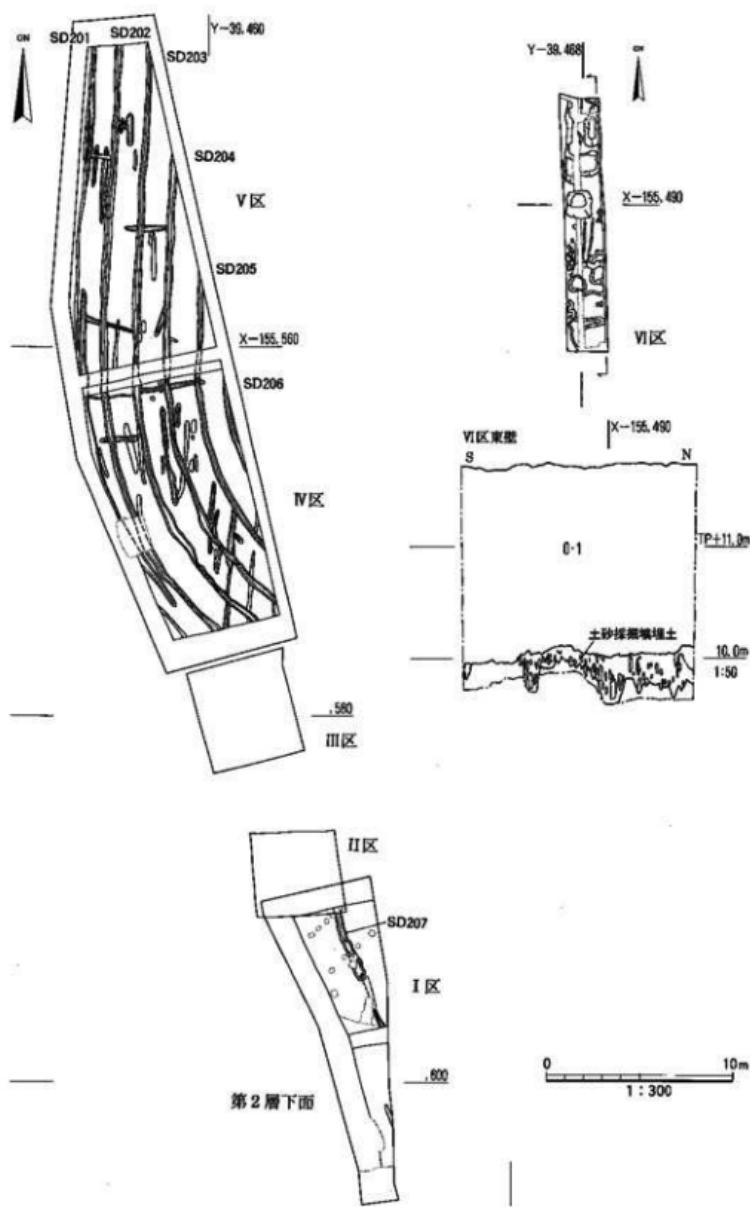


図74 江戸時代の造構平面図およびVI区東壁断面図

おいて平行に延びていることが確認された。これらは溝の大きさなどから畠間と考えられる。溝からは肥前系陶磁器が出土しており、掘削された時期は江戸時代であると思われる。これらの溝は調査区の西側にある現在の道路とはほぼ平行することから、当地における地割がこの頃にはほぼできあがっていたものと考えることができる。

また、IV・V区ではこれら一群の溝に切られる東西・南北方向の浅い溝が並行して延びていることが確認された。これらはいずれも耕作溝と思われる。溝の方位はSD201～206とは異なり、より正方位に近くなる。これらの方位は第6層および第8層の上面で検出された中世の畦畔にはほぼ一致するものであり、土地の区画が中世から近世にかけて変わったと推定される。

なお、これとは別にI区で南北方向の動溝SD207が確認された。この溝の方位はⅢ～V区で確認されたどの溝とも一致しない。

さらに、VI区では多くの土壤が確認された。埋土には段丘構成層の偽礫が多く含まれており、本調査区の周辺で数多く確認されている土砂採掘場と思われる(図74)。

ii) 平安～鎌倉時代

a) 第6層上面検出遺構(図75、図版14)

Ⅲ区北半からV区では第5層の砂に覆われて水田面が良好に残されており、畦畔と土壤状の遺構が検出された。

SR401はIV区からV区にかけて検出された正南北に延びる畦畔で、V区では水口が認められた。基底部の幅は0.6～0.8mで、高さは0.1～0.2mであった。この南では畦畔の痕跡と考えられる東西方向の段SX402が確認できた。さらに、その南には南北方向の畦畔SR402

と、これにつながる東西方向の畦畔SR403が検出された。これらの幅は基底部で0.4～0.6mであった。SR401で区切られる東・西の水田とSX402を境とする南・北の水田には高低差が認められ、西・南側の水田面はそれぞれ約0.1m低くなっていた。また、Ⅲ区では第5層段階の水流によってSR403が大きく抉られていた(写真10)。な



写真10 水流により抉られたSR403

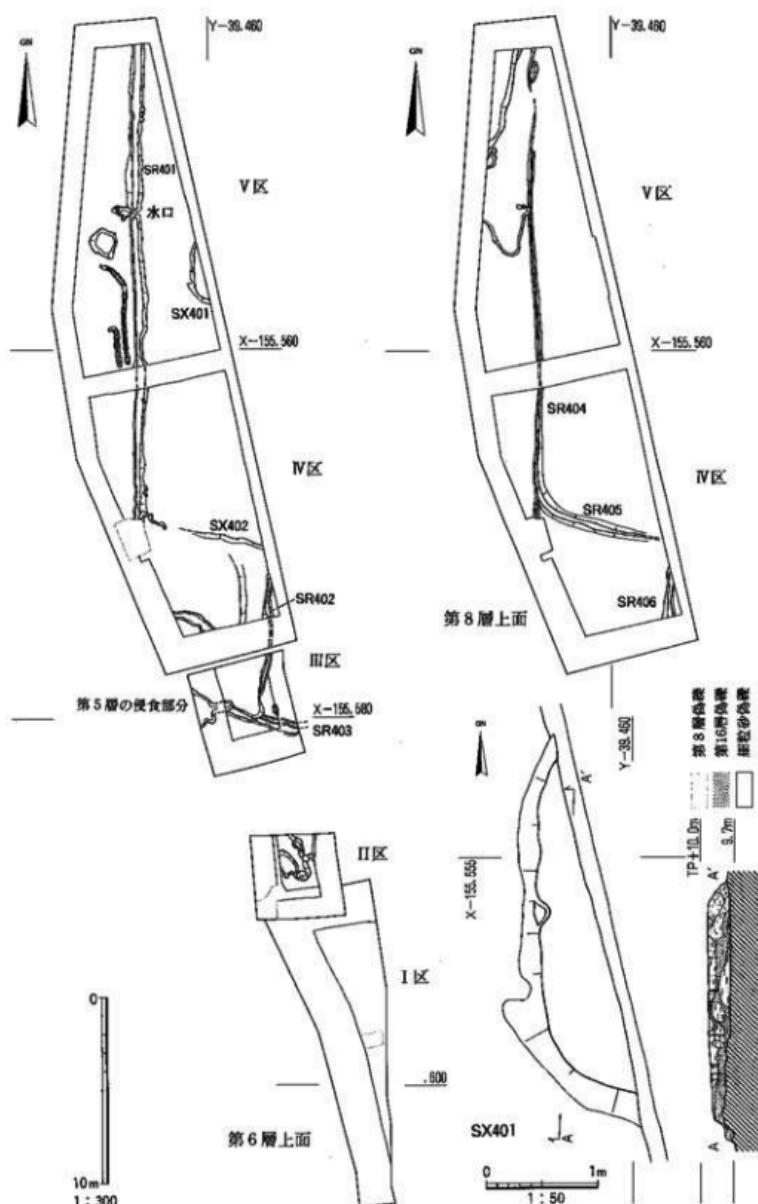


図75 平安～鎌倉時代の遺構実測図

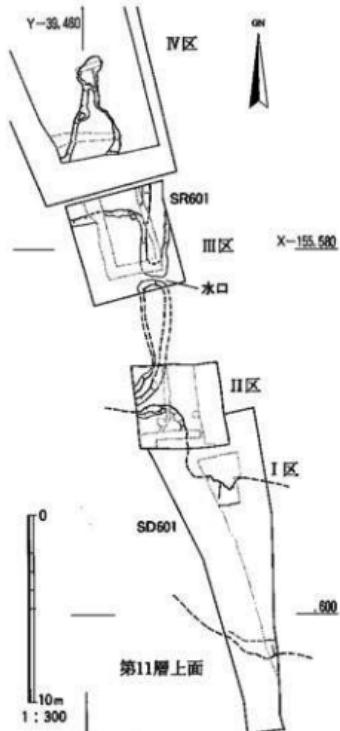


図76 奈良時代の遺構平面図

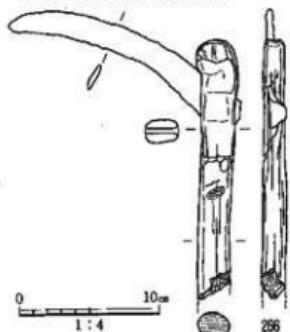


図77 SD601出土の鉄鐸

お、IV区からV区にかけては作土層の淘汰が不良で、耕作期間が短かった可能性がある。

SX401はV区で確認された東西1.0m以上、南北3.6m以上、高さ0.2mを測り、方形を呈する土壇状の遺構である(図75)。第8層および第16層を盛り上げて構築されており、上面には鉄分が多く沈着し、硬くしまっている。遺構の大部分が調査区外の東側に拡がると思われるが、西辺と南辺がSR401およびSX402と平行する。用途は不明である。

b) 第8層上面検出遺構(図75)

I～III区では水田面は認められなかったが、IV区・V区においては第7層の水成層で上面を直接覆われたために、水田面が良好な状況で残っていた。ここでは、第6層上面とほぼ同じ位置で、畦畔SR404～406が確認された。これらの畦畔は上位水田よりもやや幅が狭く、基底部での幅は約0.3mであった。

iii) 奈良時代(図76、図版15)

III区の南端から南西にかけて、段丘構成層である第16層が一段低く落込んでいた。この部分に長原5A層に相当する第10層の砂礫層が厚く堆積しており、第11層上面で水田面と溝が検出された。

なお、本調査区の東側に位置するNG96-56次調査区の西端では、西側に急激に下がる落込みがあり、その底で水田作土が確認された[大阪市文化財協会2001]。この面は今回検出された水田と同一面になると思われる。なお、水田は長原5A層によって廃絶し、落込みが平坦化されていたが、同様の状況が今回の調査でも確認することが

できた。

SR601はⅡ～Ⅲ区で検出された幅1.5m、高さ0.5mの正南北方向の大畦畔である。Ⅲ区では水口が確認された。この畦畔は第14層と第16層を盛り上げて築かれており、これを境にして西側の水田面は一段低くなる。

SD601はⅠ区からⅡ区にかけて検出された幅9.0m、深さ1.6mの南東から北西へと延びる溝である。埋土は木片を多量に含む粘土と細粒砂の互層からなり、滲水と流水を交互に繰り返しながら埋没し、最終的には第10層の砂により魔絶したと考えられる。この溝の続きは調査区の東ではまだ確認されていない。

SD601からは鉄鎌266が出土した(図77、図版29)。柄に刃が装着されたままの状態である。柄は木製で、にぎりの部分は失われている。柄の先端は丸く、刃部の先端に向って緩く湾曲している。刃の装着部での柄の断面は隅丸方形を呈しており、この部分で厚さ1.8cm、幅2.5cmである。柄の下方での断面形は梢円形で、厚さは1.9cmである。刃は湾曲して、基部は折り曲げられているが、分厚いため、

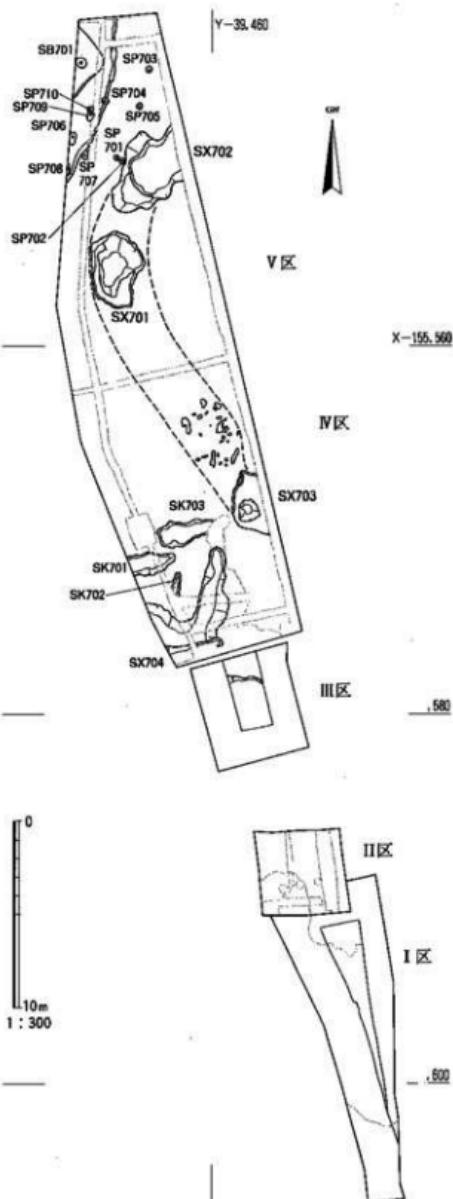


図78 弥生～飛鳥時代の遺構平面図

着柄後に曲げるのは困難と思われる。このためあらかじめ折り曲げていた刃を柄の背後から枘孔に通して装着したと推定される。奈良時代でこのような鉄鎌としては平城京6AB0区のSE272Bで出土した9世紀前葉の例などがある[岡田茂弘1966・奈良国立文化財研究所1985]。今回の例も木柄と鉄刃部の装着の状況が明らかとなれば資料である。

iv) 古墳～飛鳥時代(図78、図版16)

IV～V区の第9層基底面で、竪穴住居1棟、落込み4基、土壙2基および多くの柱穴が検出された。

a) 竪穴住居(図79)

SB701はV区の北西端で確認した短辺が2.4m以上、長辺2.6m以上の方形の落込みで、柱穴が確認できたことから、竪穴住居であると考えた。建物は西側に拡がっており、全容は不明である。かなり削平を受けているため、深さはわずか0.03mしか残っていないかった。また、周壁溝も確認されなかった。柱穴は1基検出され、直径0.5m、深さ0.2m、柱痕跡の直径は0.15mである。なお、遺物は出土せず、周囲の遺構との切合いもないことから、時期は特定できなかった。

b) 柱穴

SP706・708は南北0.6m、東西0.4mの柱穴で、掘形の平面は方形である。柱痕跡は0.10～0.15mである。同一建物の柱穴と思われる柱列は調査区の西側へ延びている。

SP701～705・707・709・710は直径0.3m前後で、柱痕跡は直径0.10～0.15mである。調査区内では建物として復元されるものはなかった。

これらの埋土は後述するSX701・702の上層と似ているため、ほぼ同時期のものと考えられる。ただし、円形の柱穴を方形の柱穴が切っていることから、建物の年代には差があったようである。

c) 土壙

SK701はIV区の南西で検出された東西長2.4m以上、南北長1.2m、深さ0.15m

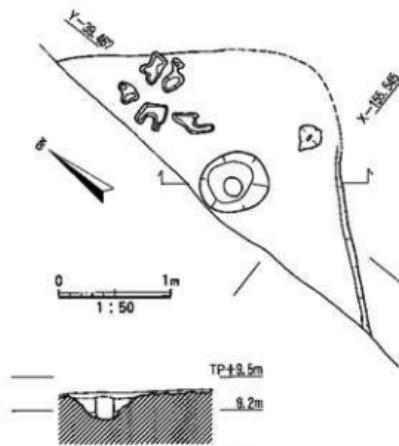


図79 SB701実測図

の土壤である。遺物としては土師器瓶あるいは鏡の把手が出土したのみである。

SK702はSK701の南東で確認された南北長1.2m、東西長0.5m、深さ0.15mの土壤である。遺物は土師器の細片が出土したのみである。

これらの土壤は埋土の特徴から飛鳥時代の遺構と考えられる。

d) 落込み(図80~87)

IV区からV区にかけて埋土や

形状の共通した落込みSX701~
703が検出され、IV区の南部で
は溝状の落込みSX704が見つ
かった。

SX701は南北長4.0m、東西
長3.0m、深さ0.2mの不整円形
を呈する土壤状の遺構で、埋土
は大きく上下の2層に分けるこ
とができる(図80)。下層である
2層は水成の粘土層で、下面に
踏込みが認められる。上層であ
る1層は、段丘構成層の偽礫を
含む埋戻し土である。この遺構
からは、遺物がまとめて出土
している(図81~83、図版16・
30~33)。

1層からは267~274の須恵
器が出土した。267は杯蓋、
268~270は杯身で、270は底
部にヘラ記号を有する。271は
高杯の杯部で、272は高杯の脚
部である。これらはいずれ
もTK209型式に属するもので
ある。273は鉢である。口

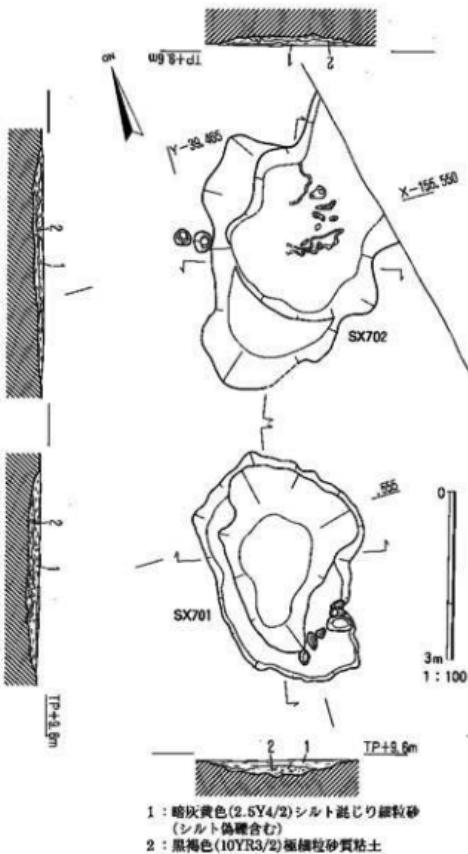


図80 SX701・702実測図

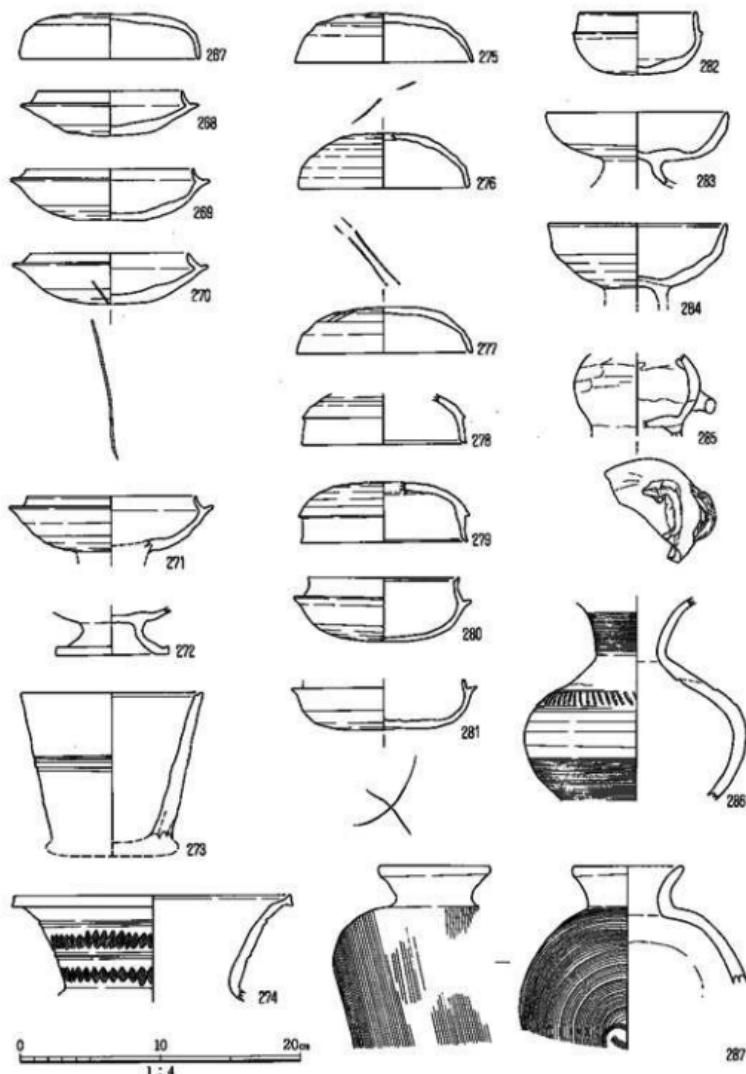


图81 SX701出土遺物(1)

径12.8cmで底部を欠き、残存高10.5cmである。体部の中位に2条の沈線が巡る。全面に灰オリーブ色の自然釉がかかる。274は壺である。口縁部の文様帶は2条の稜で3段に区画され、中・下段には波状文が巡る。色調は灰色で焼成は非常によい。5世紀後半に属するものであろう。

土師器では292・295・298がある。292・295は杯である。292の口径は10.8cmで、口縁部はヨコナデで調整され、底部外面はユビオサエが施される。色調はにぶい橙色である。

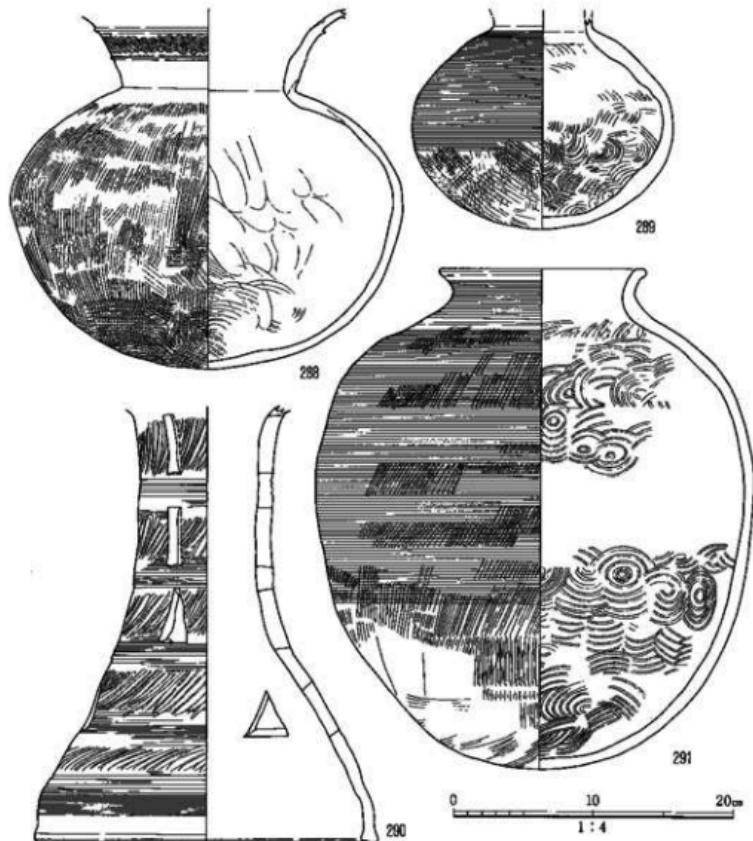


図82 SX701出土遺物(2)

295は口径15.7cm、器高6.3cmであり、口縁部はヨコナデ、体部外面はユビオサエで整えられ、のちに軽くナデが施される。298は高杯の脚部である。脚端部の径は10.7cmである。外面は磨滅して調整は不明であるが、内面はユビオサエが施される。色調は橙色である。これらの土師器はいずれも飛鳥Ⅰに属するものであろう。

2層から出土した遺物は、須恵器275~291、土師器293・294・296・297・299、土錐300、鉄鎌301、滑石製品302~305である。

275~279は杯蓋である。275~277は口径12.0~12.6cm、器高3.3~3.9cmの杯蓋で、276・277の天井部にはヘラ記号が刻まれる。278・279はいずれも口径が11.8cmである。280は口径10.7cm、器高4.6cmの杯身で焼成はよい。281も杯身で口縁を欠損する。底部に「×」字状のヘラ記号が認められる。282は椀である。口径は8.2cm、器高4.4cmで、底部は不調整であり、全体に作りの粗さが目立つ。283は無蓋高杯の杯部で、短い脚を持つものであろう。

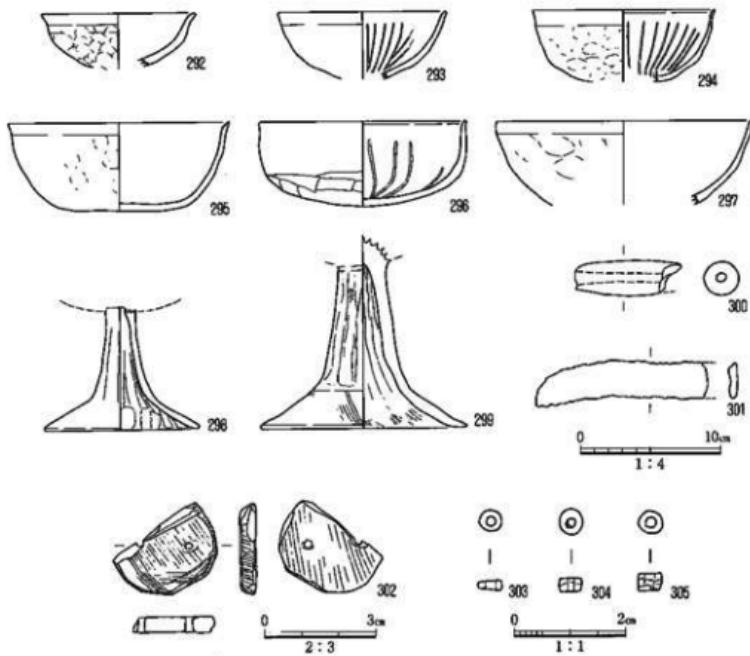


図83 SX701出土遺物(3)

口径は12.8cmあり、色調は灰色で胎土には2mm大の礫を含み、焼成は悪い。284も283と同様の高杯の杯部である。口径12.6cmで、焼成は悪い。これらの須恵器のうち、杯蓋278・279、杯身280・281はTK23型式、杯蓋275～277、高杯283・284はTK209型式に属するものであろう。

285は子持ち壺の子に当る部分と思われる。図の下方は本体の壺に接合するために、粘土絆を貼付けている。体部の外面にはカキメが施され、環状の把手を有することから、提瓶を模した可能性がある。286は台付壺と思われるが、高台と口縁部を欠く。頸部と底部にカキメ、肩部に横描列点文が施される。287は提瓶である。口径は7.8cmで、体部にはカキメが施される。288・289は壺である。288は口縁端部が欠損している。口縁部には2条の稜が巡り、その間に波状文が施される。体部外面は平行タタキで成形されたのち、横方向に軽くナデが施されている。残存高は25.7cm、体部の最大径は28.0cmである。TK23型式に属するものであろう。289はやはり口縁部を欠損している。体部外面の下半部には擬格子タタキ、上半部にはカキメが施される。焼成は良好である。290は器台の脚部である。脚据径は24.4cm、残存高は31.2cmである。外面の文様は沈線により5段に区画され、その中はカキメのうちヘラによる斜め方向の刻みが連続的に施される。スカシ孔の形状は上部2段が方形で、その下の2段は三角形であり、それぞれ3方向に開けられている。291は壺である。口径は14.4cm、器高は36.0cmである。外面はタタキが施されたのちにカキメで仕上げられている。

293・294・296・297は杯である。293・294は内面に放射状暗文が施される。296は口縁部が焼け歪み、内面には間隔の広い放射状暗文が施される。294は器壁が薄く外面をユビオサエで調整する。299は高杯の脚部である。以上の土師器は飛鳥Iに属する。

300は土師質の管状土錐である。直径は2.5cmで孔径は0.8cmである。

302は滑石製の有孔円板である。長径2.9cm、短径2.7cmに復元でき、厚さは0.4cmである。2つの孔はともに片面穿孔で、それぞれ異なる面から穿たれる。表面は斜め方向に研磨されており、側面の仕上げは粗雑である。303～305は滑石製の白玉である。色調はすべて緑灰色を呈し、直径は0.35～0.42cmで厚さは0.16～0.3cmとややばらつきが見られる。側面に稜は認められない。

301は鉄製の鎌の刃先である。基部を欠き、遺存状態はあまりよくない。

以上、SX701の出土遺物をみると、須恵器の一部はTK23型式であるが、その他の須恵器・土師器は飛鳥Iにおさまる。

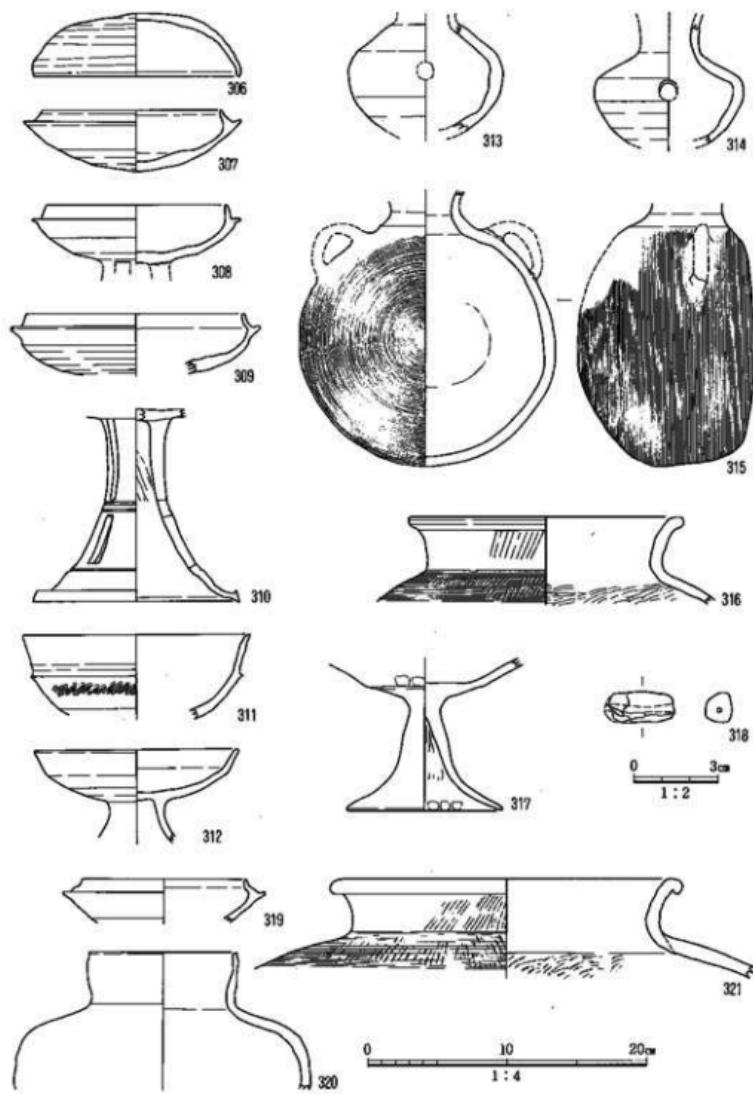


图84 SX702·703出土遗物
SX702(306~318)、SX703(319~321)

SX702は東西3.0m、深さ0.2mの不定形な土壇で、北東方向は調査区外へと延びている(図80)。埋土はSX701と同様に上下2層に分かれ、下層である2層は水成の粘土層である。

SX702からは306~316の須恵器、317の土師器、318の管状土錐が出土した(図84、図版30・33)。306は杯蓋である。天井部と口縁部の境となる稜は見られず、天井部のヘラケズリは粗い。口径は14.6cm、器高は4.5cmである。307は杯身である。口径12.7cm、器高4.4cmで灰白色を呈し、焼成はあまり。308~310は有蓋高杯である。308の脚部には3方向のスカシ孔が設けられる。309はスカシ孔を穿った際に生じたヘラの痕が底部に残っていたため、高杯と判断した。310は長脚で、2段の長方形のスカシ孔を持つ。311・312は無蓋高杯で、311の杯部外面には1条の稜が巡り、その下に波状文が施される。312は短い脚を持つと思われる。口径は14.4cmであり、色調は灰白色で焼成は良好である。口縁部は外反し、ナデで調整される。313・314は疊である。313は体部中ほど、314は体部上半に最大径がある。315は提瓶である。本来は環状の把手が付いていたと思われる。体部全体はカキメで調整される。色調は赤灰色で、焼成は良好である。316は甕の口縁部である。体部外面はタタキののちカキメが施される。317は土師器高杯で、口縁部を欠く。杯部の下半には段を有し、外面は剥離が著しい。脚部内面にはシボリメが観察できる。色調は明赤褐色である。318は土師質の管状土錐で、残存長2.3cm、最大径1.05cm、孔径0.15cmである。

SX702からの出土遺物は須恵器型式でTK10~TK209型式に属する。このうち最も新しいものはTK209型式すなわち飛鳥Iに属し、SX701出土遺物と同時期となる。

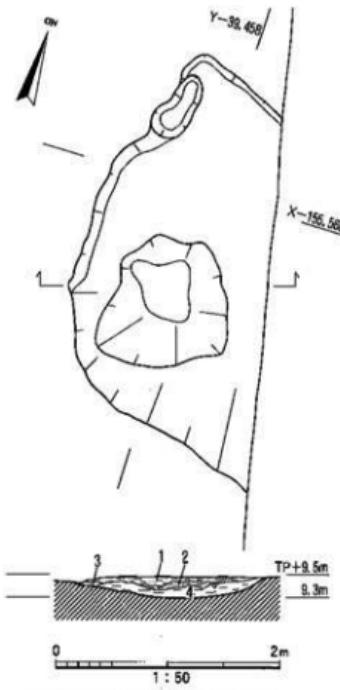


図85 SX703実測図

SX703はIV区の東に位置する不定形の遺構である。東西長1.8m、南北長3.9m、深さは0.2mである(図85)。SX701・702と同様に、埋土は上下の2層に分けることができ、下層である4層は水成の粘土層で、最上層の1層は人為的な埋戻し土である。

SX703で出土した遺物は須恵器319~321である(図84)。319は杯身である。色調は灰白色で焼成は悪い。TK209型式に属するものであろう。320は短頸壺である。灰白色を呈し、焼成はよくない。口径は10.6cmである。321は口径23.2cmの壺である。体部外面はカキメで調整される。

これらのSX701~703は出土遺物の時期がほぼ同じで、また埋土の状況も類似することから元来は同一の溝であったと思われる。隣接するSX701とSX702は言うまでもないが、少し離れたSX703との間にも同様の埋土をもつ踏込みが続いていることがその可能性をより高いものとする。この想定が正しいならば、この遺

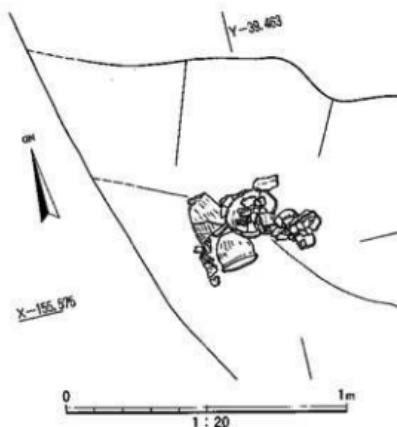


図86 SX704韓式系土器出土状況

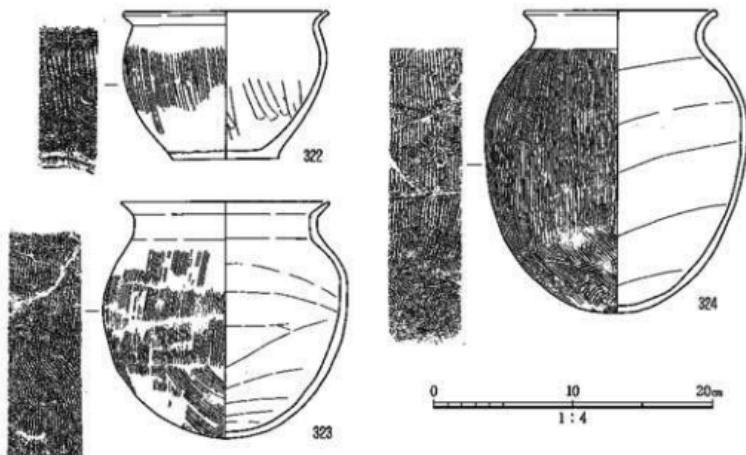


図87 SX704出土韓式系土器

構は幅3mの滯水状態にあった溝で、人為的に埋戻されて廃絶したものと考えることができる。付近には、同時期の遺構はないことから、「馬池谷」を挟んだ西側に亘る飛鳥時代の掘立柱建物群との関連を考慮しなければならないであろう。

次に述べるSX704は、IV区の南端で検出された溝状の落込みである(図86、図版16)。中には水成のシルト層が堆積しており、人為的に掘削された形跡はない。西へ向って急激に落ち込んでおり、「馬池谷」に関連する支谷の一部の可能性が考えられる。これに関連して、調査区の東に位置するNG96-56次調査区の西端では、同様に西へ下がる南北方向の落込みが見つかっている[大阪市文化財協会2001]。また、南へ約100mの地点に位置するNG89-63次調査区では、南東から北西へ向う落込みがあり、その中で自然の窪みが検出された[大阪市文化財協会1990b]。これらの落込みは最終的に長原5層で埋積されている。SX704もこれらと関連があると思われる。

この遺構から完形の韓式系土器322~324が出土した(図87、図版34)。なお、土器が出土した周囲の土を持ち帰り、微細遺物の捕集に努めたが、滑石製品などは検出されなかった。

322は小型の平底鉢である。口径は14.8cm、器高10.6cm、底径7.5cmである。底部の円板を作り、体部を作り上げていった痕跡が観察できる。体部外面は縦方向の平行タタキ、口縁部はヨコナデで仕上げる。色調はにぶい橙色である。323・324は丸底の甕である。323は口径14.9cm、器高16.8cmで明黄褐色を呈する。体部には縦方向の平行タタキが施され、最後に底部にタタキを施して仕上げている。324は口径13.6cm、器高21.6cmである。色調

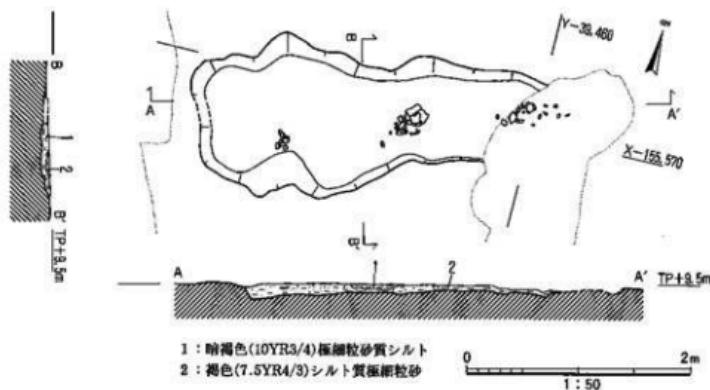


図88 SK703実測図

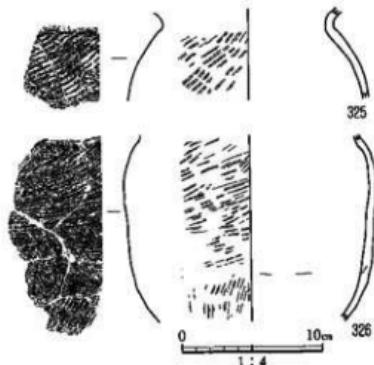


図89 SK703出土土器

質極細粒砂で、上位に暗褐色極細粒砂質シルトがわずかに残る。

SK703からは甕325・326が出土した(図89、図版34)。325は口縁端部を欠く。色調はにぶい橙色で焼成は良好である。体部外面に斜め方向のタタキを施す。内面は剥離が著しく調整は不明である。326は体部である。底部付近は縱方向のタタキ、体部は右上がりのタタキを施している。色調は灰黄褐色で焼成はよい。これらは畿内第V様式に属する。

vi) 旧石器～縄文時代(図90・91、図版35)

II～IV区の南端にかけて、長原12C層に相当する第15層の層中で石器遺物がまとまって出土した。これらは「馬池谷」の南東斜面に沿って認められたもので、年代に幅があることからも原位置を留めてはいないと推定される。ただし、石核や剥片類が多く含まれ、近くに旧石器時代の石器製作址が存在した可能性が高いため、ここでまとめて記載する。なお、これらの石器遺物の石材はすべてサヌカイトである。

327はA-2類の凹基無茎式石鎚である。逆刺は丸く仕上げられている。作用部側縁は直線的に仕上げられ、表裏ともていねいな細部調整が施される。先端部はわずかに欠損する。縄文時代前半である。

328～332はナイフ形石器である。329は厚みのある横形剥片を素材とする。表面は右側縁側にポジティブ面とみられる平坦な剥離面と中央部に先行剥離面であるネガティブ面一面がわずかに残される。一側縁加工で、整形剥離は表面左側縁に裏面側からていねいに施される。裏面右側縁には打面縁部が残る。328・330・332は国府型ナイフ形石器で、いずれも一側縁加工である。328・330は翼状剥片を素材とする。328の表面は石核底面に当る

は明赤褐色で、黒斑が認められる。323と同様の調整で仕上げられる。焼成はおむね良好である。これらの土器は5世紀半ば頃にさかほる可能性がある。

v) 弥生時代

第14層の基底面で土壙1基が確認された(図78)。

SK703(図88)はIV区に位置する隅丸長方形の土壙で、長さは3m以上ある。西側で幅が1.0mと広く、東では0.7mと狭くなる。

深さは0.15mである。埋土は褐色のシルト

ポジティブ面と先行剥離面であるネガティブ面各一面で構成される。整形剥離は表面左側縁に裏面側からいねいに施されて、鋸歯状の縁部となるように仕上げられる。330の表面は石核底面に当るポジティブ面と3つのネガティブ面で構成されるが、うち基部側の2つのはネガティブ面は石核作業面の補正・調整作業を目的として剥離されたものであろう。一側縁加工で、鋸歯状の縁部となるように整形剥離が施される。断面形は中央部で台形を呈する。332は横形剥片を素材とする

が、瀬戸内技法第2工程のファースト・フレイクの可能性が高い。表面は石核底面に当る平坦な剥離面と基部側に残存する疊面で構成される。表面右側縁の平坦な剥離面はネガティブ面とみられる。整形剥離は表面左側縁に主に裏面側から施される。非常にていねいな細部調整であり、先端部は対向調整によって尖銳に仕上げられる。331は横長剥片を素材としたもので、先端部以外を大きく欠損している。一側縁加工とみられる。

333・334は翼状剥片である。333は上半部を欠損する。表面は石核底面の平坦な剥離面と2面のネガティブ面で構成される。石核底面はポジティブ面かネガティブ面か判別できない。また、表面の2面のネガティブ面は1回の剥離によって生じたものと思われる。334の打面縁部は分厚く、刃部の角度も直角に近い。表面は石核底面のポジティブ面とネガティブ面の2面で構成され

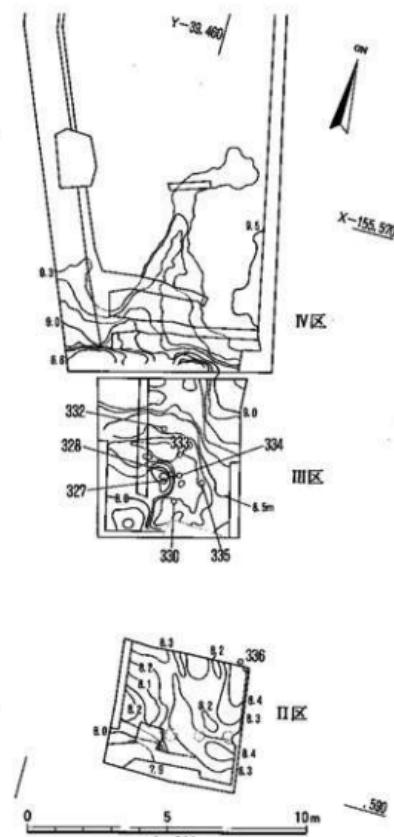


図90 石器遺物出土位置

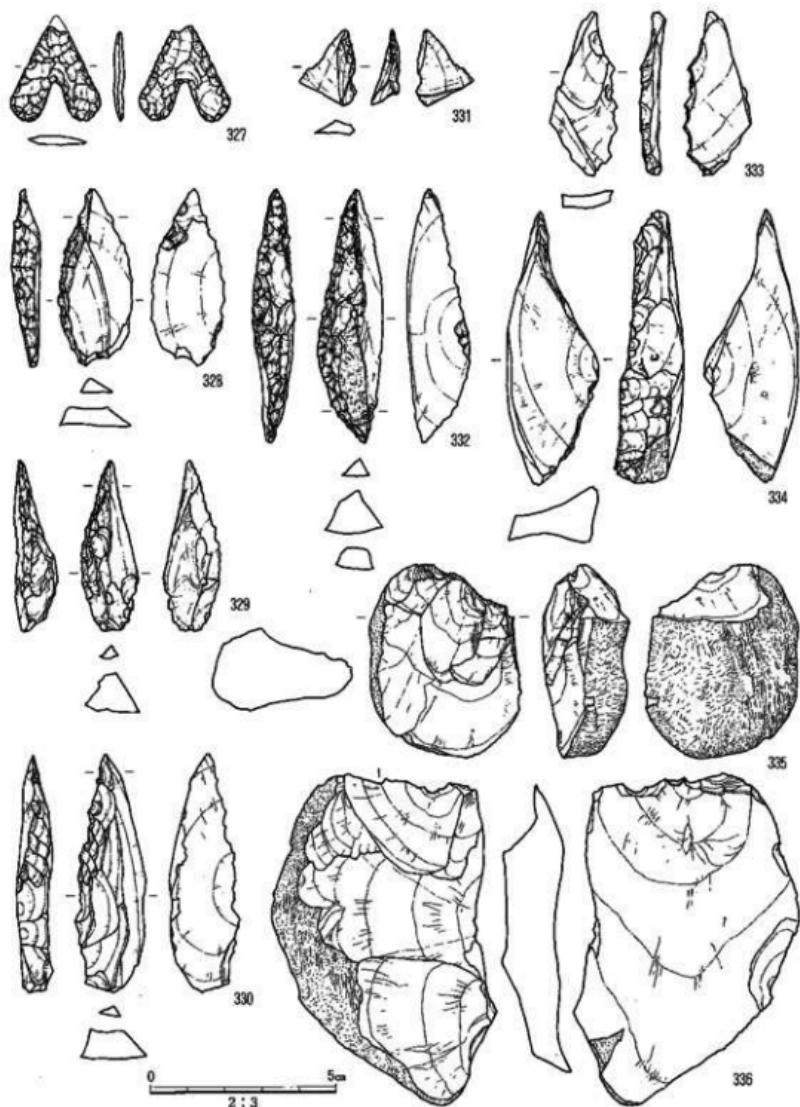


圖91 第15層出土石器遺物

る。打面調整は山形をなすよう比較的ていねいに行われている。

335は石核で、円碟の分割片を素材としている。打面は单剥離面打面で、輻広の剥片が複数剥離される。

336は板状の剥片である。表面には側縁の方向から剥離された複数のネガティブ面が認められる。石核などの素材剥片として供されたものと思われる。

3) 小結

今回の調査では以下の成果が得られた。

まず、奈良時代から近世にかけては当地には水田が営まれており、近世には土地区画が現在のものに近くなったことが推測された。このなかで興味深い遺構としては第6層の上面で見つかった土壇状遺構が挙げられる。また、遺物としては奈良時代の溝から鉄鎌が出土した。これは着柄の状況を知りうる貴重な資料である。

I~IV区南端にかけて検出された第10層で埋没する落込みは、南東における調査で確認された落込みの続きであり、「馬池谷」に向って東南から北西方向へ延びる支谷のひとつがあったことが推定できる。今回の調査では、この落込み内で奈良時代の溝状の遺構が確認できた。この遺構につながるものは、周辺の調査では確認されておらず、今後の調査に期待される。

飛鳥時代の土壇や溝と推定される落込みからはTK209型式(飛鳥I)に属する遺物が数多く出土した。また、北部では時期は定かでないものの、建物の柱穴が複数確認されている。なお、これらの柱穴は方形のものが円形のものを切っており、建物に時期差があったことが判明している。

飛鳥時代には「馬池谷」を挟んで西側から瓜破遺跡東南地区にかけて大規模な建物群が営まれておらず、これらは時期の異なる2群に分けられている[高橋1999・大庭2000b]。今回出土した遺物は前述の建物の中では古い方の一群と同時期かややさかのぼる時期であり、谷を挟んだ東側ではこれまでに出土例はほとんど知られていない。これらの資料は前述の建物群の直前に「馬池谷」の東側にも集落域が存在した可能性を示すものといえるだろう。

古墳時代の遺構としては柱穴や竪穴住居が見つかった。また、この時期の遺物は谷状の落込み内からほぼ完形の輪式系土器がまとまって見つかったり、飛鳥時代の遺構からも一定量が出土している。当地から北にかけては古墳時代の集落が拡がると推定されている。また、「馬池谷」の東では調査区の南や東にかけて集落遺構が希薄となり、その周縁に古墳

群が分布していることから、当時の集落は谷沿いに拡がり、今回の調査区が集落域の南限となることが指摘できよう。先に述べた「馬池谷」の支谷が、集落構造の分布に地形的な制約をきたしていたことも推測される。

弥生時代では畿内第V様式の壇が出土した土壙を挙げることができる。付近では従来、あまり当該期の遺構は知られておらず、長原遺跡西南地区における遺構の分布を知る貴重な手がかりとなった。

第IV章 長原遺跡南地区の調査結果

第1節 97-36次調査

1)層序とその遺物

i)層序(図92、表9、図版17)

南壁で地層の観察を行った。

第0層の現代客土以下は作土層が続いている。第1層の現代作土は部分的に残っていることを考えると、整地の前に除去されていたと思われる。なお、現代客土を掘削した段階で、古墳の墳丘の一部が露出した。この古墳は長原遺跡で207番目に検出されたものであ

表9 97-36次調査の層序

標示番号	層序	層相	厚さ (cm)	地層	おもな遺物	特徴	共通遺物
NG0	0	現代客土	≤130				
NG1	1	現代作土	≤20				
NG2	2	灰オリーブ色(3YS/2)板細粒砂質シルト	10~30	X		作土	
NG2~3	3a	灰オリーブ色(2.5YS/1)板細粒砂	10		瓦器・埴輪	水成	
NG3	3b	黄褐色(2.5YS/3)板細粒砂質シルト	≤10			作土	
NG4B	4	にぶい黄褐色(2.5Y4/0)砂質シルト	≤20		土器器	作土	
NG5	5	黄褐色(2.5YS/3)板細粒砂～塊、 黄褐色(2.5YS/3)板細粒砂	≤10		須恵器・土器器・埴輪	水成	337
NG6Ai	6a	にぶい黄褐色(2.5Y6/1)板細粒砂質シルト	≤15	▲SR601 ↓SD601	瓦器・須恵器・ 土器器・埴輪	作土	343・344
NG6Bi	6b	黄灰色(2.5Y6/1)板細粒砂質シルト	≤15		須恵器・土器器・ 埴輪・竹筒	作土	342
	7a	オリーブ褐色(2.5Y4/0)シルト	≤10		須恵器・埴輪	古墳周辺 埋土	338~341
NG7B	7b	古墳底土	≤40	▲長原207号墳	須恵器・伴生土器	客土	
NG7B以下	8	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト	≤10		石器		345
NG13以下	9	灰白色(2.5Y8/1)シルト	≥80				

ことから、長原207号墳と命名した。

第2・3b・4層はいずれも作土であり、第2層と第3b層の間に水成層である第3a層が部分的に残っている。第4層は長原4B層に相当する作土層で、下位の第5層に由来する砂礫を多く含む。ほとんどが第3b層の段階に耕作されたときに削られており、断片的にしか分布しない。

第5層は上部は黄褐色極粗粒砂～礫層、下部は黄褐色極細粒砂層である。調査区のはば全域に分布する。長原5層に比定される。

第6a層は調査区のはば全体に分布する作土層で、長原6Ai層に相当する。上面で畦畔1条、基底面で溝1条を検出した。長原207号墳に由来すると思われる埴輪片を多数含む。

第6b層は長原6Bi層に相当すると思われる作土層で、調査区の東半分でおもに見られるが、それ以外の地区では断片的にしか残っていなかった。長原207号墳に由来すると思われる埴輪片を多数含んでいた。

第7a層は長原207号墳の周溝の機能時堆積層で、埴輪・須恵器が出土した。

第7b層は第8層や第9層の偽礫で構成される古墳の盛土で、非常に固く締まっていた。もっとも厚い部分で40cmある。盛土内から須恵器や弥生時代後期の土器片が出土した。

第8層はにぶい黄褐色シルト層で、層厚は10cm前後である。長原207号墳の盛土の下にのみ分布する。石巖345が出土した。長原7B層以下の土壤化した地層と考えられる。

第9層：灰白色シルト層である。長原13層以下の段丘構成層に相当する。

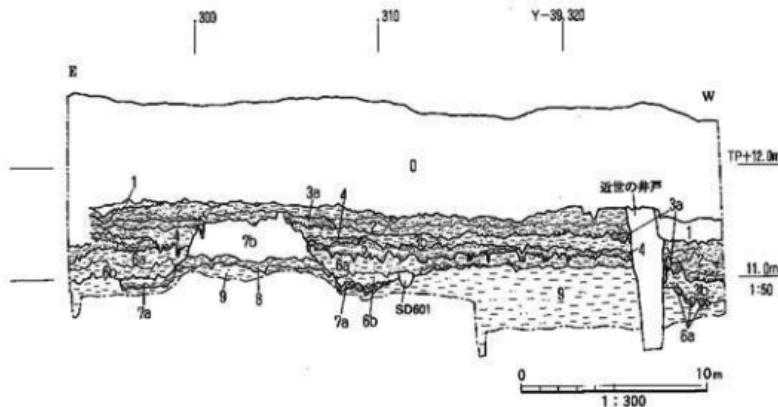


図92 97-36次調査区南壁断面図

ii) 各層出土の遺物(図93、図版36)

本調査では、各層の時期を決定する遺物は出土しなかったが、本来長原207号墳に伴つていて、遊離したと思われる須恵器や円筒埴輪が出土した。円筒埴輪については細片が多くため、図化できたもののみ掲載した。

337は第5層出土の須恵器杯蓋である。口径は13.4cmに復元でき、灰色を呈し、焼成は良好である。TK23型式に属するものであろう。343・344は第6a層、342は第6b層出土の埴輪片である。343は灰白色を呈する。円形のスカシ孔があり、タガの断面は三角形を呈する。外面はクテハケ、内面はナデで調整する。344は円筒埴輪の底部である。タガの断面は台形である。外面はタテ方向のハケ、内面はナデで調整する。342はタガの断面が高い台形である。

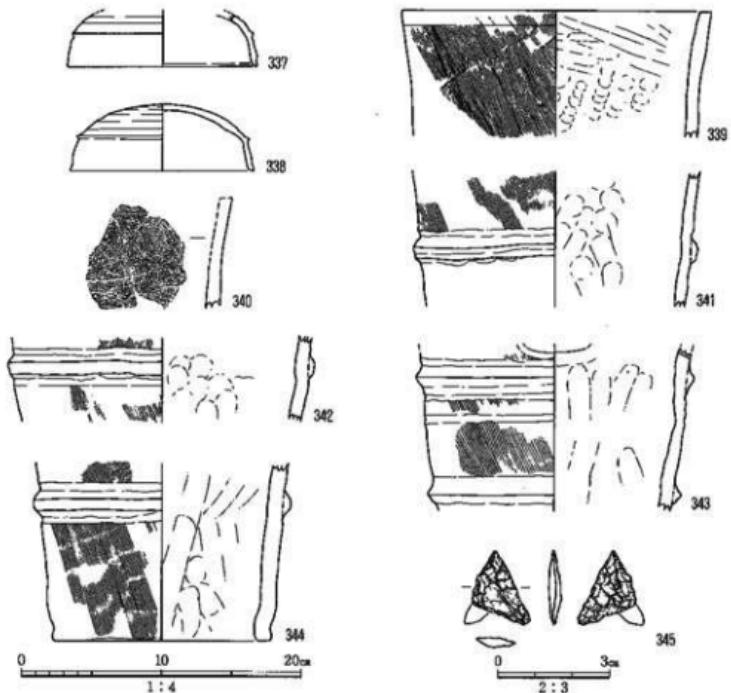


図93 各層出土遺物

第5層(337)、第6a層(343・344)、第6b層(342)、第7a層(338～341)、第8層(345)

る。外面はタテハケで調整し、内面はユビオサエで仕上げている。いずれもV期に属するものであろう。

345は第8層から出土した凹基無茎式石鐵であり、一方の逆刺を欠く。D-2類に属するものと思われる。

2) 造構とその遺物

i) 奈良時代(図94)

a) 第6a層上面検出造構

長原207号墳の墳丘の北東コーナーに取付く畦畔SR601を検出した。幅は0.4m、高さは0.1mで、墳丘から北北東方向に延びる。

b) 第6a層底面検出造構

SD601 南北に延びる溝で、幅は約0.8m、深さ0.2mである。埋土は黄灰色極細粒砂質シルトの水成層で、遺物は出土しなかった。NG82-27次調査で見つかった溝SD04と一緒にるものと思われる〔大阪市文化財協会1990a〕。

ii) 古墳時代(図95、図版17・18)

長原207号墳を検出した。一辺が8m前後に復元できる方墳で、北東コーナーと西辺を確認した。西辺の方位はN10°Eである。周溝は検出面での幅が約2.5~3.2m、深さが約0.1

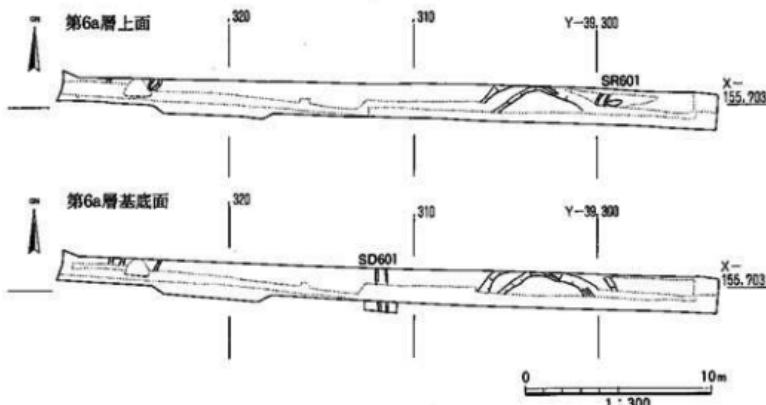


図94 奈良時代の造構平面図

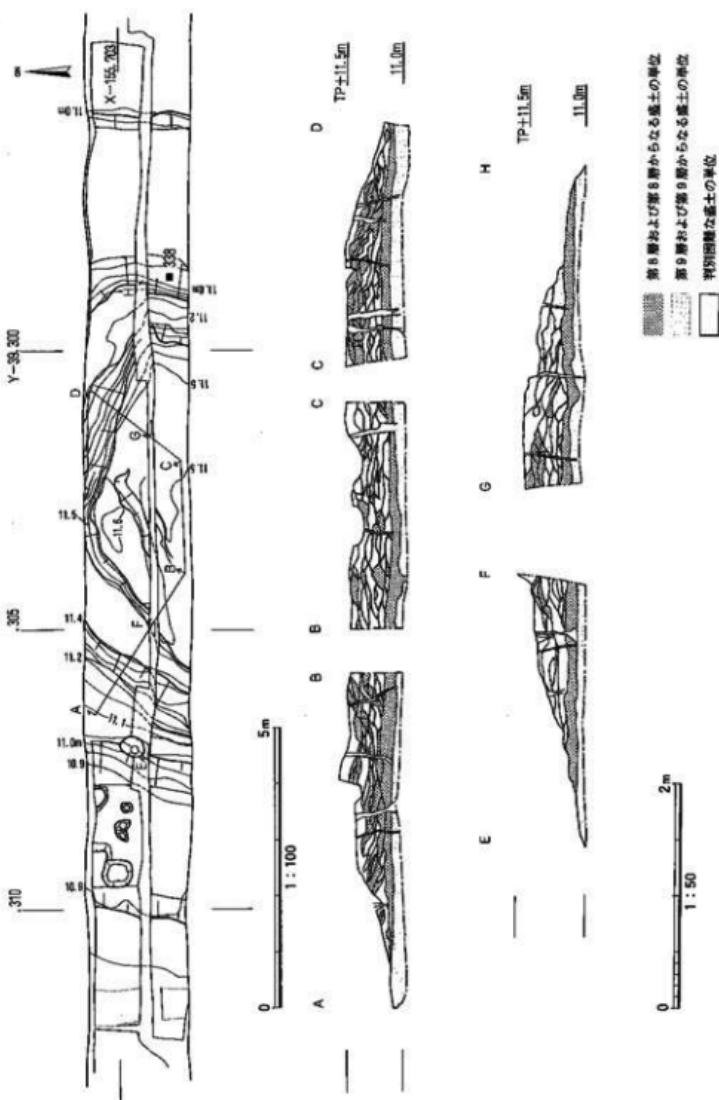


図95 長原207号墳実測図

mある。旧地表と考えられる第8層上面から測ると、深さは約0.3mとなる。

古墳の構造を解明するため、北辺、西辺に直交する方向と、調査区の南壁に沿ってサブトレンチを入れて断面を精査した。その結果、主体部は残っていなかったものの、盛土が第8層の上面から0.4mあまり残っていることが判明した。

盛土は第8層および第9層の偽礫で構成されており、厚さ約10cmの鱗状の盛土の単位が明瞭に観察できた。墳丘の裾付近は、奈良時代の耕作によって盛土の残りはよくなかったが、断面A-Bでは墳丘裾付近で、第8層を中心とした盛土を確認した。本来は土手状の盛土が墳丘構築初段階に築かれたことが考えられる。また、墳丘中央から土饅頭状に土が盛られている状態が確認できた。

以上の断面観察をまとめると、墳丘の構築過程は次のように考えられる。

I. 主に第8層の偽礫で墳丘の輪郭付近に土手状に盛土を巡らす。

II. 主に第9層の偽礫で中心付近から土饅頭状に土を盛っていく。

III. 両者の高まりの間を第8層・第9層の偽礫で埋めていく。

ただし、これらの過程には中断は見られず、一気に盛ったものと考えられる。

周溝の機能時堆積層である第7a層からは338の須恵器杯蓋、339~341の円筒埴輪が出土した(図93、図版36)。

338は完形の須恵器杯蓋で、古墳の北東コーナー付近で出土した(写真11)。口径13.2cm、器高4.8cmで、灰色を呈し、焼成は良好である。天井部と口縁部の間の稜線は鋭く、口縁端部は明瞭な面をもつ。TK23型式に属するものであろう。

340は外面はタテハケ、内面はユビオサエで調整している。灰白色で、無墨斑である。340

は円筒埴輪の破片と思われ、外面はタテ方向のハケ、内面はユビオサエで調整する。外面にヘラ記号を施す。339は口径21.9cmに復元できる。外面は細かいタテハケ、内面は斜め方向のナデで調整しており、外面にはヘラ記号を刻んでいる。口縁端部はほぼ平坦である。これらの埴輪はV期に相当するものであろう。



写真11 長原207号墳須恵器出土状況

周溝より出土したTK23型式の須恵器杯蓋の年代観から、この古墳造営の時期は5世紀末頃と考えられる。

3) 小結

今回検出した古墳は、一辺約8mに復元される方墳で、長原古墳群ではもっとも一般的な規模である。主体部は見つからなかったものの、盛土が良好に残っており、構築過程を復元することができた。墳丘の輪郭に沿って土手状の盛土をしたのち、中央から土を盛っていくという構築過程は、長原76号墳[大阪市文化財協会1999c]など近隣の小型方墳でも観察されている。

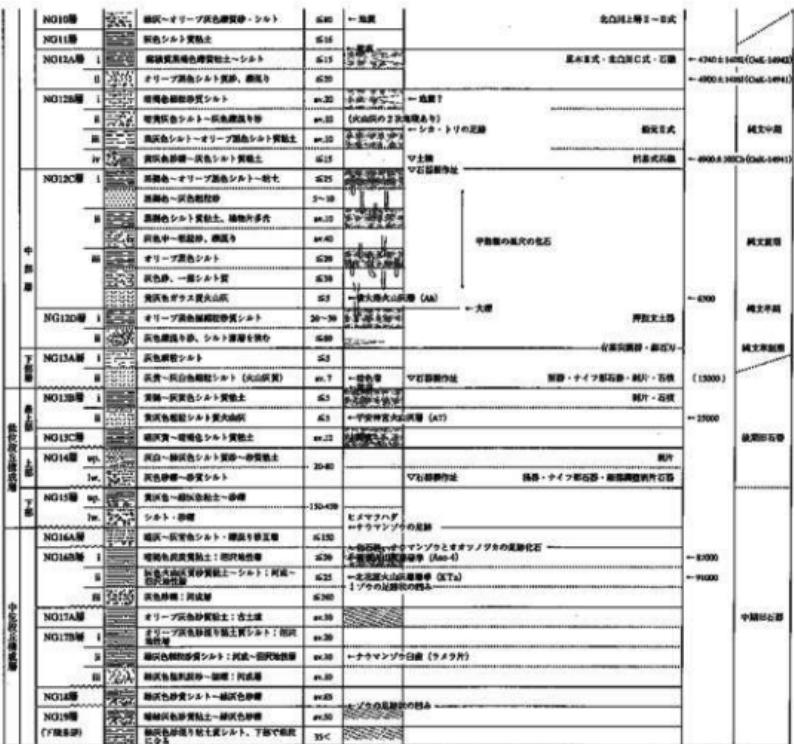
長原6Bi層の時期以降は、この古墳の周囲も水田化される。この時点で墳丘裾はかなり削平されてしまったようである。その後、長原5層の砂礫層によって多くの小古墳は埋没してしまうが、当地では砂礫が約20cmと薄く、完全に埋没しなかった。その後も当地では水田開発が進行するが、古墳は削平されずに長らく地表に露出していたようである。それは調査時に現代客土層を剥がした段階で、墳頂が露出したことからも明らかである。

幅2mという非常に細い調査区であったにもかかわらず、古墳の構造に加え、その後の土地利用をある程度復元することができた。これらの成果は長原遺跡の古墳では一般的ではあるものの、新たな事例を加えることになった。

別 表

別表1 長原遺跡の標準層序2001[越哲済2001]

層序	岩相	WST (cm)	石器遺物 の有無	おもな遺物・遺物	C.Ly.P	時代
NG0層	褐色土。	—				近代・現代
NG1層	褐色砂土。	15-25				近世
NG2層	含鉄褐色土・黄褐色シルト質粘土	6-14	○	1.小石器・石刀 2.石器 3.小石器・石器・角貝	(400)	室町
NG3層	含鉄褐色土・灰褐色土質シルト	12-28	○	1.小石器・石器 2.石器		
NG4A層	含鉄褐色土質シルト	9-12	○	1.小石器 2.石器		
NG4B層 I	褐灰色シルト 褐色土質シルト	20-28	○	1.小石器・石器 2.石器		室町
II	褐色土質シルト	20-25	○	1.小石器・石器		
III	褐色土質シルト	20-25	○	1.小石器・石器 2.土器	(800)	室町
NG4C層 I	褐色褐色シルト質粘土	20-25	○	1.小石器・石器 2.石器		平安
II	褐色褐色シルト質粘土	20-25	○	1.小石器・石器 2.石器		
NG5層	灰色沙砾、シルト質褐色土質粘土	10-20				室町末～尾
NG5B層	褐色褐色土質粘土	2-4		1.骨器		室町
NG6A層 I	褐色褐色土質粘土シルト	5-20	△ニシ	1.木炭		室町末
II sp.	褐色褐色土質シルト	5-15	△ニシ	1.木炭		
III br.	褐色褐色土質シルト	5-15	△ニシ	1.ヒトと同時に見つかる		
NG6B層 I	合灰・褐褐色土質粘土シルト質粘土	5-15	△ニシ	1.木炭		戦国～近
II	合灰・褐褐色土質粘土シルト質粘土	5-15	△ニシ	1.木炭		
NG7A層 I	合灰褐色土質粘土	5-15	△ニシ	1.木炭		戦国
II	合灰褐色土質粘土	5-15	△ニシ	1.木炭		
NG7B層	褐色褐色土質粘土シルト	5-20	△ニシ	1.土手	TK10	古墳後期
I	褐色褐色土質粘土・風化シルト	5-25	△ニシ	1.土手	TK11	古墳中期
II	褐色褐色土質粘土・風化シルト	5-15	△ニシ	1.土手	TK12	古墳中期
III	褐色褐色土質シルト	5-15	△ニシ	1.土手	TK13	古墳後期
NG8A層	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		後生中期
NG8B層	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
NG8C層 I	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		後生中期
II	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
III	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
NO8A層	褐色褐色土・褐色土	5-15		1.石器		後生中期
NO8B層	褐色褐色土・褐色土	5-15		1.石器		
NG9C層 I	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		後生中期
II	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
III	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
NO9A層	褐色褐色土・褐色土	5-15		1.石器		後生中期
NO9B層 I	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
II	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
III	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
NG10C層 I	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		後生中期
II	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
III	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
NO10A層	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		後生中期
NO10B層	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
NG11C層 I	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		後生中期
II	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
III	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		
NO11A層	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		後生中期
NO11B層	褐色褐色土・褐色土	5-20		1.石器		



十一、水銀散劑處理 二十二、水銀蒸氣處理 三三、油煙內燃氣處理

◎ 次一輯

[新智桥1995] 4-改变

引用・参考文献

- 植木久1998、「発掘遺構から見た倉庫建築の構造とその変遷－飛鳥・奈良時代を中心に」：奈良国立文化財研究所編『古代稻倉と村落・郷里の支配』、pp.115-130
- 大阪市文化財協会1982、「八百邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-4)略報」
- 1990a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」II
- 1990b、「長吉長原西市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-63)略報」
- 1992、「長原遺跡発掘調査報告」V
- 1993、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」VI
- 1996、「長原遺跡発掘調査報告」VII
- 1997a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」IX
- 1997b、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」X
- 1999a、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」II
- 1999b、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」XIII
- 1999c、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」XIV
- 2000a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」XV
- 2000b、「長原遺跡発掘調査報告」VI
- 2000c、「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告」
- 2001、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」XII
- 大庭重信2000a、「1区建物群の変遷」：大阪市文化財協会編『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.169-175
- 2000b、「周辺の状況からみた建物群の性格」：大阪市文化財協会編『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.180-182
- 岡田茂弘1966、「木製品・金属製品」：『平城宮跡発掘調査報告』IV 奈良国立文化財研究所学報第17冊、pp.33-37
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪總説」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95-164([川西宏幸1988]に再録)
- 1988、「古墳時代政治史序説」 塩書房
- 京嶋覚1990、「水田遺構と古代の長原」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』II、pp.294-306
- 1992、「飛鳥時代の土器とその時期」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』IV、pp.149-154
- 1993、「5・6世紀の集落構成の復元とその特質」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VI、pp.241-258
- 黒田慶一2001、「加美遺跡でまた、繪馬発見！」：大阪市文化財協会編『葦火』90号、p.6
- 古代の土器研究会編1992、「古代の土器 I 郡城の土器集成」
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102

- 2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265
- 佐原眞1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2、pp.53-72
- 菅栄太郎1995、「石器資料の型式および製作技法の編年的検討」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.367-387
- 「ソウの足跡調査法」編集委員会1994、「ソウの足跡化石調査法」地学ハンドブックシリーズ9 地学団体研究会高橋工1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-106
- 2000、「飛鳥時代の集落について」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV、pp.145-149
- 田中清美2000、「飛鳥時代須恵器・土師器の編年的位置付け」：大阪市文化財協会編『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.163-168
- 田辺昭三1966、「陶邑古窯址群」I 平安学園考古学クラブ
1981、「須恵器大成」 角川書店
- 趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44
- 2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7-28
- 辻美紀1998、「長原遺跡から出土した分類形土製品」：大阪市文化財協会編『葦火』72号、p.6
- 奈良県教育委員会1995、「SD5300出土木製品」：『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王・藤原麻呂邸の調査—』、pp.324-333
- 奈良国立文化財研究所1976、「平城宮発掘調査報告」Ⅷ 奈良国立文化財研究所学報第26巻
1985、「鎌」：『木器集成圖錄 近畿古代編』、pp.17-18
- 豆谷浩之1996a、「古代の加美遺跡ー出土したさまざまな遺物をめぐってー」：大阪市文化財協会編『葦火』64号、pp.4-5
- 1996b、「加美遺跡で出土した古代の絵馬」：大阪市文化財協会編『葦火』65号、pp.4-5
- 南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』8号、pp.2-4
- 村元健一1998、「鎌、千年の隔たり」：大阪市文化財協会編『葦火』74号、p.8
- 森島康雄1995、「編年」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.324-330

あとがき

新たな世紀を迎えると同時に、20年以上におよぶ長吉瓜破土地区画整理事業も、それに伴う発掘調査も終わりを迎えようとしている。振り返れば、調査が始まった当初は田畠が一面に広がるのどかな景色が広がっていたが、いつのまにか住宅が建て込み、交通量も多い繁華な地域へと移っていった。それに比例して発掘調査の成果も蓄積されたのであり、この地域の繁栄と衰退が年々明らかになりつつある。古代以来の田園地帯にふたたび「集落」が作られていく景観には感慨深いものがある。このような思いを少しでも地域、市民に還元すべく我々は努力せねばならない。とくに近年の歴史に対する関心の高まりには目を見張るものがあり、少しでもそうした需要に応えるべく調査、資料の整理により邁進していく所存である。

末筆ではあるが、本書をなすに当っては関係各位には並々ならぬ協力を賜った。改めて謝意を表すとともに、今後とも当協会の事業への変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げる。

(松尾信裕)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞とを一括して収録した。

M	MT15型式	21, 34, 38, 87	菅玉	55
O	ON46型式	27, 31, 37	け 畦畔	10, 17, 41, 42, 46, 90,
T	TK10型式	26, 27, 31, 38, 42, 44, 109		91, 93, 98, 100, 101, 118, 120
	TK23型式	23, 34, 36, 38, 44, 107, 119, 122, 123	剣形模造品	45
	TK47型式	26, 34	す 水田	46, 80, 84, 85, 98, 100, 101, 115, 123
	TK208型式	26, 31, 32, 34, 36, 38, 88, 93	せ 製塙土器	26, 31, 34, 39, 44
	TK209型式	55, 66, 69~71, 73, 77, 78, 103, 107, 109, 110, 115	石築	13, 45, 56, 93, 96, 112, 118, 120
	TK216型式	24, 26, 27, 34, 37	た 積穴住居	18, 21, 37~39, 49, 66, 69, 70, 74, 78, 89, 102, 115
	TK217型式	55, 73, 77	て 鉄錆	7, 101, 102, 106, 115
あ	飛鳥 I	73, 77, 78, 80, 106, 107, 109, 115	と 砥石	11, 44, 64
	飛鳥 II	73, 80	な ナイフ形石器	56, 84, 93, 96, 112
い	井戸	18, 32, 38, 39, 75, 80	長原76号墳	123
う	ウシ	42, 47, 50	長原207号墳	118~120
	臼玉	26, 45, 107	ふ 分銅形土製品	55
	ウマ	42, 47, 50	へ 平安時代Ⅱ期	64
	馬池谷	3, 4, 37, 40, 51, 74, 75, 78~81, 89, 111, 112, 115, 116	平安時代Ⅲ期	55, 63
	瓜破遺跡	48, 115	平城宮土器 I	12
え	絵馬	42, 49	平城宮土器 II	42, 47, 50
	円筒埴輪	21, 119, 122	平城宮土器 III	12, 42, 44, 47, 48, 50
か	滑石製品	106, 111	平城宮土器 V	42, 44
	轟	23, 38, 39, 69, 78	平城宮土器 VI	42, 44
	加美遺跡	48, 49	平城宮土器 VII	49, 102
	韓式系土器	24, 26, 89, 111, 115	ぼ 挖立柱建物	4~6, 18, 21, 37~39, 49, 58, 61, 66, 67, 74, 84~
	管状土錐	12, 44, 55, 107, 109	ま 曲物	86, 111
き	畿内第V様式	112, 116	ゆ 有孔円板	47, 49
く	クサビ	96	わ 和同開珎	107
				42, 47, 48, 50

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XVII

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1997

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

SA : Palisade or fence

SB : Building or pit-dwelling

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole or pit

SR : Paddy field baulk

SX : Other features

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Outline and progress of research work	1
S.1 The outline of excavations in 1997	1
1) Excavations	1
2) Procedure of publishing this report	1
S.2 Outline and progress of excavations	3
1) Western sector of the Nagahara Site	3
2) South-western sector of the Nagahara Site	4
3) Southern sector of the Nagahara Site	7
Chapter II Results of research in the Western sector of the Nagahara Site	9
S.1 Research area NG97-8	9
1) Stratigraphy and finds from each stratum	9
i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum	
2) Features and finds	13
i) The Edo Period	
ii) From the Heian to Muromachi Periods	
iii) The Nara Period	
iv) The Kofun Period	
3) Conclusion	37
S.2 Research area NG97-55	40
1) Stratigraphy and finds from each stratum	40
i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum	
2) Features and finds	45
i) The Nara Period ii) The Kofun Period	
3) Conclusion	49
Chapter III Results of research in the South-western sector of the Nagahara Site	51
S.1 Research area NG97-18 & 49	51
1) Stratigraphy and finds from each stratum	51
i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum	
2) Features and finds	58
i) The Edo Period	
ii) From the Kamakura to Muromachi Periods	

iii) The Heian Period	
iv) The Asuka Period	
3) Conclusion	74
 S.2 Research area NG97-29	81
1) Stratigraphy and finds from each stratum	81
i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum	
2) Features and finds	84
i) From the Heian to Edo Periods	
ii) The Kofun Period	
3) Conclusion	89
 S.3 Research area NG97-60	90
1) Stratigraphy and finds from each stratum	90
i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum	
2) Features and finds	96
i) The Edo Period	
ii) From the Heian to Kamakura Periods	
iii) The Nara Period	
iv) From the Kofun to Asuka Periods	
v) The Yayoi Period	
vi) From the Palaeolithic to Jomon Periods	
3) Conclusion	115
 Chapter IV Results of research in the Southern sector of the Nagahara Site .	117
S.1 Research area NG97-36	117
1) Stratigraphy and finds from each stratum	117
i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum	
2) Features and finds	120
i) The Nara Period	
ii) The Kofun Period	
3) Conclusion	123
 Table of Stratigraphy at Nagahara Site 2001	126
 Bibliography	128
 Postscript	
Index	
English Contents and Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

Introduction

The Nagahara site is located in southeastern Osaka city and contains archaeological materials dating from the Palaeolithic to the Edo Period. This report covers the excavations undertaken in seven areas around the Nagahara site (with a total area of 2,532m²) following the rezoning of land in the Nagayoshi and Uriwari districts in fiscal 1997. The investigated areas consist of two western excavation areas (NG97-8 and NG97-55), four southwestern areas (NG97-18 & 49, NG97-29 and NG97-60) and one southern area (NG97-36). Below is an outline of the notable materials recovered and phenomena observed during these excavations arranged chronologically by archaeological period.

Palaeolithic, Jomon, and Yayoi Periods

Previously observed in this area were a variety of remains from the Palaeolithic, Jomon, and Yayoi periods. Though artifacts of these periods were not observed in primary contexts in these excavations, some of these materials were recovered outside of their associated strata.

Kofun Period

Remnants of posts from *hottatebashira-tatemono* which means a ground-level structure or an elevated structure, a pit-dwelling, a well, ditches, a fence and pit features were found and all presumed to be dating from the Middle to earlier half of Late Kofun period in the NG97-8 excavation. The pit-dwelling and the well in the western portions of the excavation area are separated from the possible *hottatebashira-tatemono* to the east by the ditch and the fence remains. Salt-making earthenware fragments recovered from the ditch suggest that the salt was consumed in daily life. Therefore, the western portion of the area is interpreted as having been a cooking area and the eastern portion, separated from the western portion by the ditch, was likely a residential areas.

However, the ditch may also suggest hierarchical division between the two areas. This problem requires further investigation.

Also at the NG97-60 excavation, earthenware heavily influenced by South Korean production and design techniques and dating to the Middle Kofun period was recovered from a depression. When examined along with residential features from the Middle Kofun period previously found around this area, it appears that the residential area in the Middle Kofun period expanded to the south along the *Umaikedani* valley.

Asuka Period

The remains of a settlement from the early Asuka period were observed in the NG 97-18 excavation. The remains included the remnants of posts from five ground-level or elevated structures and the remains of one pit-dwelling. The settlement was located

on the western side of the north-south running *Umaikedani* valley, west of the Nagahara ruins. Near this excavation area, the remains of other buildings from the same period have been observed. With the buildings of NG97-18 included, the settlement is now known to consist of at least 12 buildings. Structures from a slightly later period were found in the area southeast of the Uriwari site, at a point about 500m southwest of the area excavated in NG97-18. Moreover, in the NG97-60 investigations, located about 250m east of the NG97-18 excavation, on the east side of the *Umaikedani* valley, archaeological materials of a slightly older period were found. It is assumed that since these structures are similar in form, the settlement gradually moved from the east side of *Umaikedani* valley to the west side.

Nara Period

A complete Nara period sickle with the handle still attached was recovered from the NG96-60 excavations. There has yet been very little evidence to suggest how the sickles from Nara period were assembled and as such, this particular artifact provides invaluable information in interpreting the construction of these artifacts.

Heian Period

A pit and ditch for the collection of water along with the remnants of posts from a surface or elevated building attributed to the Heian period were found in the NG97-18 & 49 excavation areas. The water-collection ditches are of particular interest because they are considered to be an example of Heian period agricultural water management. The pits were most likely used as settling tanks to produce clean water from muddy water for agricultural use.

Kamakura and Later Periods

All of the investigated areas revealed remains of agricultural features from these later periods. During the Kamakura and later periods, agricultural lands were spread over a wide area in and around the Nagahara site. Features observed in the excavations discussed in this report provide further evidence for such agricultural activities in those periods.

Further reading

Osaka City Cultural Properties Association

1989-2000 *Archaeological Reports of the Nagahara Uriwari sites* Vols.I-XV, Osaka
(In Japanese, with English summary except for Vols.I-III)

報告書抄録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはくつちょうさほうこく 17							
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XVII							
副書名	1997年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	寺井誠・小田木富恵美・村元健一・Matthew W. Van Pelt・松尾信裕							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂 1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード (市町村 道路番号)	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
長原遺跡	大阪市平野区 長吉長原西2丁目 長吉長原3丁目 長吉川辺1丁目	27126	—	34°36'00" 34°34'40"	135° 40°	8次 19970408~19970919 18次 19970512~19971216 29次 19980309~19980331 36次 19970617~19971015 49次 19970801~19971003 55次 19971119~19980207 60次 19971203~19980331	252 1322 150 72 165 146 425	土地区画整理事業 (長吉瓜破地区)施 行に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
長原遺跡	集落	旧石器時代		ナイフ形石器				
	田畠	縄文時代		石器				
	古墳	弥生時代後期	土壤 1	甕				
		古墳時代	古墳 1基	土師器・須恵器・円筒埴輪・ 韓式系土器・製塙土器・滑石製品				
		その他	掘立柱建物 7棟 竪穴住居 2棟 井戸 1・溝・土壤					
		飛鳥～奈良時代	掘立柱建物 5棟 竪穴住居 1棟 溝・土壤・畦畔	土師器・須恵器・土鏡・鐵鎌・ 和同開珠				
	平安時代	畦畔・溝	土師器・黑色土器・灰陶器					
	鎌倉～江戸時代	畦畔・島畠・溝	土師器・瓦器・国産陶磁器・ 輸入磁器・瓦					

原色図版

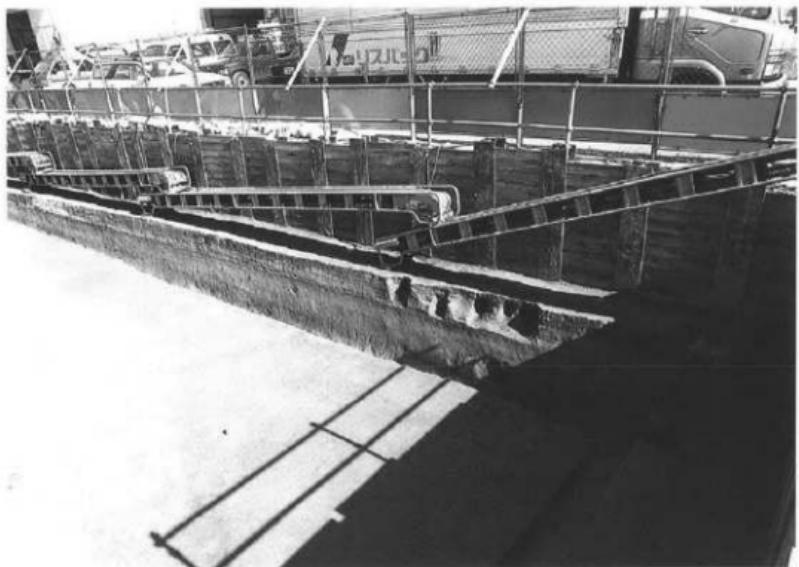


97-8次調査で出土した須恵器・土師器



97-60次調査で出土した韓式系土器

図 版



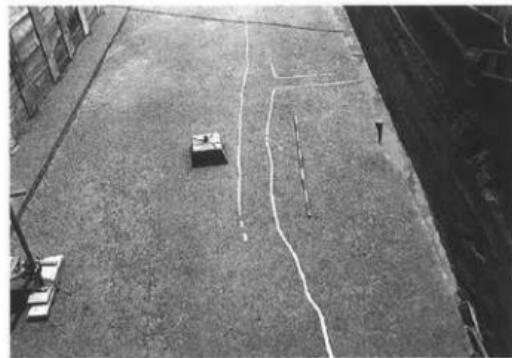
南壁断面(北西から)



SX201・202完掘状況(西から)



SD403完掘状況(南から)



第5a層下面遺構検出状況(西から)



SD601鉄製品出土状況(北から)



古墳～奈良時代遺構検出状況(西から)



古墳時代遺構完掘状況、
SD705以東(西から)



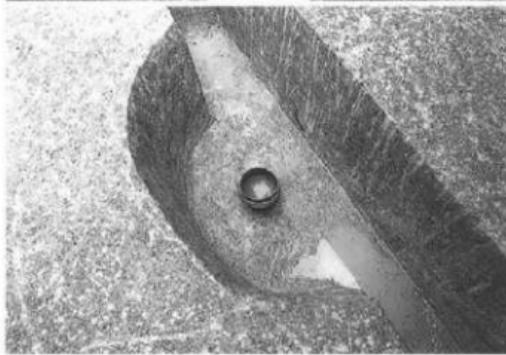
古墳時代遺構完掘状況(西から)



SB707(南から)



SD705断面(南から)



SE701(南東から)

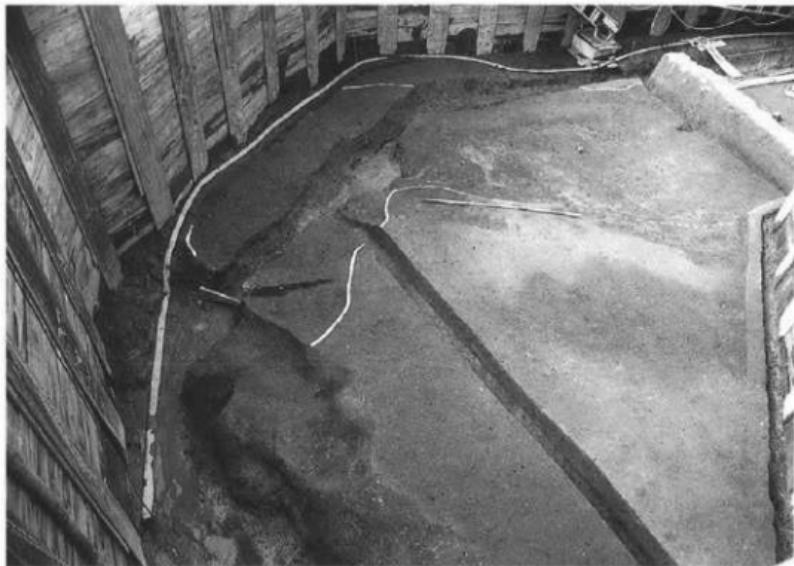


西壁断面(北から)

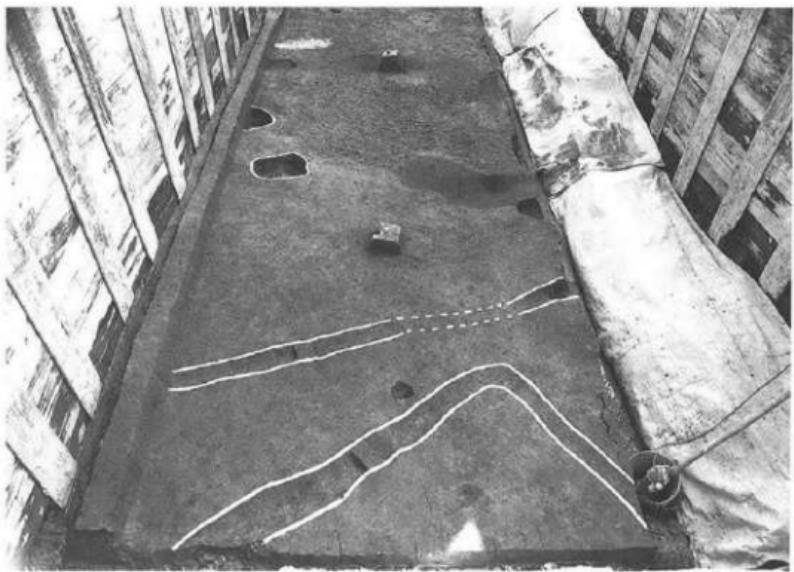


第6ai層上面遺構検出状況(南から)

図版六 長原遺跡西地区97-55次調査 古墳・奈良時代の遺構



SD601完掘状況(東から)



第7層基底面遺構完掘状況(北から)



近世の土砂採掘場
(南から)



中世の耕作遺構(北から)



平安時代の遺構検出状況(東から)



平安時代の遺構完掘状況(東から)



長原15・16層断面(西から)



大型哺乳類足跡化石(北から)



飛鳥時代の遺構
(南から)



SB706(南から)



SB702柱穴断面(北から)



SB701(手前)と
SB702(北から)



SB703(手前)とSB704(北から)



西壁地層断面(北から)



第7層下面遺構完掘状況(北から)



SD201完掘状況(北から)



SB401完掘状況(南から)



SD703検出状況(西から)



Ⅲ区西壁地層断面(東から)



第2層下面遺構完掘状況(南から)



第6層上面遺構検出状況(南から)



SX401検出状況(東から)



SD601(北から)



SD601鉄鎌出土状況
(東から)



SR601(東から)



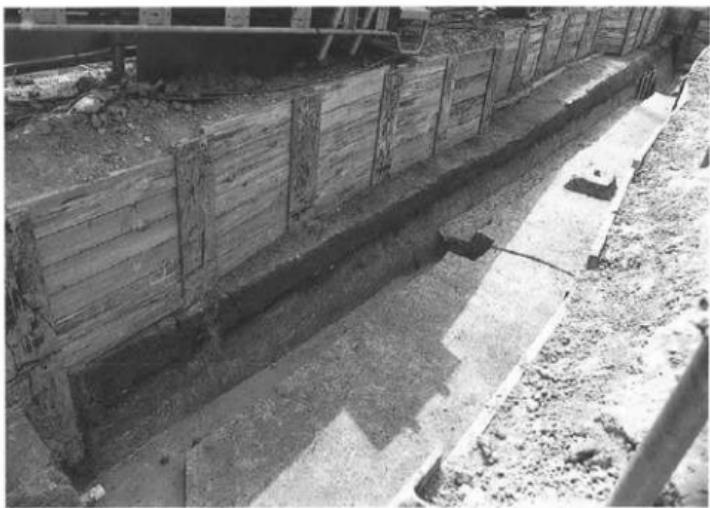
第9層基底面検出遺構
(南から)



SX701遺物出土状況
(南から)



SX704遺物出土状況
(北から)



南壁地層断面(北から)



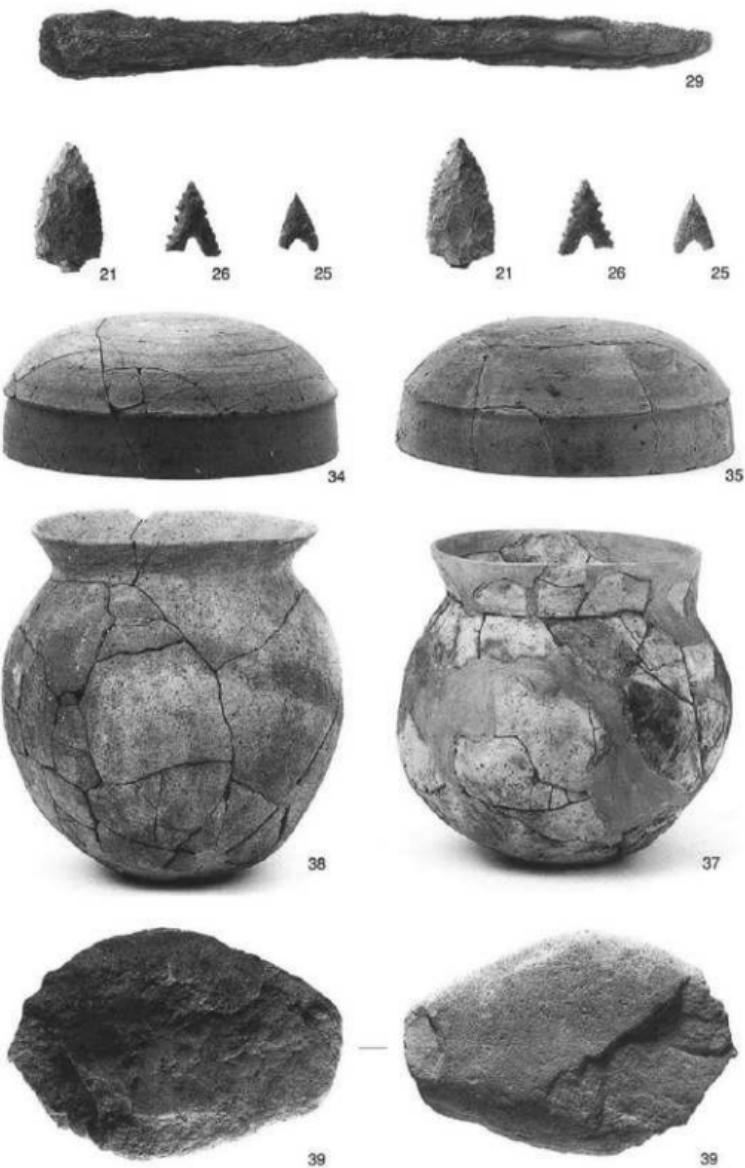
長原207号墳(東から)



長原207号墳(西から)



長原207号墳墳丘断面(東から)



第4b層(25)、第5b層(21・26)、SD601(29)、SB707(34・35・37~39)



SD704(40~43)、SD705(48・50・62)、SK707(107)



56



57



65



52



67



58



68



61



60

SD705(52・56~58・60・61・65・67・68)



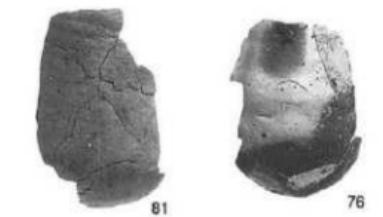
63



108



71



81

76



72



75



59

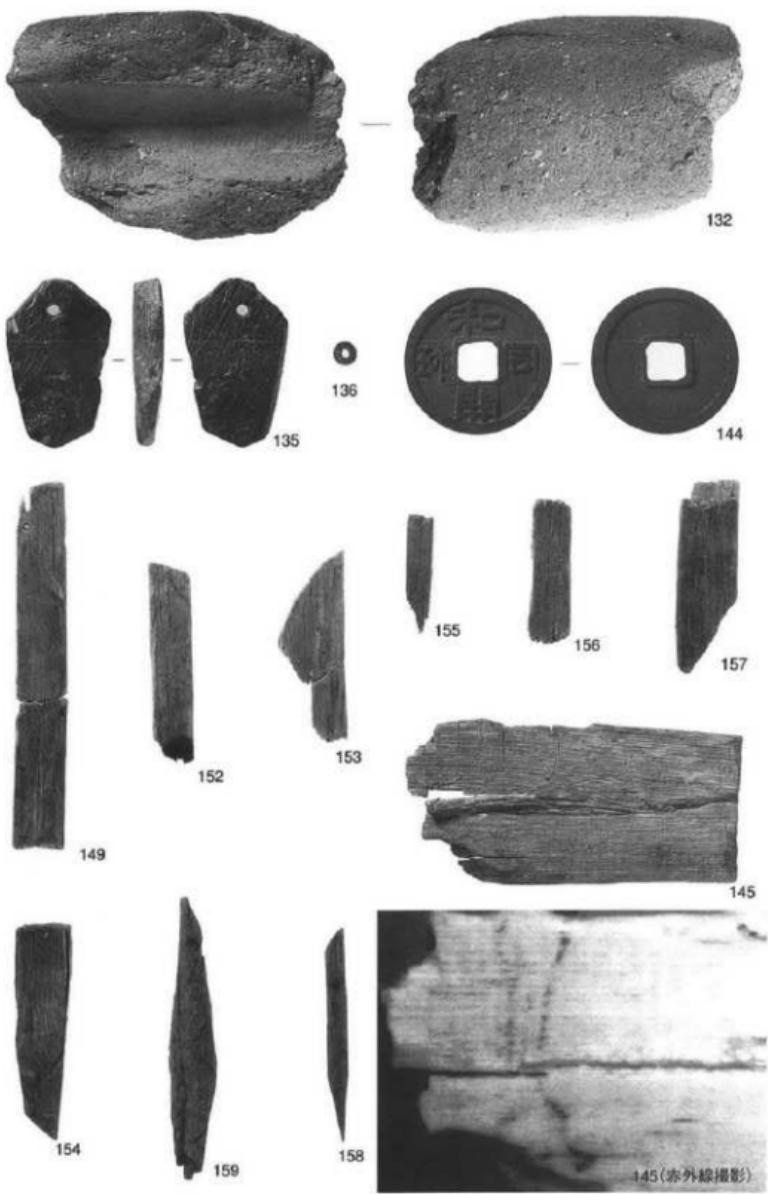
SD705(59・63・71・72・75・76・81)、SK707(108)



SD705(69・73)、SE701(86)、SK706(92・93・97)、SK707(103~105・110)



第3層(114~116)、第4bi層(117・118)、第5b層(122・123)、第6bii層(125)、第6c層(138・139・
141~143)、第7層(127・129・131)



第6bi層(136・145・158・159)、第6c層(135・144・149・152・153~157)、第7層(132)



163



162



167



181



192



182



191



185



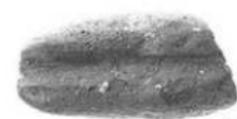
186



169



190



170



171

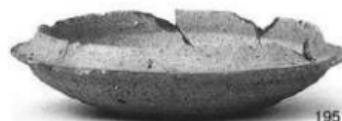


168

第1層(171)、第3層(162・163・168・169)、第4層(167・170)、SK401(181・182・185・186)、SD401(190・191)、SD404(192)



203



195



197



199



205



200



204

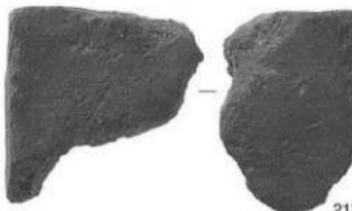


209

第1層(172)、第4層(173~175)、SB706(195・197)、SD701(209)、SD705(199・200・203・204)、
SD711(205)



226



213



227



221



219



222



223



220



224



225

第6a層(213)、SD702(219・220)、SD703(221)、SK701(222～227)



第5層(232・233)、第6層(234・235・238)、第8層(239・242)、第12層(250)、第14層(244・245)、
SD601(266)



279



312



267



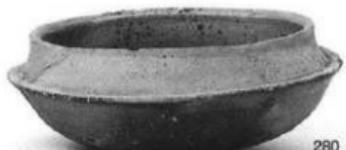
283



277



284



280



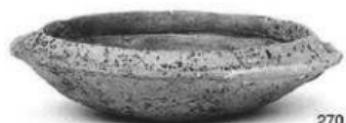
272



269



282



270

SX701(267~270・272・277・279・280・282~284)、SX702(312)



274



289



286



288

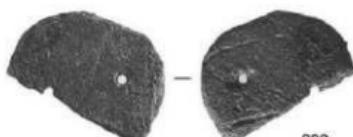


290



291

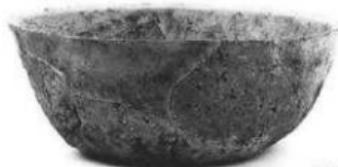
SX701(274・286・288~291)



303

304

305



295



285



299



298

SX701(285・295・298・299・301~305)



SX701(300)、SX702(306~308・310・314・315・317・318)



322



324



323

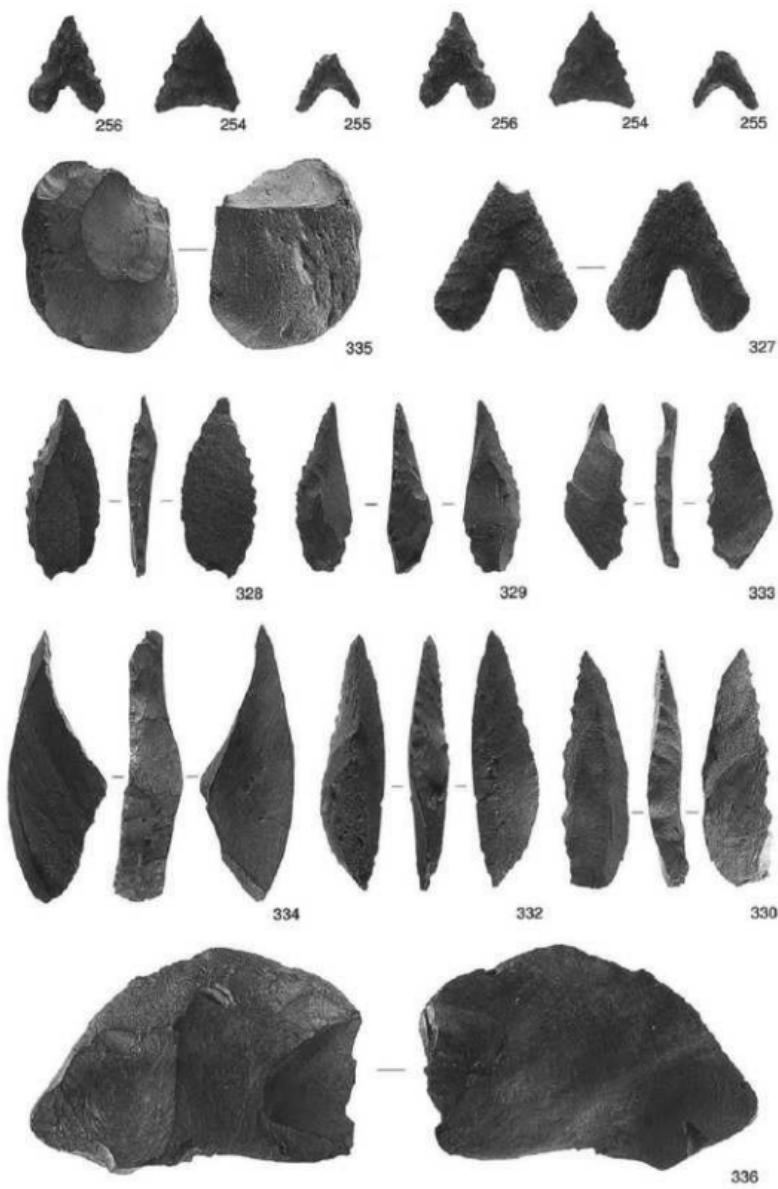


326

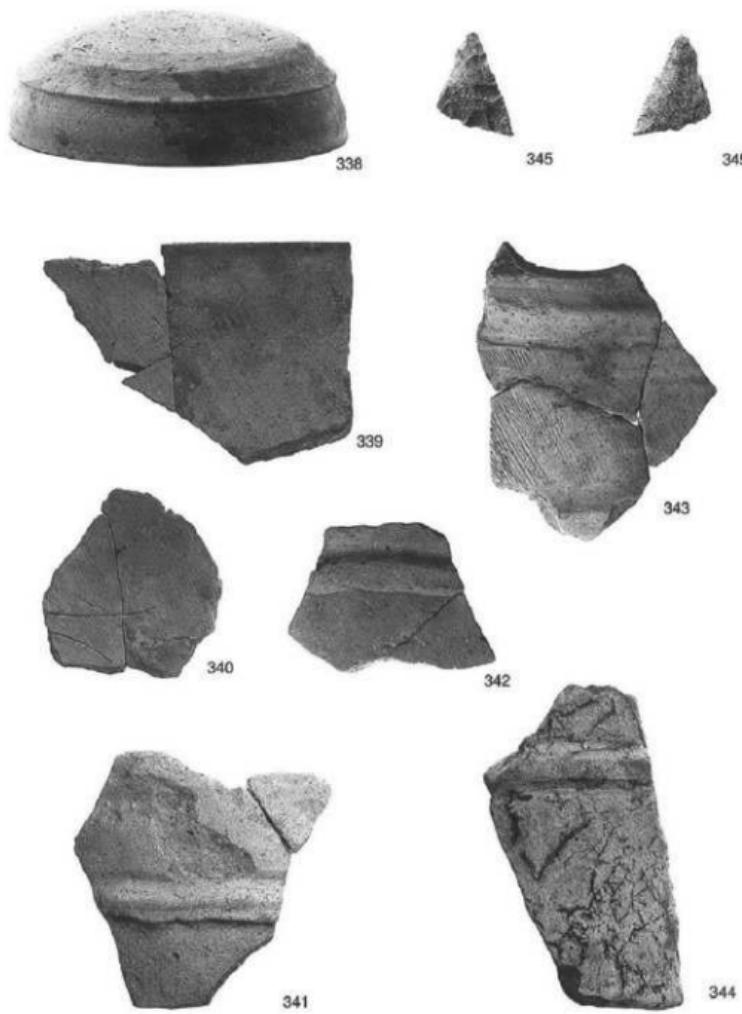


325

SX704(322~324)、SK703(325・326)



石鏃(254~256・327)、ナイフ形石器(328~330・332)、異状剥片(333・334)、石核(335)、剥片(336)



第6a層(343・344)、第6b層(342)、第7a層(338~341)、第8層(345)

大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XVII

ISBN4-900687-49-9

2001年3月30日 発行 ©

編集・発行 財團法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-6943-6833 FAX 06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XVII

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1997**

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XVII

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1997

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association